

鳥山石燕／とりやま せきえん

正徳二年(1712年)～天明八年(1788年)、江戸の人。本名は佐野豊房。狩野派の絵師で、妖怪画を好んで描いた。その豊かな想像力で描かれた妖怪たちは、現代にいたるまで妖怪画家たちに大きな影響を与えてきた。

装画／鳥山石燕
(川崎市市民ミュージアム、東北大学附属図書館所蔵)



SP
319
Y667

鳥山石燕

鳥山石燕 画図百鬼夜行 全画集

角川ソフィア文庫

9784044051013

1920195006672

ISBN4-04-405101-1

C0195 ¥667E

定価：本体667円(税別)

かまいたち、火車、姑獲鳥、ぬらりひょん、狂骨……現代の小説や漫画でおなじみの妖怪たち。その姿形をひたすら描いた江戸の絵師がいた。あふれる想像力と類いまれなる画力で、さまざまな妖怪の姿を伝えた鳥山石燕の妖怪画集全点を、コンパクトな文庫一冊に収録！
(解説・多田克己)

カバー 泉文社

K

面図百鬼夜行

陰摩羅鬼

蔵經の中に、初て新なる屍の氣變じ
て陰摩羅鬼となる、と云へり。そのか
たち鶴の如くして、色くろく目の光と
もしびのごとく羽をふるひて鳴声たかし、と清尊録にあり。



陰摩羅鬼

蔵經の中に、初て新なる屍の氣變じて陰摩羅鬼となる、と云へり。そのかたち鶴の如くして、色くろく目の光ともしびのごとく羽をふるひて鳴声たかし、と清尊録にあり。



さら
皿かぞえ

ある家の下女十の皿を一つ井におとし
たる科によりて害せられ、その亡魂よ
なよな井のはたにあらはれ、皿を一よ
り九までかぞへ十をいはずして泣叫ぶといふ。此古井は播州にありとぞ。



ひと だま
人魂

こつにく つち こん き
骨肉は土に帰し、魂氣の如きはゆかざることなし。み
る人 ^{すみやか}速に下がへのつまをむすびて ^{せうごん}招魂の法 ^{おこな}を行ふべ
し。



舟幽霊

西国また北国にても海上の風はげしく浪たかきときは、波の上に人のかたちのもののおほくあらはれ、底なき柄杓にて水を汲事あり。これを舟幽霊といふ。これはとわたる舟の楫をたえて、ゆくえもしらぬ魂魄の残りしなるべし。

ふな ゆう れい
舟幽霊

れを舟幽霊といふ。これはとわたる舟の楫をたえて、ゆくえもしらぬ魂魄の残りしなるべし。

川赤子
 山川のくずのうちに、赤子のかたちしたるものあり。これを川赤子といふなるよし。川太郎、川童の類ならんか。



かわ あか ごと
川赤子

山川のもくずのうちに、赤子のかたちしたるものあり。これを川赤子といふなるよし。川太郎、川^{わらは}童の類ならんか。



ふる つ ば き れい
古山茶の霊

ふる^{つばき}山茶の精怪^{せいあや}しき形^{かたち}と化^けして、
人をたふらかす事ありとぞ。す
べて古木^{こぼく}は妖^{よう}をなす事多し。

かゝ年波理入道

晦日の夜、厠にゆき
て、がんにふれれば、妖怪と見え
るよし、世俗のしる所也。もろこしにては厠神の名を郭登といへり。
これ遊天飛騎大殺將軍とて、人に禍福をあたふと云。郭登郭公同日の談
なるべし。



加牟波理入道

大晦日の夜、厠にゆき
て、がんにふれれば、妖怪を

見ざるよし、世俗のしる所也。もろこしにては厠神の名を郭登といへり。
これ遊天飛騎大殺將軍とて、人に禍福をあたふと云。郭登郭公同日の談
なるべし。



あめ ふり こ ぞう
雨降小僧

雨のかみを^{うし}雨師といふ。雨^{あめ}ふり小僧^{こぞう}といへるものは、めしつかはるゝ侍童にや。



ひより ぼう
日和坊

るは、この^{れい}霊を^{まつ}祭れるにや。

じやうしやう しんざん うてん かげ
常州の深山にあるよし。雨天の節は影見えず。
ひより かたち ふじんぢよし
日和なれば形あらはるゝと云。今婦人女子てる
てる法師といふものを紙にてつくりて^{はれ}晴をいの



青女房

荒たる古御所には青女房とて女官のかたちせし妖怪、ぼうぼうまゆに鉄漿くろぐろとつけて、立まふ人をうかゞふとかや。

あお によう ぼう
青女房

あれ える ごしよ によろくはん
荒たる古御所には青女房とて女官のかたちせし妖怪、ぼうぼうまゆに鉄漿くろぐろとつけて、立まふ人をうかゞふとかや。

序文

凡物の化するや、石の燕となり筆の蟋蟀となるは、よく化すといふべし。こゝに鳥山石燕なるもの、画にあそぶこと年あり。その筆亦よく化して、森羅万象なさずといふものなし。さきに鳥山彦を著し、世人しる処なり。今はた古画の百鬼夜行に拠て意を加へ容を補ふ。書肆あり、はやく見とゞめて梓に寿せんことをこふ。授るに至て六巻となし、陰陽風雨晦明をもてわかつ。其まゝに画図百鬼夜行と題し、已に前編三冊成ぬ。こゝに於て序を予にもとむ。燕は俳歌の友にして相識ことひさしければ、辞におよばず。たゞ怪力乱神をきたらざるのいましめをまもる人には、いさゝか睭を避るのおもひなきにしもあらざるのみ。

安永龍歳乙未冬東都隠士紫陽主人老蚕



け じょう ろう
毛倡妓

ある風流士うかれ女のもとにかよひけるが、高
 どの 楼のれんじの前にて女の髪うちみだしたるうし
 ろ影をみてその人かと前をみれば、額も面も一
 チめんに髪おひて、目はなもさらにみえざりけり。おどろきてたえいりけ
 るとなん。



牡丹燈籠記とてあり
 骨女
 御伽ばうこに見えたる年ふる女の骸骨、牡丹の
 燈籠を携へ、人間の交をなせし形にして、もとは剪燈
 新話のうちに牡丹燈記とてあり。

ほね おんな
骨女

これは御伽ばうこに見えたる年ふる女の骸骨、牡丹の
 燈籠を携へ、人間の交をなせし形にして、もとは剪燈
 新話のうちに牡丹燈記とてあり。



○ 鶴 ねえ

○ 以津真天 いっつまて

○ 邪魅 じやみ

○ 魍魎 もうりやう

○ 貉 おじな

○ 野衾 のぶすま

○ 野槌 のづち

○ 土蜘蛛 つちぐも

○ 比々 ひひ

○ 百々目鬼 どどめき

○ 震々 ふるふる

○ 骸骨 がいこつ

○ 天井下 てんじようくだり

○ 大禿 おおかぶろ

○ 大首 おおくび

○ 百々爺 ももんぢ

○ 金霊 かねたま

○ 天逆每 あまのざこ

○ 日の出 ひで





ぬえ
鵺

ぬえ しんざん けてう よりまさ きる とら
鵺は深山にすめる化鳥なり。源三位頼政、頭は猿、足手は虎、
お いぶつ め こえ ぬえ に
尾はくちなはのごとき異物を射おとせしに、なく声の鵺に似た
ればとて、ぬえと名づけしならん。



いで
天眞津以

ひろあり
広有、いつまでいつまでと鳴し怪鳥を
射し事、^{たいへい き}太平記に委し。



邪魅ハ
魍魎ノ
類ナリ
妖邪ノ
悪氣ナルベシ

じや み
邪魅

じやみ ちみ たぐり ようじや あくき
邪魅は魍魎の類なり。妖邪の悪氣なるべし。



鬼嬰

形三歳の小児の如し。色ハ赤黒し。目赤く、耳長く、髪うるはし。

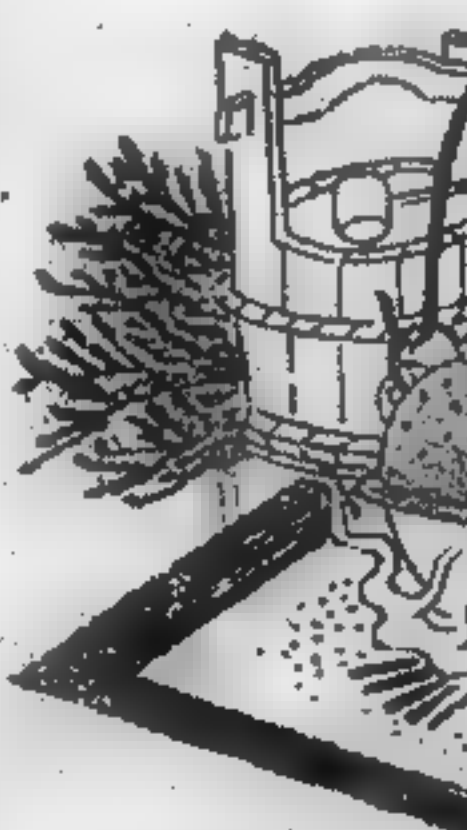
このんで亡者の肝を食ふと云。

もう りよう
鬼嬰

かたち さい せう に いろ あかくろ め あか みなが
形 三歳の小児の如し。色は赤黒し。目赤く、耳長く、
かみ 髪うるはし。このんで亡者の肝を食ふと云。



貉なまの化なりるなりすなりとなり
 狐きつね狸りはおとろばある辻堂つじどうに
 年としよりむづみ僧そうとなんけく
 六時の勤ごころおこしぎりが食後の一睡ひとふしを忘れぐ尾おと生うぜり





野衾のぶすまハ鼯かきの事なり

形蝙蝠こうぼうに似く
毛生ひく翅つばきも即

肉なり四の足

あまじとも短く

爪長くして木の實みをも

喰くらひ又ハ火焰くわえんをもくへり

野衾のぶすま

野衾のぶすまは鼯わさびの事なり。形蝙蝠かたちかうもりに似て、毛生ひて翅つばきも即
肉なり。四の足あしあれども短く爪長くして、木の實みをも
喰くらひ、又ハ火焰くわえんをもくへり。



野づち

種。槌は草木の霊をいふ

又沙石集に見えたる

野づちといへるもの

目も鼻もなき物也といへり

の 野づち

野づち さいもく れい 野づちは草木の霊をいふ。又沙石集に見えたる野づちといへるものは、目も鼻もなき物也といへり。



○木魅 こたま

○天狗 てんぐ

○幽谷響 やまひこ

○山童 やまわらわ

○山姥 やまうば

○犬神 いぬがみ

○白兎 しらちど

○猫また ねこ

○河童 かっぱ

○獺 かわうそ

○垢嘗 あかなめ

○狸 たぬき

○窮奇 かまいたち

○網剪 あみきり

○狐火 きつねび



土蜘蛛

源頼光土蜘蛛を退治

し給ひし事、
兒女の
ある所



つちぐも
土蜘蛛

源頼光土蜘蛛を退治し給ひし事、兒女のしる所也。



比々

ひ、は^{さんちう}山中にすむ^{けもの}獣にして、^{もうじう}猛獣をとりくらふ事、^{たか}鷹の^こ小鳥をとるがごとしといへり。



百々目鬼

函関外史云ある女生れて
手長くしてつねに人の錢をぬすむ。忽腕
に百鳥の目を生ず。是鳥目の精也。
一説に
東都の地名ともいふ。

百々目鬼

名づけて百々目鬼と云。外史は函関以外の事をするせる奇書也。一説に
とゞめきは東都の地名ともいふ。



ぶる ぶる
震々

ぶるぶる又ぞゞ神ともおくべろがみ臆病神ともいふ。人おそるゝ事
あれば、身み戦栗せんりつしてぞつとする事あり。これ此神のゑ
りもとにつきし也。



がい こつ
骸骨

けい うんほう し がい こつ まさん
慶運法師骸骨の絵賛に、かへし見よおのが心はなに物
ぞ色を見声をきくにつけても



てん じよう くだり
天井下

むかし茨木童子は綱が伯母と化して破風をやぶ
りて出、今この妖怪は美人にあらずして天井
より落。世俗の諺に天井見せるといふは、かゝ

るおそろしきめを見する事にや。



おお かぶろ
大禿

伝へ聞、^{ほうそ}彭祖は七百余歳にして猶^{せいどう}慈童と称す。是大^{おほ}禿^{かぶろ}にあらずや。日本にても^{なちかうや}那智高野には頭禿^{かうべかぶろ}に齒^{はあばら}豁^{はあばら}なる大禿^{おほかぶろ}ありと云。しからは男禿^{おとこかぶろ}ならんか。



大首

大凡物の大なるもの

皆おそろし

いはんや雨夜の星明りに鉄槌くろぐろとつけたる女の首おそろし

なんとも

おそろし

大首

大凡物の大なるもの皆おそろし。いはんや雨夜の星明りに鉄槌くろぐろとつけたる女の首おそろし。なんともおろか也。



百々爺

百々爺未詳。愚按ずるに、山東に摸捫窠と称するもの、一名野襖ともいふとぞ。京師の人小兒を怖しめて啼を止むるに元興寺といふ。も、んぐはとがごしとふたつのものを合せて、も、んちいといふ坎。原野夜ふけてゆき、たえ、きりとち風すごきとき、老夫と化して出て遊ぶ。行旅の人これに遭へば、かならず病むといへり。

きりとち風すごきとき、老夫と化して出て遊ぶ。行旅の人これに遭へば、かならず病むといへり。

百々爺

百々爺未詳。愚按ずるに、山東に摸捫窠と称するもの、一名野襖ともいふとぞ。京師の人小兒を怖しめて啼を止むるに元興寺といふ。も、んぐはとがごしとふたつのものを合せて、も、んちいといふ坎。原野夜ふけてゆき、たえ、きりとち風すごきとき、老夫と化して出て遊ぶ。行旅の人これに遭へば、かならず病むといへり。

金霊



かね だま 金霊

かね だまは金気也。唐詩に不_レ貪_二夜識_一金銀氣_二といへり。
又論語にも富貴在_レ天と見えたり。人善事をなせば天
より福をあたふる事、必然の理也。

○木魅^{こま}

百年の樹よハ
神ありてかたちを
何ハ成り



こ^こだま^{だま}
木魅

百年の樹には神ありてかたちをあらはすといふ。

天逆每

或書云素蓋烏尊

猛氣胸ニ満チ、

神ノ身獸首鼻高、

耳長雖ニ力、神懸、

刀ト雖モ、強堅、

刀ト雖モ、強堅、

天ノ逆每姫ト名ヅク。

天ノ逆氣ヲ服シ、

獨身ニシテ

摸捫窩主人贊



あまの ぎ こ

天逆每

或書ニ云フ。素蓋烏尊ハ猛氣胸ニ満チ、吐テ一ノ神ヲ為ス。人身獸首、鼻高ク耳長シ。大力ノ神ト雖モ、鼻ニ懸テ千里ヲ走ル。強堅ノ刀ト雖モ、嚙ミ碎テ段々ト作ス。天ノ逆每姫ト名ヅク。天ノ逆氣ヲ服シ、獨身ニシテ兒ヲ生ム。天ノ魔雄神ト名ヅクト云云。摸捫窩主人贊



夫妖は徳に勝むといへり。百鬼の闇夜に横
 するは、佞人の闇主に媚びて時めくが如し。大
 陽のぼりて万物を照せば、君子の時を得、明君
 の代にあへるがごとし。



ひ 日の出 で

それよう とく かた ひやくき あん や わうぎやう
 夫妖は徳に勝ずといへり。百鬼の闇夜に横 行
 するは、^{ねいじん}佞人の^{あんしゆ}闇主に媚びて時めくが如し。大
^{やう}陽のぼりて^{ばんもつ}万物を^{てら}照せば、^{くんし}君子の時を得、^え明^{めいくん}君

の代にあへるがごとし。



今昔百鬼拾遺

百鬼拾遺序

画師石燕は隱老なり。性質溫雅にして、庭に一簣の功を成し、池に九仞の泉を引て、春紅
 睨腕を聞き、夏涼沂樂を張る。秋水荻花を流し、冬雪関々を群す。四時此の樂事に耽て、
 老の將に至らんとするを知らざるなり。惟同好の者至れば、欣然として茶を烹じ、勉然と
 して画を談ず。既に筆を下すと、直ちに百余図を成すに足る。奕々玄勝、以て賞すべし。
 此に由て弟子益々衆し。成編も且つ多し。皆な世の知る所なり。丙申の春百鬼夜行を著す。
 己亥の歲、後編繼ぎ出して、前後百鬼全し。今茲に辛丑の春、書肆某又来て幽冥の図を請
 ふ。而して以て之を刻んと欲す。隱老笑つて曰く、多く之を図す。則ち啻に心力を損ずる
 のみならずして、譏りを千載に取る。但だ恐は鬼哭さん。夫れ之を何如、と。書肆曰く、
 画工は元と是れ無類の心を尽す。有道の器に合す。若し夫れ粟を雨し鬼哭するも、亦骨力
 の至る所にして、尚を佳事なり。強て請ふ、辞すること莫れ、と。是に於て已むこと無し
 て、怪を探り妖を聚めて三卷と為す。百鬼拾遺と題す。序を余に問ふ。余不才を以て辞す。
 隱老の曰く、負俗の図嬰兒の戲と為すのみ、と。不才にして且つ序を作す。則ち是れ一怪
 事なり。因て固陋を妄（忘）れて其の端に書す。

和歌はあめつちをうごかし、是は目に見へぬ鬼がみを絵空ごとに筆もて行まゝ、あやしうもの狂はしきさま、としごとにゑがくは、おぼろげならぬ世々の史林にもはづかはしく、ひめこめ侍るを、書肆某いへる、嬰兒のむつかるを止んはしかよりはなし。しきりに乞にまかせぬれば、松たつ春の勇ましきにあたひをまちて、估めやくとやら、桜木にのする事とはなりぬ

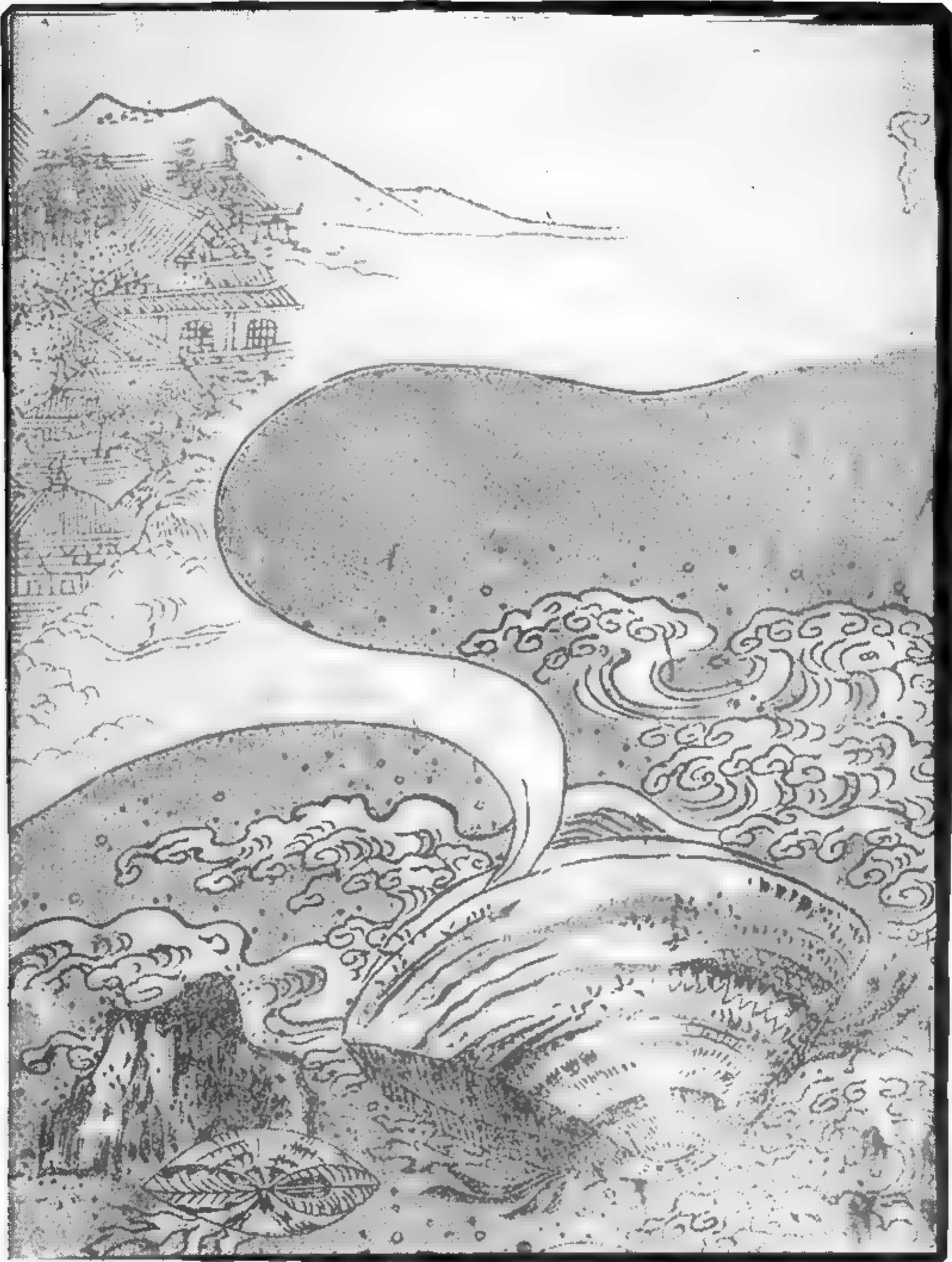
安永九のとし蠟月 石燕自序



○ 蜃気楼 しんきろう
○ 燭陰 しゆくいん
○ 人面樹 にんめんじゆ
○ 人魚 にんぎよ
○ 返魂香 ほんどんこう
○ 彭侯 ほうこう
○ 天狗磔 てんぐつぎ
○ 道成寺鐘 どうじょうじのかね
○ 燈台鬼 とうだいき

○ 泥田坊 どろたぼう
○ 古庫裏婆 こくりばば
○ 白粉婆 おしろいばば
○ 蛇骨婆 じやこつばば
○ 影女 かげおんな
○ 倩兮女 けらけらおんな
○ 煙々羅 えんえんら





史記の天官書にいはく、海旁蟹氣は樓臺に象と云々。蟹とは大蛤なり。海上に氣をふきて、樓閣城市のかたちをなす。これを蟹氣樓と名づく。又海市とも云。

蟹氣樓

史記の天官書にいはく、海旁蟹氣は樓臺に象と云々。

蟹とは大蛤なり。海上に氣をふきて、樓閣城市のかたちをなす。

これを蟹氣樓と名づく。又海市とも云。



蟹氣樓

名づく。又海市とも云。

史記の天官書にいはく、海旁蟹氣は樓臺に象
ると云々。蟹とは大蛤なり。海上に氣をふき
て、樓閣城市のかたちをなす。これを蟹氣樓と

燭陰
山海經に曰
鍾山の神を
燭陰といふ
身のたけ千里
そのかたち人面
龍身にして
赤色なりと
鍾山は北海
の地なり



しよく いん
燭陰

せんがいけう いはく しやうざん しん しよくいん
山海經に曰、鍾山の神を燭陰といふ。身のたけ千里、
そのかたち人面龍身にして赤色なりと。鍾山は北海
の地なり。





人面樹

山谷にあり。その花人の首のごとし。ものいはずしてたゞ笑ふ事しきりなり。しきりにわらへば、そのまゝ落花すといふ。

にん めん じゆ
人面樹

さんこく はな くび
山谷にあり。その花人の首のごとし。ものいはずしてたゞ笑ふ事しきりなり。しきりにわらへば、そのまゝ落花すといふ。

人魚

建木の西

あり人面

魚身足あり胸

より上人

下を魚に似たり

是氏人國の人なりとも云



人魚

建木の西にあり。人面にして魚身、足なし。胸より上は人にして下は魚に似たり。是氏人國の人なりとも云。



返魂香

漢武帝李夫人と寵愛し給ひしに、夫人みまがり給ひしかば、思念してやまず、方士に命じて返魂香をたかしむ。夫人のすがた髪髻として烟の中にあらはる。武帝ますますかなしみ詩をつくり給ふ。

是耶非耶立而望之
偏嬾々何冉々其来遲

返魂香

漢武帝李夫人を寵愛し給ひしに、夫人みまがり給ひしかば、思念してやまず、方士に命じて返魂香をたかしむ。夫人のすがた髪髻として烟の中にあらはる。武帝ますますかなしみ詩をつくり給ふ。

是耶非耶立而望之 偏嬾々何冉々其来遲



千歳ちさいの木きに精せいあり状よう黒狗くろいぬの
のこし。尾おなし。面おもて人ひとに似にたり。又山彦やまひことは別べつなり。

ほう こう
彭侯

千歳ちさいの木きには精せいあり。状よう黒狗くろいぬのごとし。尾おなし。面おもて人ひとに似にたり。又山彦やまひことは別べつなり。

天狗磔

深山幽谷の中より

一陣の魔風おこり

山鳴谷こたへて

大石をとばす事あり

是を天狗

磔と云

左伝に見えたる

宋におつる七つの

石も

うたがふらんかし



てん ぐ つぶて
天狗磔

およそしんぞんゆうこく 凡 深山幽谷の中にて一陣の魔風おこり、山鳴、
谷こたへて、大石をとばす事あり。是を天狗
磔と云。左伝に見えたる宋におつる七つの石も

うたがふらんかし。

道成寺鐘

其那古の庄司が娘、道成寺にいたり、安珍がつり鐘の中にかくれ居たるをしりて蛇となり、その鐘をまとふ。この鐘とけて湯となるといふ。或曰る其那古のつり鐘は今京都妙満寺にあり。紀州日高郡矢田庄



どう じょう じの かね
道成寺鐘

真那古の庄司が娘、道成寺にいたり、安珍がつり鐘の中にかくれ居たるをしりて蛇となり、その鐘をまとふ。この鐘とけて湯となるといふ。

あるいはくどうじやうじ けう と みやうまんじ めい き きしうひだかごほり や たぬしやう
或 曰 道成寺のかねは今京都妙満寺にあり。その銘左のごとし／紀州日高郡矢田 庄
もん む てんわうのちよくやはんしやだうじやうじのやしやうくはんじんのかく べつとうまうげんどうしうだんなみなもとのまんじゆまるならびによし だ
文武天皇 勅 願 所道成寺治 鐘 勸 進比丘別当法眼定秀檀那 源 万寿丸 并 吉田
みなもとのよりひでがつきんのしよだんおつなんによだい く きんぐはんどうぐはんせう く たいふもりながまんりやく ねんきのととい
源 頼秀合 山 諸檀越男女大工山 願 道 願 小工大夫守長延暦十四年乙 亥三月十一日

燈臺鬼

輕大臣遣唐使たりし時、唐人大臣に啞になる薬をのませ身を彩り頭に燈臺をいたゞかしめて燈臺鬼と名づく。その子弼宰相入唐して父をたづね。燈臺鬼涙をながし指をかみ切り血を以て詩を書して曰、我元日本華京客、汝是一家同姓人、為子為爺前世契、隔山隔海變生辛、経年流涙蓬蒿宿、逐日馳思蘭菊親、形破他郷作燈鬼、争飯旧里寄斯身。

我元日本華京客
為子為爺前世契
経年流涙蓬蒿宿
逐日馳思蘭菊親
形破他郷作燈鬼
争飯旧里寄斯身



燈台鬼

ぬ。燈臺鬼涙をながし指をかみ切り血を以て詩を書して曰、我元日本華京客、汝是一家同姓人、為子為爺前世契、隔山隔海變生辛、経年流涙蓬蒿宿、逐日馳思蘭菊親、形破他郷作燈鬼、争飯旧里寄斯身。



泥田坊

むかし北国に翁あり。子孫のためにいさゝかの
田地をかひ置て、寒暑風雨をさけず時々の耕作
おこたらざりしに、この翁死してよりその子酒
にふけりて農業を事とせず。はてにはこの田地を他人にうりあたへけれ
ば、夜な夜な目の一つあるくろきものいで、田かへせかへせとのゝしり
けり。これを泥田坊といふとぞ。

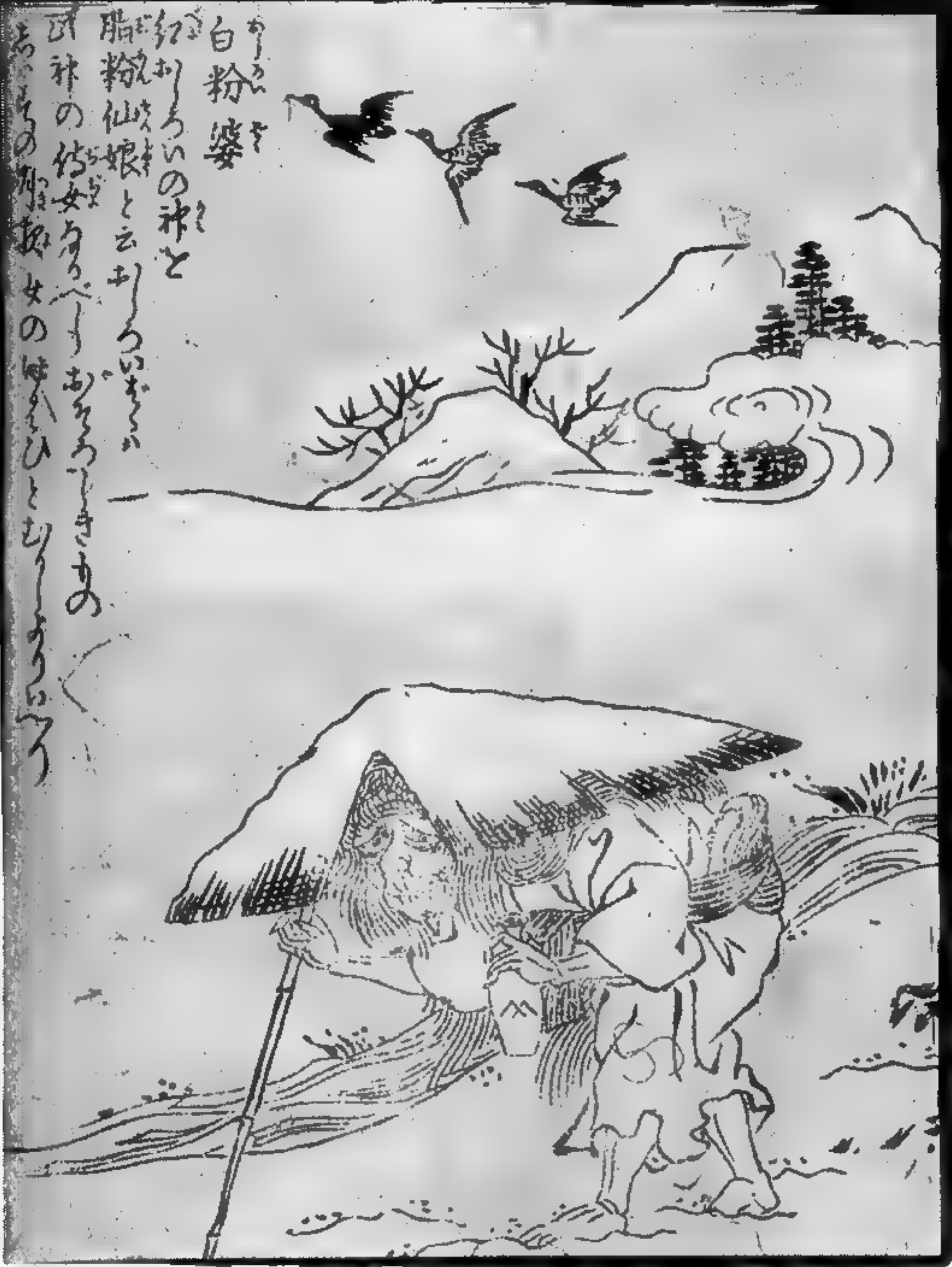
古庫裏婆
 僧の妻と梵嫂といふより
 輟耕録よりある山寺
 七代以前の住持の愛せし
 梵嫂の寺の
 庫裏に
 檀越の米銭と
 新死の屍の皮と
 餌食と
 三途河の奪衣婆
 よりも



古庫裏婆

檀越の米銭をかすめ、新死の屍の皮をはぎて餌食とせしとぞ。三途河の奪衣婆よりもおそろしおそろし。

僧の妻を梵嫂といへるよし、輟耕録に見えたり。ある山寺に七代以前の住持の愛せし梵嫂その寺の庫裏にすみゐて、



おし ろい ばば
白粉婆

べに 紅おしろいの神を脂粉仙娘と云。おしろい
は、は此神の侍女なるべし。おそろしきもの、
しはすの月夜女のけはひとむかしよりいへり。

○

天^{てん}
狗^ぐ



幽圖百鬼夜行……………一二

てん
天^{てん}狗^ぐ

蛇骨婆

もろこし 巫咸国ハ女丑
の北ニあり 右の手に青蛇
をとり 左の手に赤蛇と
人すめるとぞ 蛇骨婆ハ
此の国の人カ 或説ニ云
蛇塚の蛇五右衛門
といへるもの、妻ナリ
よりて蛇五婆とよびしを
訛りて蛇骨婆と
いふト 未詳



蛇骨婆

もろこし巫咸国は女丑の北にあり。右の手に青蛇をとり、左の手に赤蛇をとる人すめるとぞ。蛇骨婆は此の国の人か。或説に云、蛇塚の蛇五右衛門といへるもの、妻なり。よりて蛇五婆とよびしを、訛りて蛇骨婆といふと。未詳。



かげ おんな
影女

ものゝけある家には月かげに女のかげ障子などにうつ
ると云。荘子にも問兩と景と問答せし事あり。景は
人のかけ也。問兩は景のそばにある微陰なり。

情兮女

楚の玉宋玉が東隣に美女あり。壁にのぼりて
 嬌然として一たび笑へば、陽城の人を感せしとぞ。およそ美色の
 人情を

古今にためし多し。けらけら女も朱唇をひるがへして、多
 くの淫婦の霊ならんか。



けら けら おんな
 情兮女

楚の国宋玉が東隣に美女あり。壁にのぼりて
 宋玉をうかゞふ。嬌然として一たび笑へば、
 陽城の人を感せしとぞ。およそ美色の人情を
 とらかす事、古今にためし多し。けらけら女も朱唇をひるがへして、多
 の人をまどはせし淫婦の霊ならんか。



えんくらの煙々羅

は名づけたらん。

しづが家のいふせき蚊遣の煙むすぼゝれて、あやしきかたちをなせり。まことに羅の風にやぶれやすきがごとくなるすがたなれば、煙々羅と



○紅葉狩 もみじがり

○朧車 おぼろぐるま

○火前坊 かぜんぼう

○簑火 みのび

○青行燈 あおあんどう

○雨女 あめおんな

○小雨坊 こさめぼう

○岸涯小僧 がんぎこぞう

○あやかし

○鬼童 きどう

○鬼一口 おにひとくち

○蛇帶 じやたい

○小袖の手 こそでて

○機尋 はたひろ

○大座頭 おおざどう

○火間蟲入道 ひまむしにゅうどう

○殺生石 せつしようせき

○風狸 ふうり

○茂林寺釜 もりんじのかま





紅葉狩

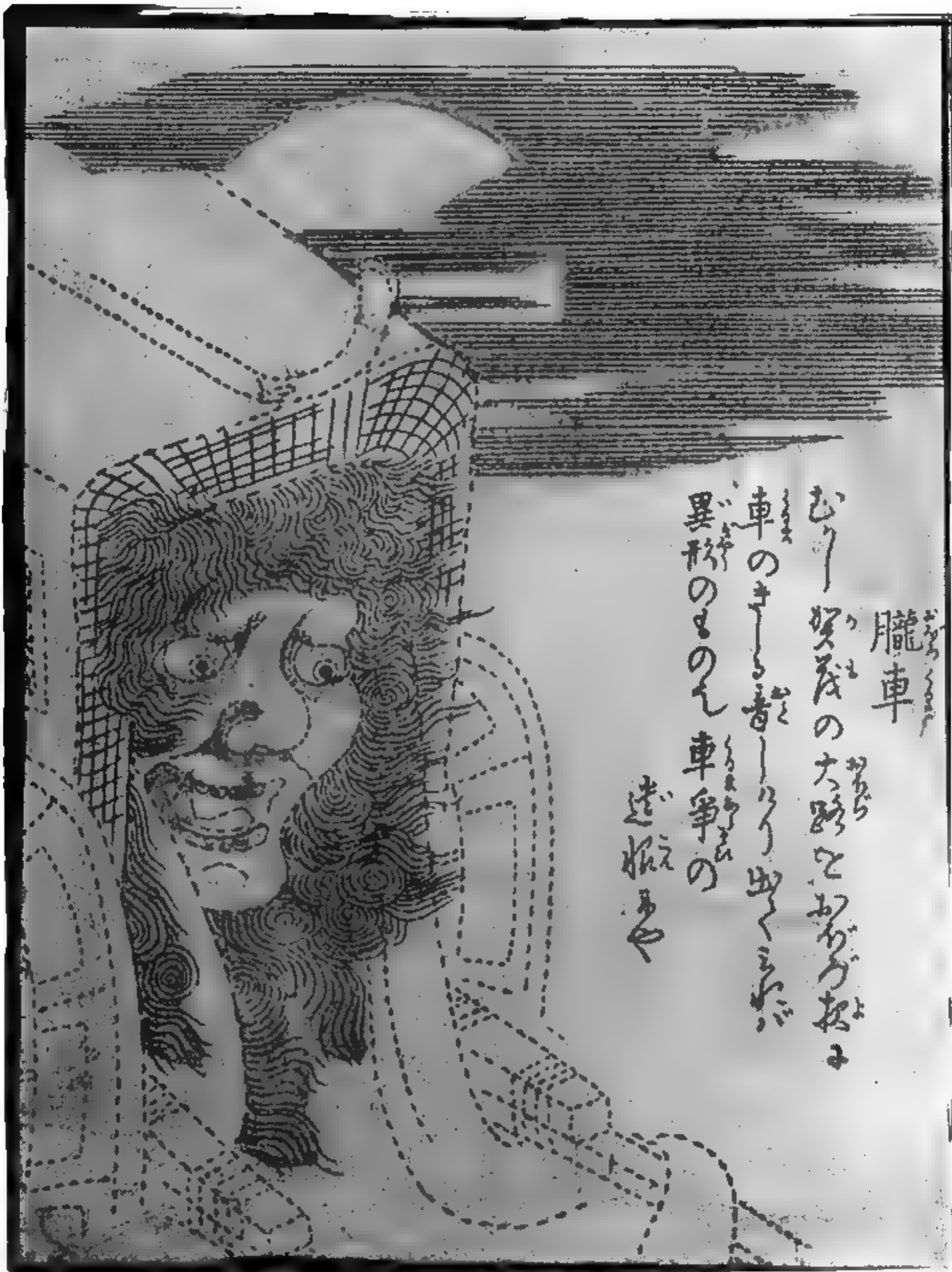
余五將軍惟茂紅葉がりの時

山中にて鬼女にあひし事

謡曲にも見へて皆人のしる所なれば、こゝに贅せず。

もみじが
紅葉狩

よごしやうぐんこれもちもみぢ
余五將軍惟茂、紅葉がりの時山中にて鬼女にあ
ひし事、謡曲にも見へて皆人のしる所なれば、
こゝに贅せず。



おぼろ くるま
 朧車

むかし賀茂の大路をおぼろ夜に車のきしる音しけり。
 出してみれば異形のもの也。車争の遺恨にや。

おぼろ くるま
朧車

むかし賀茂の大路をおぼろ夜に車のきしる音しけり。
 出してみれば異形のもの也。車争の遺恨にや。



火前坊

鳥部山の煙たちのぼりて

龍門原上に骨をうづまん

と味の地よりあやしき形の出たれば

くはぜん坊とは名付たるならん

火前坊

とりべやま けぶり
鳥部山の煙たちのぼりて、
りやうもんげんじやう ほね
龍門原上に骨をう
づまんとする三味の地よりあやしき形の出たれ
ば、くはぜん坊とは名付たるならん。

火の
簀火

田舎
火の
みゆる

狐
火の
みゆる

この
雨
みくる

よみし
簀より

火の
出
み

又ハ
耕作
に苦める

百姓
の
驕
の火

なるべ

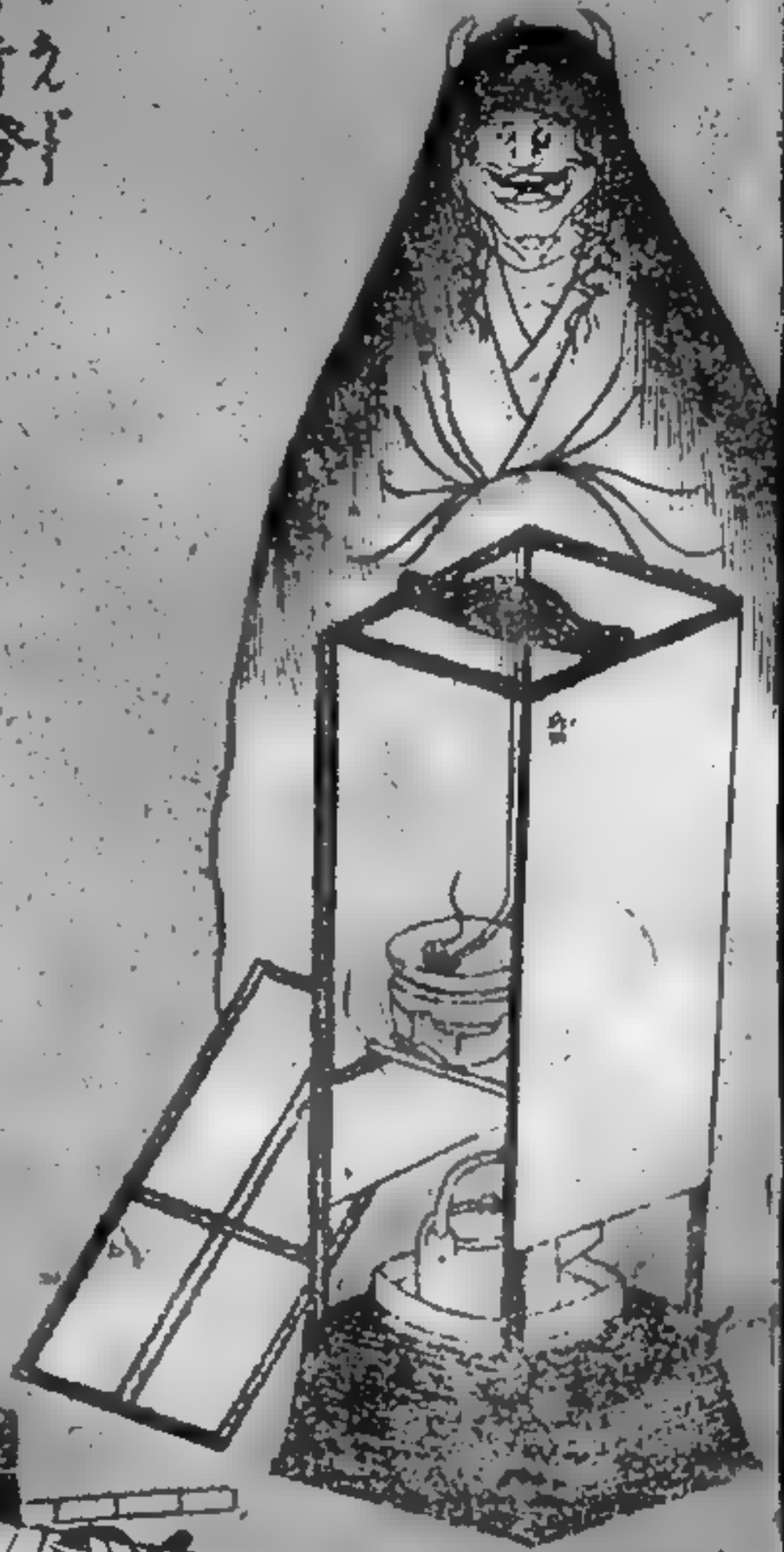


火の 簀火

田舎道などによなよな火のみゆるは多くは狐火なり。
この雨にきるたみの、嶋とよみし簀より火の出しは陰
中の陽気か。又は耕作に苦める百姓の驕の火なるべ

し。

青行燈



燈あききえんとして又あきらかに、影かげ憧々として
くらき時、青行燈あきあんどうといへるものあらはる、事あ
りと云。むかしより百物語をなすものは、青き
紙かみにて行燈あんどうをはる也。昏夜こんやに鬼きを談だんずる事なかれ。鬼きを談だんずれば怪くはいいたる
といへり。

青行燈

あお あん どう
紙かみにて行燈あんどうをはる也。昏夜こんやに鬼きを談だんずる事なかれ。鬼きを談だんずれば怪くはいいたる
といへり。

○ やまびこ
幽谷響



幽谷響

やまびこ
幽谷響



あめ
雨女
もろこし巫山の神女はおも
やうにうらたけも、雨ともとも
や
雨女もやうたけの
あめなりや

あめ おんな
雨女

もろこし^{よざん}巫山^{しんぢよ}の神女は、朝^{あした}には雲^{くも}となり、夕^{ゆうべ}には雨^{あめ}となるとかや。雨女^{あめ}もかゝる類^{たぐひ}のものなりや。

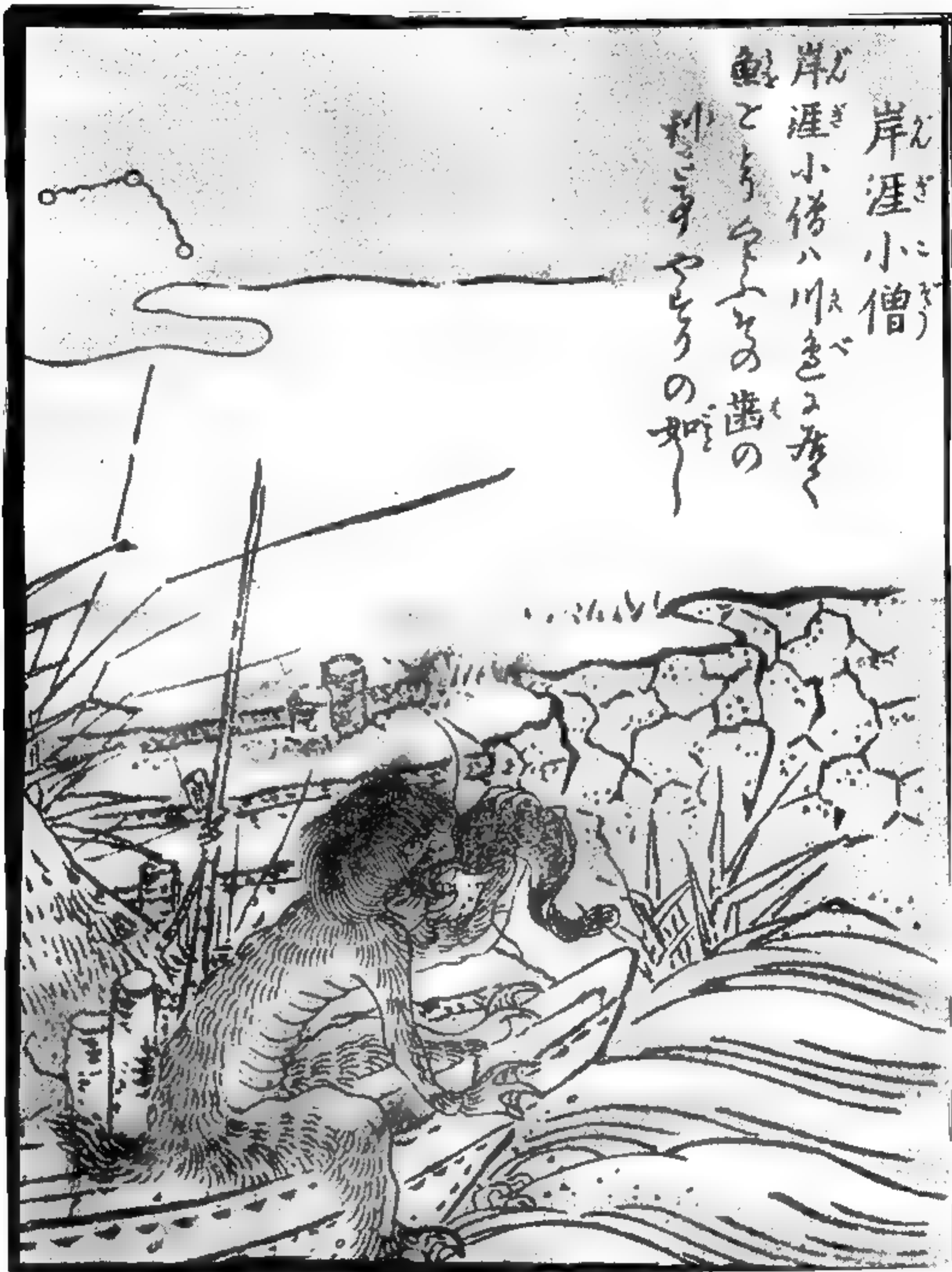


こ さめ ぼう
小雨坊

こさめぼう あめ よ
小雨坊は雨そほふる夜、大みねかつらぎの山中
はいくはい とまりやう
に徘徊して斎料をこふとなん。

岸涯小僧

岸涯小僧ハ川邊に居て魚をとりくらふ。
その齒の利き事やすりの如し。



岸涯小僧

岸涯小僧は川邊に居て魚をとりくらふ。
その齒の利き事やすりの如し。



あやかし

西国の海上に船のかゝり居る時、ながきもの船をこえて二三日もやまざる事あり。油の出る事おびたし。船人

力をきはめて此油をくみほせば害なし。しからざれば船沈む。是あやかしのつきたる也。

鬼童

鬼童丸は雪の中
牛の皮を蒙りて
頼光と市原野に
うかまふと云



鬼童

鬼童丸は雪の中に牛の皮を蒙りて、頼光を市原野に
うかまふと云。



鬼一口

在来業平二条の后とぬすみいで、あばら屋
らひらきしりもぬすむりよとていふ

あら玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてきえなましものを

おに ひと くち
鬼一口

ありはらのなりひら でう きさき
在原 業平二条の后をぬすみいで、あばら屋
におにひと
にやどれるに、鬼一口にくひけるよし、いせ物
がたりに見えたり。

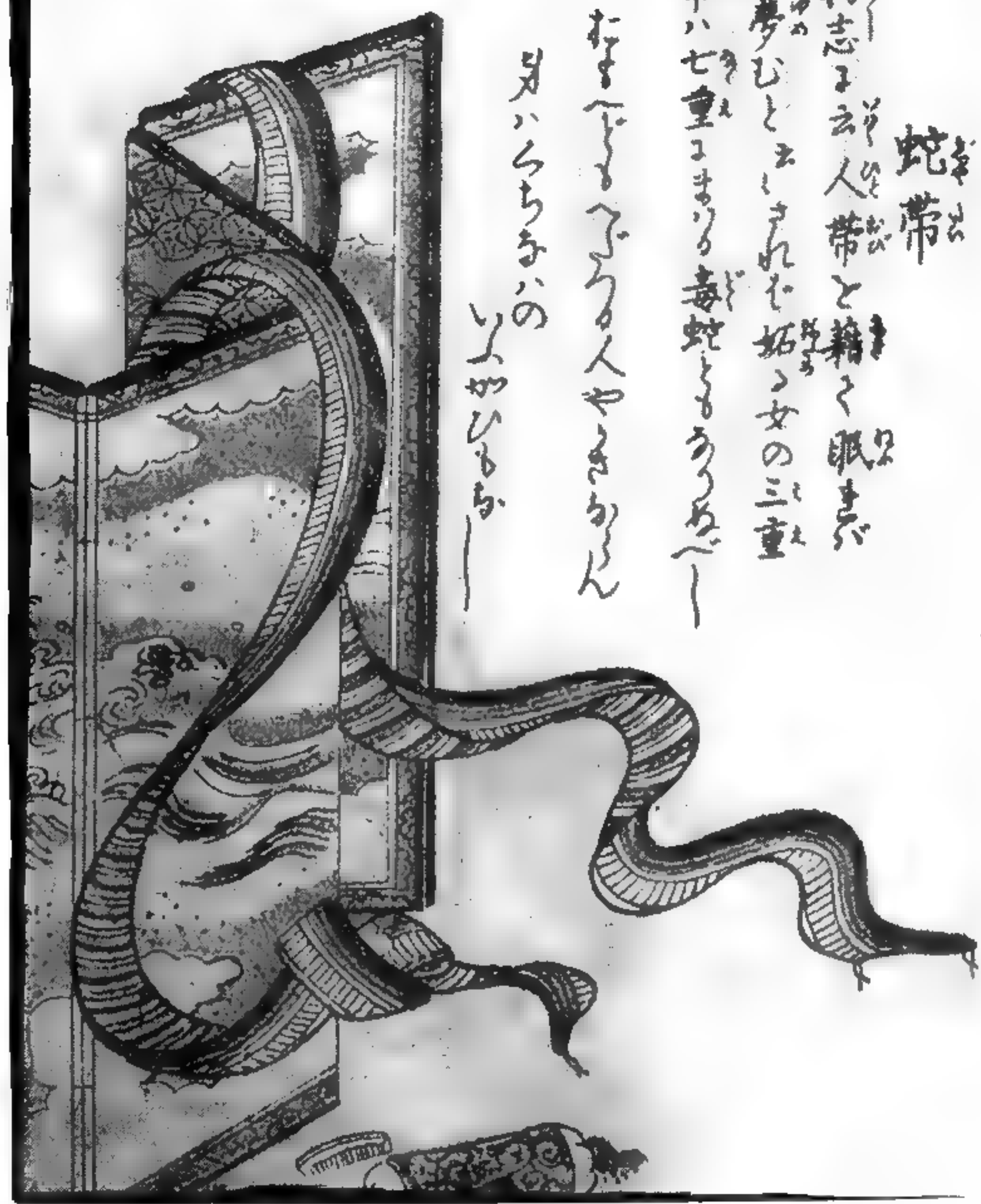
しら玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてきえなましものを

蛇帯

博物志に云、人帯を藉て眠れば蛇を夢むと云々。され
蛇と夢むと云、されを妬る女の三重の帯は七重にまはる毒蛇ともなりぬ
の帯ハ七重にまはる毒蛇ともなりぬ

おもへどもへだつる人やかきならん身はくちなはのいふかひもなし

身はくちなはのいふかひもなし



蛇帯

博物志に云、人帯を藉て眠れば蛇を夢むと云々。され
は妬る女の三重の帯は、七重にまはる毒蛇ともなりぬ
べし。

おもへどもへだつる人やかきならん身はくちなはのいふかひもなし



小袖の手

唐詩に昨日施僧裙帶上

断腸猶繫琵琶絃とい妓女の亡ぬるをいた

める詩にして、僧に供養せしうかれめ

もと琵琶の糸のかゝりてありしを見て、腸をたちてかなしめる心也。

すべて女ははかなき衣服調度に心をとめて、なき跡の小袖より手の出し

をまのあたり見し人ありと云。

小袖の手

の帯になを琵琶の糸のかゝりてありしを見て、腸をたちてかなしめる心也。すべて女ははかなき衣服調度に心をとめて、なき跡の小袖より手の出しをまのあたり見し人ありと云。

唐詩に、昨日施僧裙帶上断腸猶
繫琵琶絃とは妓女の亡ぬるをいた
める詩にして、僧に供養せしうかれめ



はた ひろ 機尋

また ざんきを おさめず
不復理残機

とうし

はたひろはある女^{おつと}夫の出てかへらざるをうらみ、お
りかゝれる機^{はた}をたちしに、その一念^{ねん}はたひろあまりの
蛇^{じや}となりて夫^{ゆく}の行衛^まをしたひしとぞ。自^{きみがいでしより}君之出^り矣
と唐詩にもつくれり。



大座頭

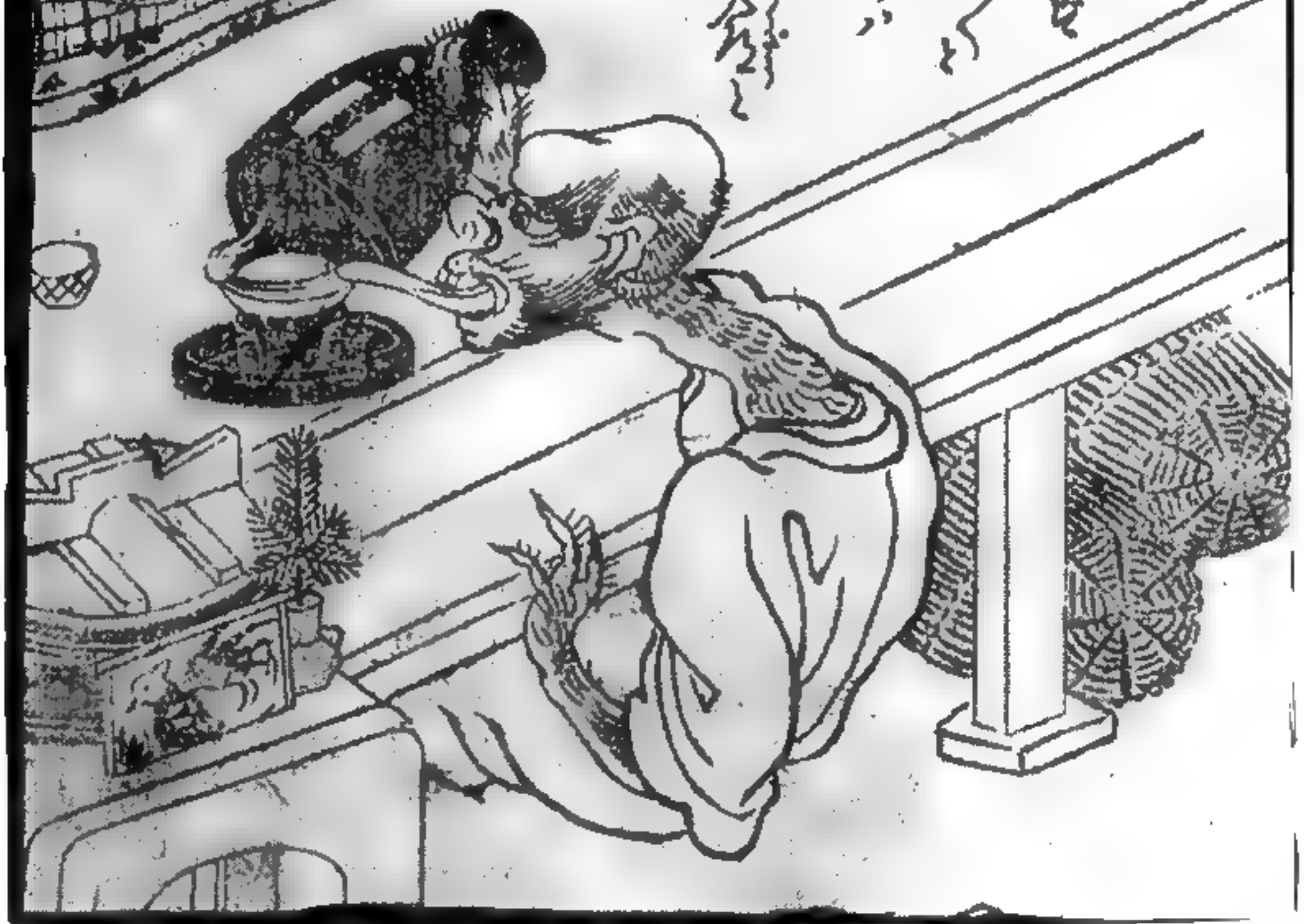
おお ざ とう
大座頭はやれたる袴を穿、足に木履をつけ、手
に杖をつきて、風雨の夜ごとに大道を徘徊す。
ある人これに問て曰、いつくんかゆく。答てい
はく、いつも倡家に三絃を弄すと。



やま わらわ
山童

火間蟲入道

人生勤ありつゝいつの時ハ匿
 といつてけしきも益なくうかり
 同とせしむる一せとあらめ
 ありやも其の冥ひまむしお入
 ちうて燈の油をねぶり
 人のお作と
 今訛りてへまムシ
 へてムシ



火間蟲入道

人生 勤にあり。つとむる時
 は匿からずといへり。生て時
 に益なく、うかりうかりと間

をぬすみて一生をおくるものは、死してもその靈ひまむし夜入道となり
 て、燈の油をねぶり、人の夜作をさまたぐるとなん。今訛りてへまムシ
 とよふは、へとひと五音相通也。



せつ しょう せき
殺生石

殺生石は下野国那須野にあり。老狐の化する
 所にして、鳥獸これに触れば皆死す。應永二年
 乙亥正月十一日、源翁和尚これを打破すといふ。

ふ。

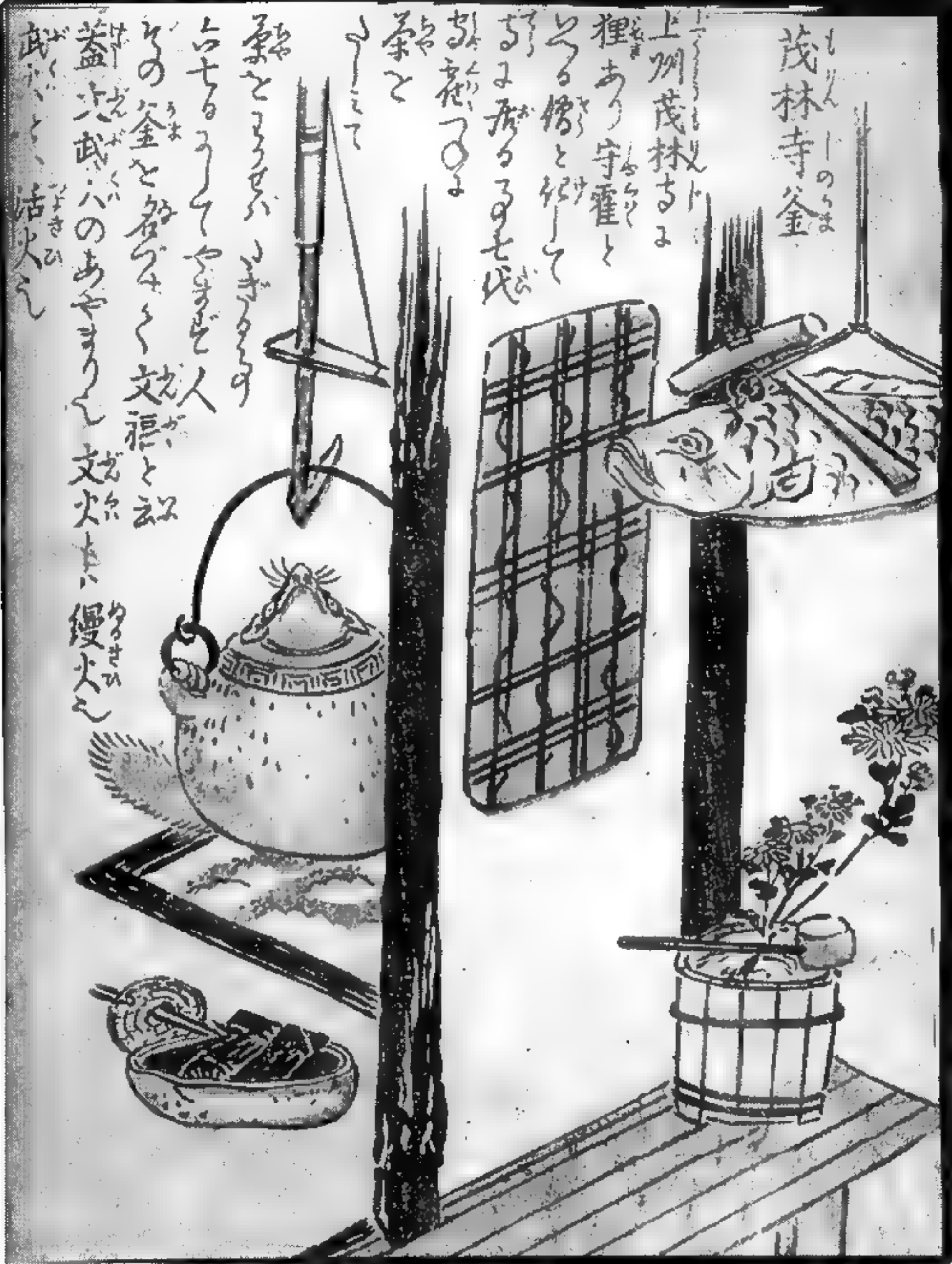


風よりと岩とつくり
あまのぢりものさやま
花の如し

風狸

ふう り
風狸

風によりて^{いはほ}巖をかけり木にのぼり、そのはやき事^{ひてう}飛鳥
の如し。



茂林寺釜

る事六、七日にしてやまず。人のその釜を名づけて文福と云。蓋文武火のあやまり也。文火とは緩火也。武火とは活火也。

上州茂林寺に狸あり。守霍といへる僧と化して寺に居る事七代、守霍つねに茶をたしみて茶をわかせば、たぎ

茂林寺釜
上州茂林寺に
狸あり守霍と
いへる僧と化
して寺に居る
事七代守霍つ
ねに茶をたし
みて茶をわか
せばたぎ

蓋文武火のあやまり也。文火とは緩火也。武火とは活火也。



○羅城門鬼らじょうもんのおに

○夜啼石よなきのいし

ばしやうのせい

○芭蕉精

○硯の魂すずりたましい

びやうぶのぞき

○屏風闕

けうけげん

○毛羽毛現

もくもくれん

○目目連

きやうこつ

○枉骨

めくらべ

○目競

○後神うしろがみ

○否哉いやや

ほうそうし

○方相氏

○淹靈王たきれいおう

はくたく

○白沢

かくれざと

○隱里



羅城門鬼

都良香

らせうもん

を過て一句を吟じて

曰、氣霽風梳新柳髪と。その時

鬼神一句をつぎていはく、氷消波

洗旧苔鬚と。後、渡辺綱がために腕をきられ、からきめ見たるもこの

鬼神にや。

鬼神にや。

鬼神にや。



羅城門鬼

きうたい 洗旧苔鬚と。後、渡辺綱がために腕をきられ、からきめ見たるもこの鬼神にや。

とく げん
らせうもんを過て一句を吟じて
いはく けはれてはかぜしんりうのかみをけづる
曰、氣霽風梳新柳髪と。その時
きしん 鬼神一句をつぎていはく、氷消波
うで
腕をきられ、からきめ見たるもこの

夜啼石
 遠州佐夜の中山にあり
 むかし孕婦の所に
 盗賊のしる害せられ
 子は胎胞の内へ
 幸に生長してその
 鱧を報しとかや



よ なきの いし
夜啼石

遠州佐夜の中山にあり。むかし孕婦この所に
 て盗賊のために害せられ、子は胎胞の内に恙な
 く、幸に生長してその鱧を報しとかや。

芭蕉精

もろこしにて芭蕉の精人と化して物語せしことあり。今の謡物はこれによりて作れるとぞ。

芭蕉の
謡物



ば しょうの せい
芭蕉精

もろこしにて芭蕉の精人と化して物語せしことあり。今の謡物はこれによりて作れるとぞ。

硯の魂

ある人赤間が関の石硯
 とす。ひと日平家物語をよみさして、とろとろ
 と居ねぶるうち、案頭の硯の海の波さかだちて、
 源平のたゝかひ今みるごとくあらはれしとかや。もろこし徐玄之が紫石潭
 も思ひあはせられ侍り。



すずり たましい 硯の魂

ある人赤間が関の石硯をたくはへて文房の一友
 とす。ひと日平家物語をよみさして、とろとろ
 と居ねぶるうち、案頭の硯の海の波さかだちて、
 源平のたゝかひ今みるごとくあらはれしとかや。もろこし徐玄之が紫石潭
 も思ひあはせられ侍り。

屏風関

翠帳紅閨に枕をならべ、
 類鶯倒鳳の交あさから
 ず、枝をつらね翼をかはさんと
 ちかひし事も佗
 となりし胸三寸の恨より、
 七尺の屏風も猶のぞ
 くべし。



びよう ぶ のぞき
 屏風関

すいてうこうけい まくら てんらんたうほう まぢはり
 翠帳紅閨に枕をならべ、類鶯倒鳳の交あさから
 ず、枝をつらね翼をかはさんとちかひし事も佗
 となりし胸三寸の恨より、七尺の屏風も猶のぞ
 くべし。

○ 山姥 やまうば



やま うば
山姥

毛羽毛現

毛羽毛現ハ惣ハ
毛生ひたる事毛女の
ことくなればかくいふか。或は希有希
見とかきて、ある事まれに、見る事ま
れなればなりとぞ。



け う け げん
毛羽毛現

れなればなりとぞ。

け う け げん きうみ け お もうぢよ
毛羽毛現は惣身に毛生ひたる事毛女の
ことくなればかくいふか。或は希有希
見とかきて、ある事まれに、見る事ま
れなればなりとぞ。

目目連

煙霞跡なく

むかしたれか栖し

家のすみず

みに目を多くもちしは

碁打のすみし跡ならんか。



目目連

煙霞跡なくして、むかしたれか栖し家のすみず
みに目を多くもちしは、碁打のすみし跡ならん
か。

狂骨

狂骨ハ井中の白骨なり

世の諺ハ甚しき事を

きやうこつといふも

このうらみのはなはだ

よりいふならん

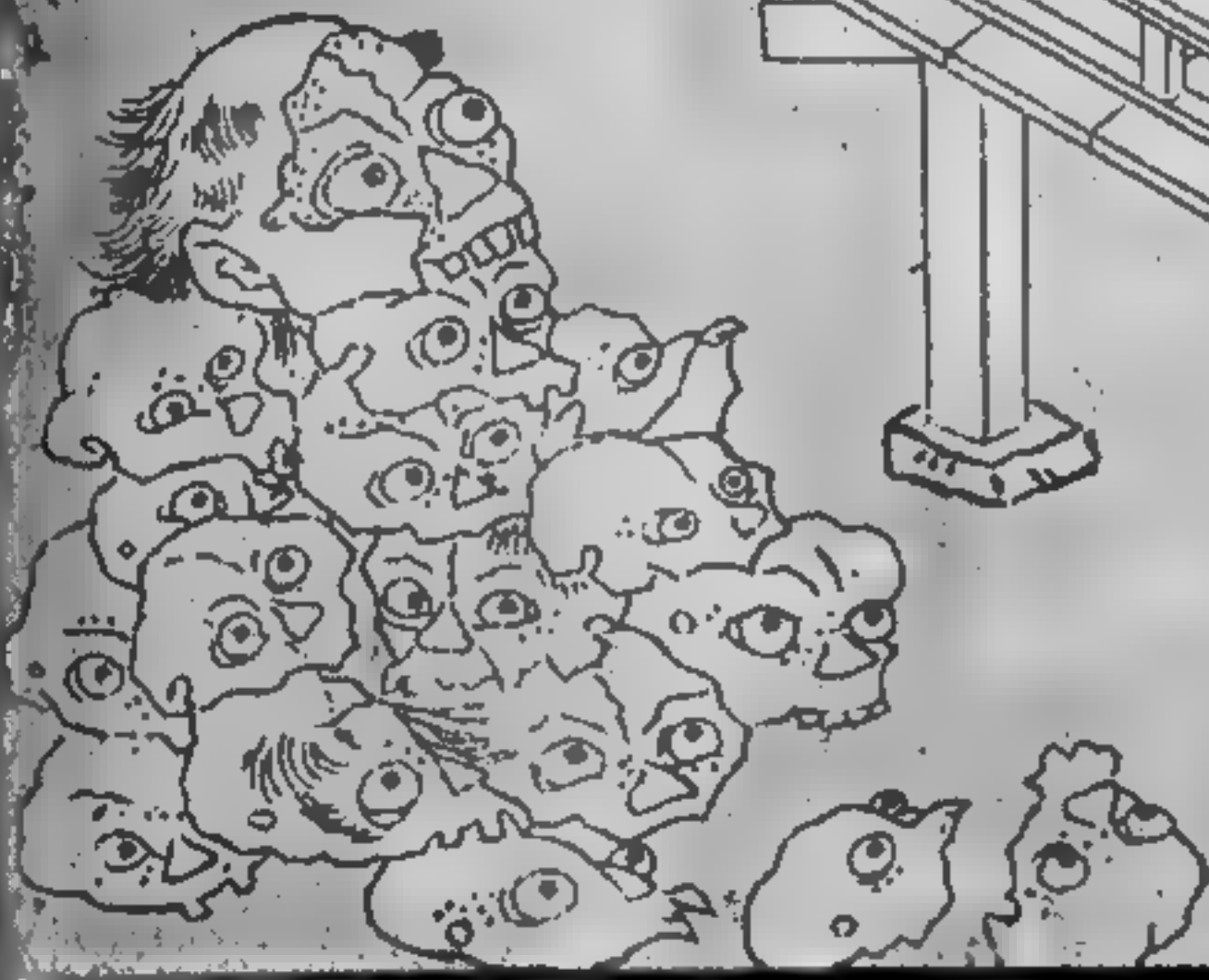


きよう こつ
狂骨

きやうこつ せいちう はくこつ よ ことはだ はなはだ
狂骨は井中の白骨なり。世の諺に 甚しき事をきや
うこつといふも、このうらみのはなはだしきよりいふ
ならん。

目競

大政入道清盛ある夜の夢に、されかうべ東西より出てははじめは二つありけるが、のちには十、二十、五十、百、千、万、のちにはいく千万といふ数をしらず。入道もまけずこれをにらみけるに、たとへば人の目くらべをするやう也しよし。平家物語にみえたり。



めくらべ
目競

だいぜうにうだうきよもり
大政入道清盛ある夜の夢に、されかうべ東西より出てははじめは二つありけるが、のちには十、二十、五十、百、千、万、のちにはいく千万といふ数をしらず。入

道もまけずこれをにらみけるに、たとへば人の目くらべをするやう也しよし。平家物語にみえたり。

否哉

むかし漢の東方朔

あやしき虫をみて

怪哉と名づけ

しためしあり

今この否哉も

これ

あやしき

名付たる

なり



否哉

むかし漢の東方朔、あやしき虫をみて怪我と名づけ
しためしあり。今この否哉もこれにならひて名付たる
なるべし。

方相氏

論語曰郷人儺朝服而立
於阼階

註儺所以逐疫周礼
方相氏掌之



ほう そう し
方相氏

ろんごにいはいく けうひとのおにやらいにてうふくしてそかいにたてり
論語曰、郷人儺朝服而立 於阼階
ちうにおにやらいはあきをおふゆふん也しゆらいにはうきうしこれをつかさどる
註 儺所 以逐 疫 周礼 方相氏掌 之。



滝聖王

法玉の湊つぽよりあらはるゝと云
青龍疏に、
一切の鬼魅諸障を伏すと云々

たき れい おう
滝聖王

しよこく たき せいろう そ
諸国の滝つぽよりあらはるゝと云。青龍疏に、
いつさい き み しよせう ふく
一切の鬼魅諸障を伏すと云々。

白澤

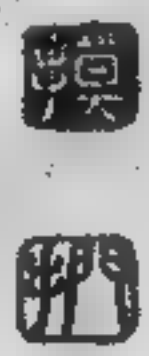
黃帝東巡

白澤一見

避怪除害

靡所不徧

摸捫窩贊



はく たく
白澤

黃帝東巡 白澤一見 避怪除害 靡所不徧
摸捫窩贊



かくれ ぎと
隠里

○ いぬがみ
犬神

○ しらこ
白児



いぬ がみ しら ちこ
犬神・白児



百器徒然袋

百器徒然袋序

嘗つて社樹を以て俳諧と為すや、之を遠望すれば峨々として春天を払ひ、就て之を視れば其の根則ち群狐の託する所。此の語に相当するは石燕即ち其の人なり。天台の西に顕れ、古社の下に隠れ、而して万鬼を伏倚し、怪状を図画して世俗を驚駭せしむ。是に由つて遂に以て老狐の名を負ふ。亦た宜からずや。今春復し、亦た此図を請ふ者多し。図せば則ち謝混の俳する所と為り、画せざれば則ち江庵の筆を還すに似たり。嗚呼、之を如何せん。寧ろ我をして身後の名有らしむるは、即時一盃の酒に如かず。是が為に吾の好む所に従ひて、自ら斯の技を楽しむ。此れも一時なり。是に於て智囊を発き、才器に任す。靈影を採擷し、図以て三卷と為す。百器徒然袋と題す。而して予の序を請ふ。予先に并に序する所、言に於て得ざるは憑婦の如きなり。士為る者の之を笑ふを免れず。今三界に当りて其の可ならざるを知る。而して義に之くに止らず、勢勇の前に在りて序す。

天明四甲辰春 元洲滕武幹



宝船 たからぶね

塵塚怪王 ちりづか かいおう

文車妖妃 ふぐるまようひ

長冠 おさこうぶり

沓頬 くつづら

ばけの皮衣 かわでろも

絹狸 きぬ たぬき

古籠火 ころうか

天井嘗 てんじょうなめ

白容裔 しろうねり

骨傘 ほねからかさ

鉦五郎 しょうごろう

松子守 ほつすもり

采螺鬼 さざえおに







ふ
ふ
の
ふ
ふ
れ

たから ぶね
宝船

ながき世のとをのねぶりの



塵塚

怪王

森羅万象およそかたちをなせるもの
に長たるものなきことなし。鱗は獣
の長、鳳は禽の長たるよしなれば、こ
のちりづか怪王はちりつもりてなれる山姥
とうの長なるべしと、夢のうちに
おもひぬ。



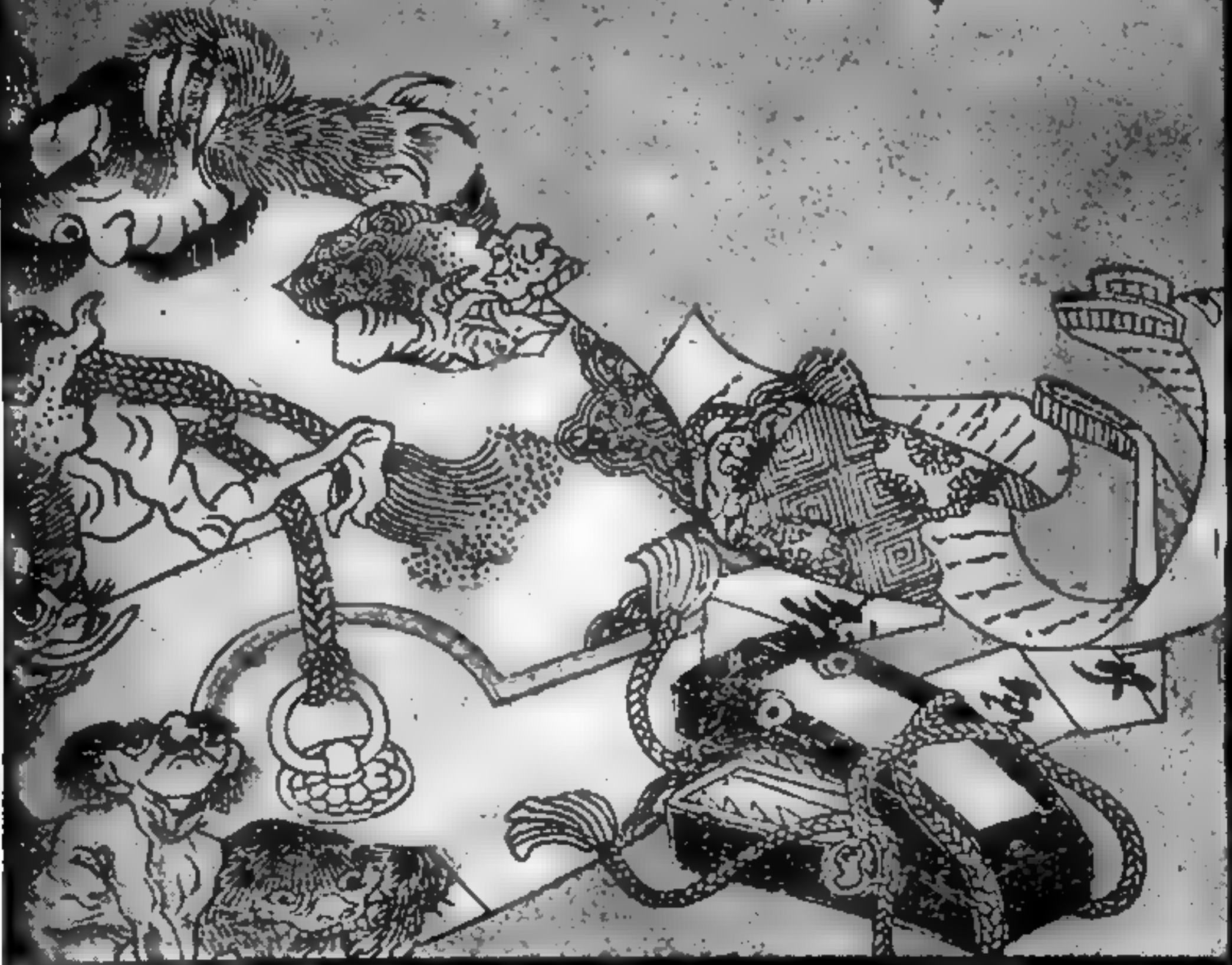
塵塚怪王

それ森羅万象およそかたちをなせるもの
に長たるものなきことなし。鱗は獣
の長、鳳は禽の長たるよしなれば、こ

のちりづか怪王はちりつもりてなれる山姥とうの長なるべしと、夢のうちに
おもひぬ。

文車妖妃

歌に、古しへの文見し人のたまなれや
おもへばあかぬ白魚となりけり。かし
こき聖のふみに心をとめしさへかくの
ごとし。ましてや執著のおもひをこめし千束の玉章には、かゝるあやし
きかたちをもあらはしぬべしと、夢の中におもひぬ。

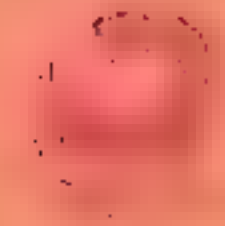


文車妖妃

歌に、古しへの文見し人のたまなれや
おもへばあかぬ白魚となりけり。かし
こき聖のふみに心をとめしさへかくの
ごとし。ましてや執著のおもひをこめし千束の玉章には、かゝるあやし
きかたちをもあらはしぬべしと、夢の中におもひぬ。

鳥山石燕 地獄百鬼夜行全圖集

鳥山石燕

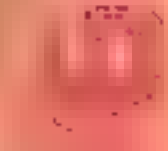


鳥山石燕

鳥山石燕 地獄百鬼夜行全圖集

鳥山石燕

鳥山石燕



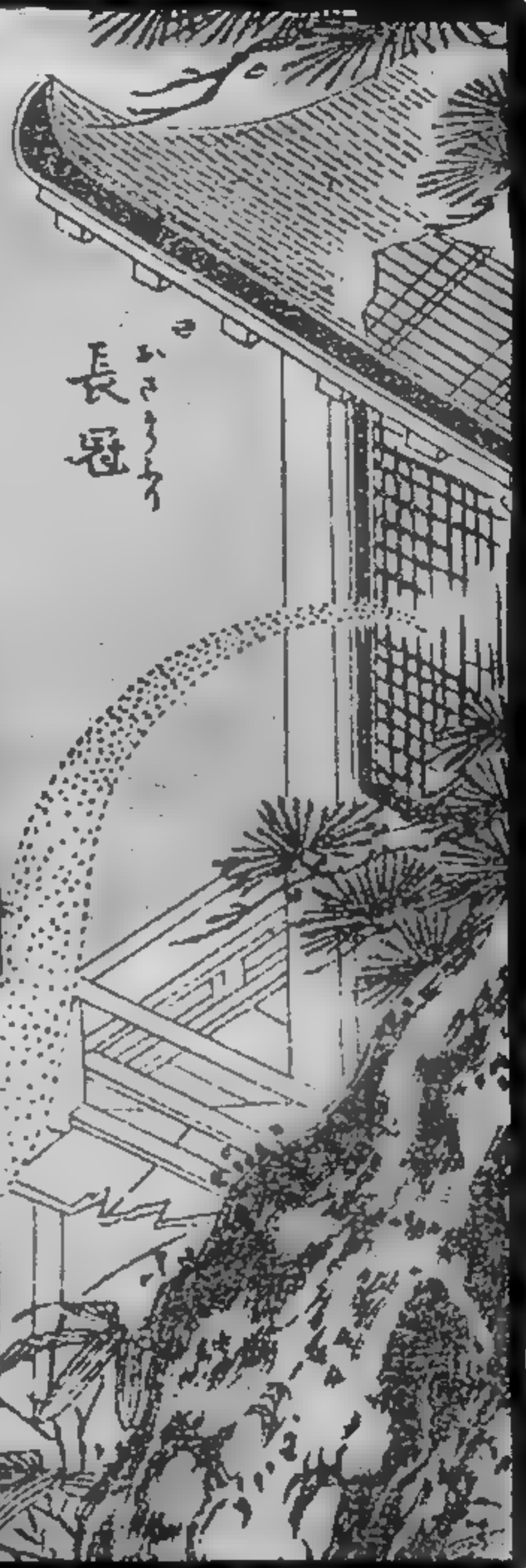
鳥山石燕

ねこ
猫ま



ねこ
猫また





かさ
おさ
うぶ
り
長冠

東都の城門に
かけて世と
のうき一賢人の
冠をはかり
ぬのふたは
のふたおも
てありし
人のおも
かけなら
んかしと
夢ごゝろ
におもひぬ

おさ こうぶり
長冠

東都の城門にかけて世をのがれし賢人の冠にはあらで、
このてがしはのふたおもてありしねぢけ人のおもかけな
らんかしと、夢ごゝろにおもひぬ。

鄭瓜州の瓜田に怪ありて、瓜を喰ふ靈隱寺の僧これを
 きゝて符をあたふ。是を瓜田にかくに、怪ながくいた
 らず。のち其符をひらき見るに、李下不正冠の五字
 ありと。かつてこの怪にやと、夢のうちにおもひぬ。



沓頼

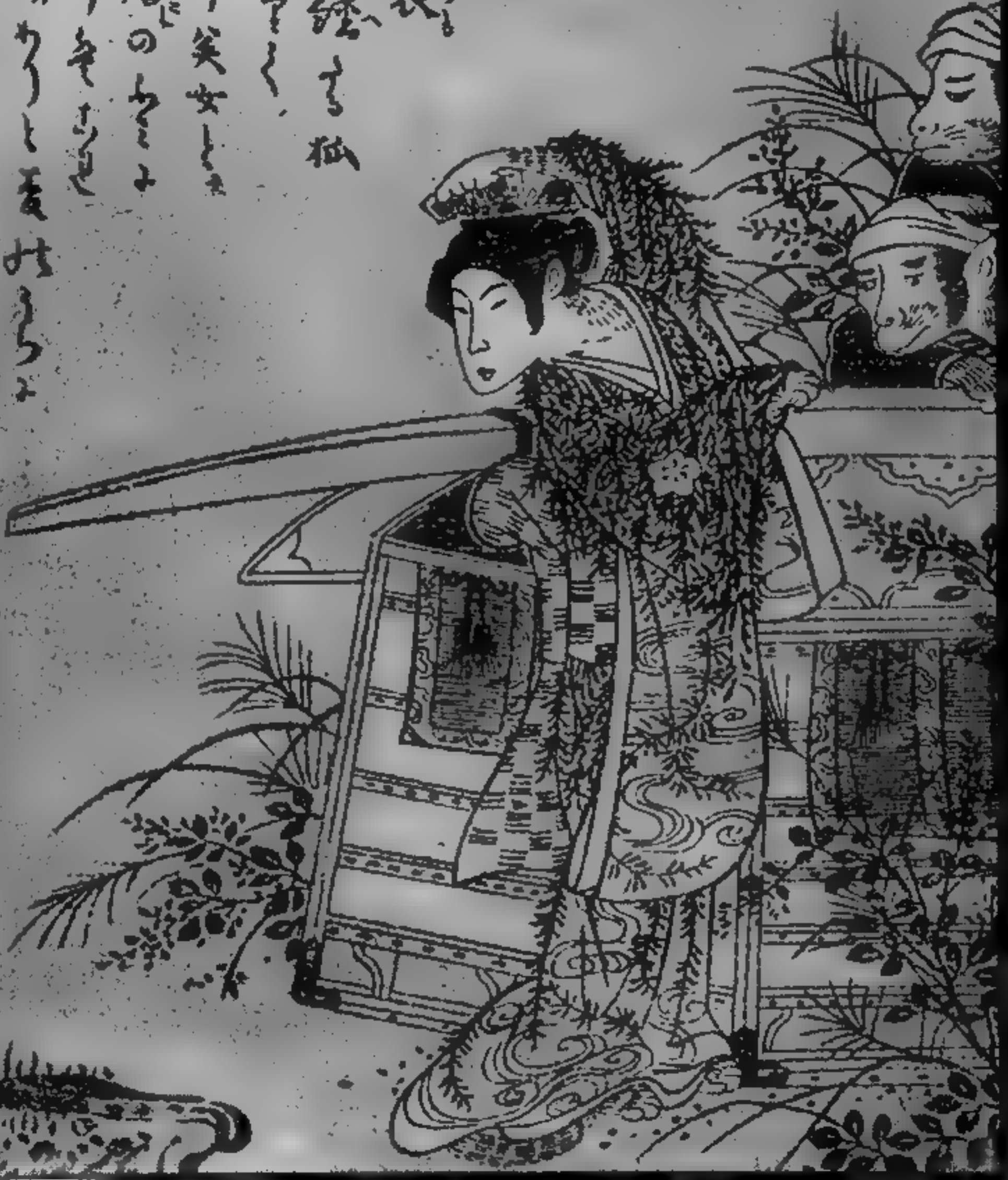
鄭瓜州の瓜田に怪ありて、瓜を喰ふ靈隱寺の僧これを
 きゝて符をあたふ。是を瓜田にかくに、怪ながくいた
 らず。のち其符をひらき見るに、李下不正冠の五字
 ありと。かつてこの怪にやと、夢のうちにおもひぬ。

かけの
皮衣

三千年を経たる狐、藻艸をかぶりて
北斗を拝し、美女と化するよし、唐のふみに見へしはこれ

なめりと、夢のうちに

おもひぬ。



かわ ごろも ばけの皮衣

三千年を経たる狐、藻艸をかぶりて北斗を拝し、美女と化するよし、唐のふみに見へしはこれ

なめりと、夢のうちに

絹狸

腹つゞみをつとまづ
うて長う川つる玉川の
おゝゑんある八丈の
きぬ狸しは化しにやと
ゆめの中におもひぬ



きぬ たぬき
絹狸

はら
腹つゞみをうつと言へるより、衣うつなる玉川の玉に
ゑんある八丈のきぬ狸とは化しにやと、ゆめの中にお
もひぬ。

古

籠火

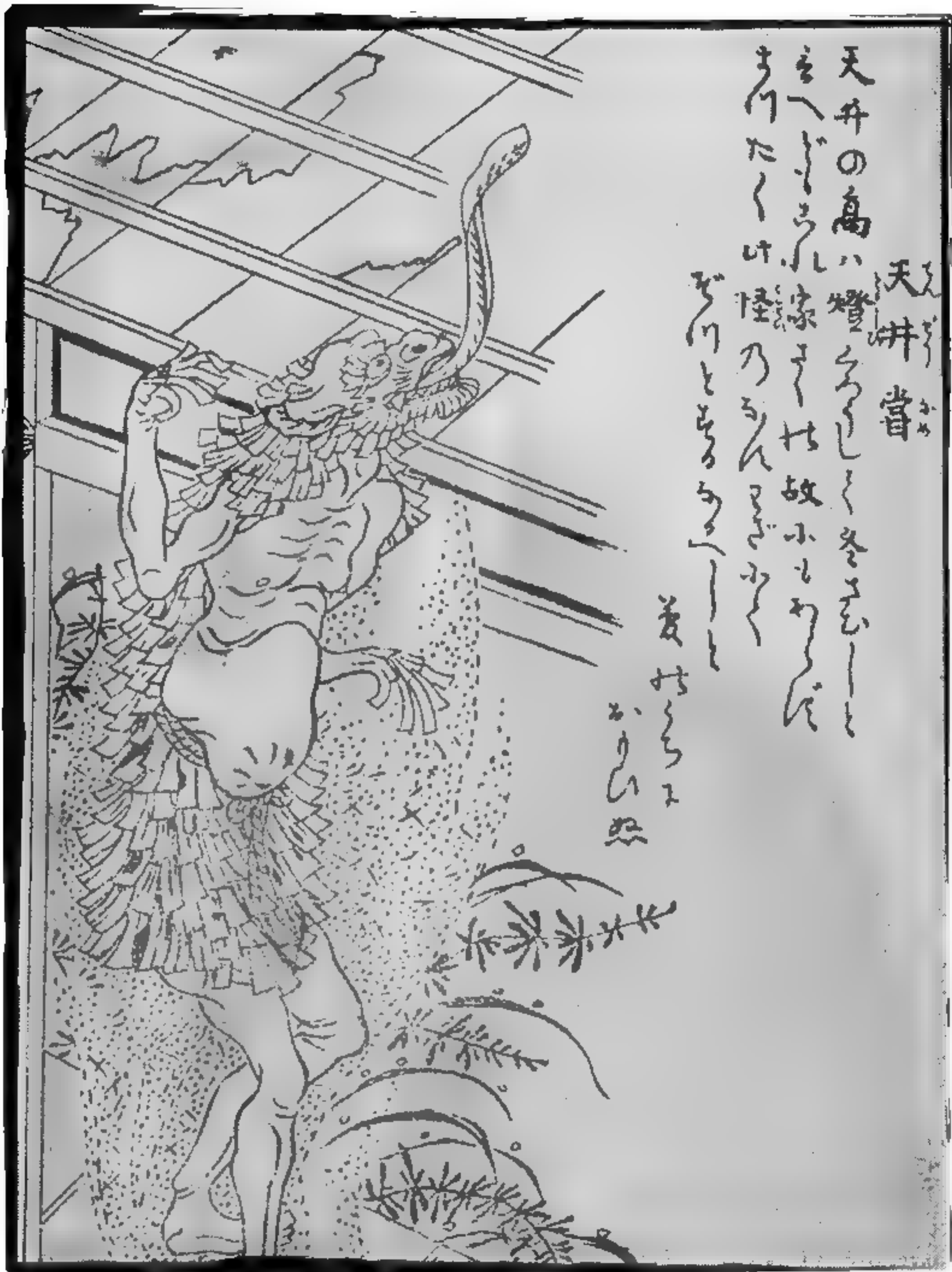
そき大に陰大陽大身するる
あつとげうけくち戦場ハ汗血
のうて鬼すしとちあまーさうと
うすうとすうとすうとすうと

怪とありしときぐく夢の中おもひぬ



古籠火

それ火に陰火、陽火、鬼火さまざまありとぞ。
わけて古戦場には汗血のこりて鬼火となり、あ
やしきかたちをあらはすよしを聞はべれども、
いまだ燈籠の火の怪をなすことをきかずと、夢の中におもひぬ。



天井嘗

天井の高は燈くろうして冬さむしと言へども、
これ家さくの故にもあらず。まったく此怪の
なすわざにて、ぞつとするなるべしと、夢のう

ちにおもひぬ。

養

あ

天井嘗

ちにおもひぬ。

天井の高は燈くろうして冬さむしと言へども、
これ家さくの故にもあらず。まったく此怪の
なすわざにて、ぞつとするなるべしと、夢のう

白容裔

徒然のうねり

ふるき布巾のばけたるものなれども、外に

ならいもやはべると、夢のうちにおもひぬ。

夢のうちに

おもひぬ。

おもひぬ。



しろ うねり
白容裔

白うるりは徒然^{つれづれ}のならいなるよし。この白うねりはふるき布巾^{よきん}のばけたるものなれども、外に
ならいもやはべると、夢のうちにおもひぬ。



骨傘 ほねかさ 北海に鰐吻わいふんと言へる魚あり。かしらは龍のごとく、か
 らだは魚に似て、よく雲をおこし雨をふらすと。この
 からかさも雨のゑんによりてかゝる形をあらはせしに
 やと、夢のうちにおもひぬ。

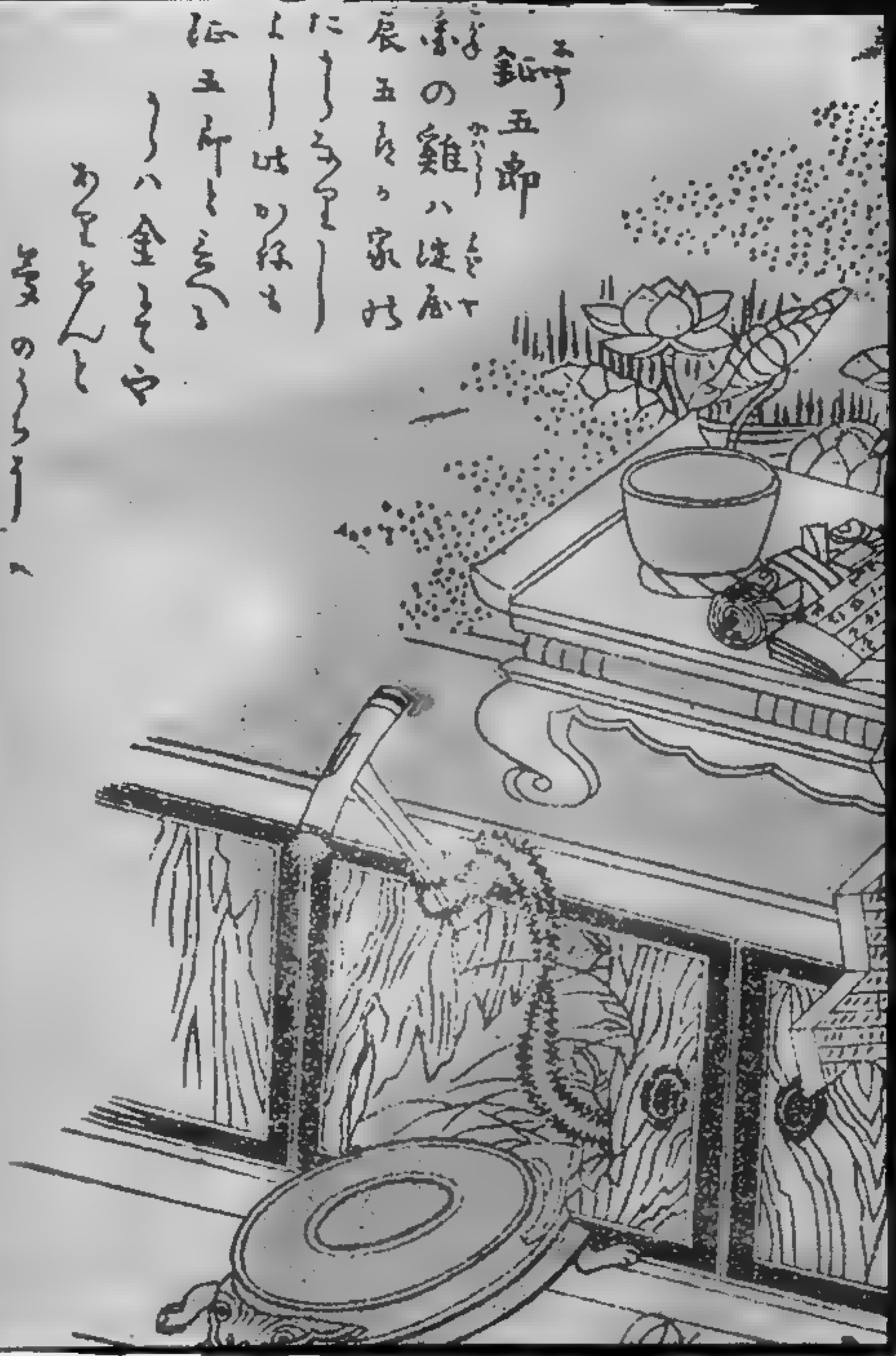
夢のうちにおもひぬ

ほね からかさ

骨傘

北海に鰐吻わいふんと言へる魚あり。かしらは龍のごとく、か
 らだは魚に似て、よく雲をおこし雨をふらすと。この
 からかさも雨のゑんによりてかゝる形をあらはせしに

やと、夢のうちにおもひぬ。



金五郎
金の雞ハは家
辰五郎家
にハハハハ
ハハハハハ
ハハハハハ
ハハハハハ

ハ金ハハ
ハハハハハ

ハハハハハ

ハハハハハ

しょう ご ろう
鉦五郎

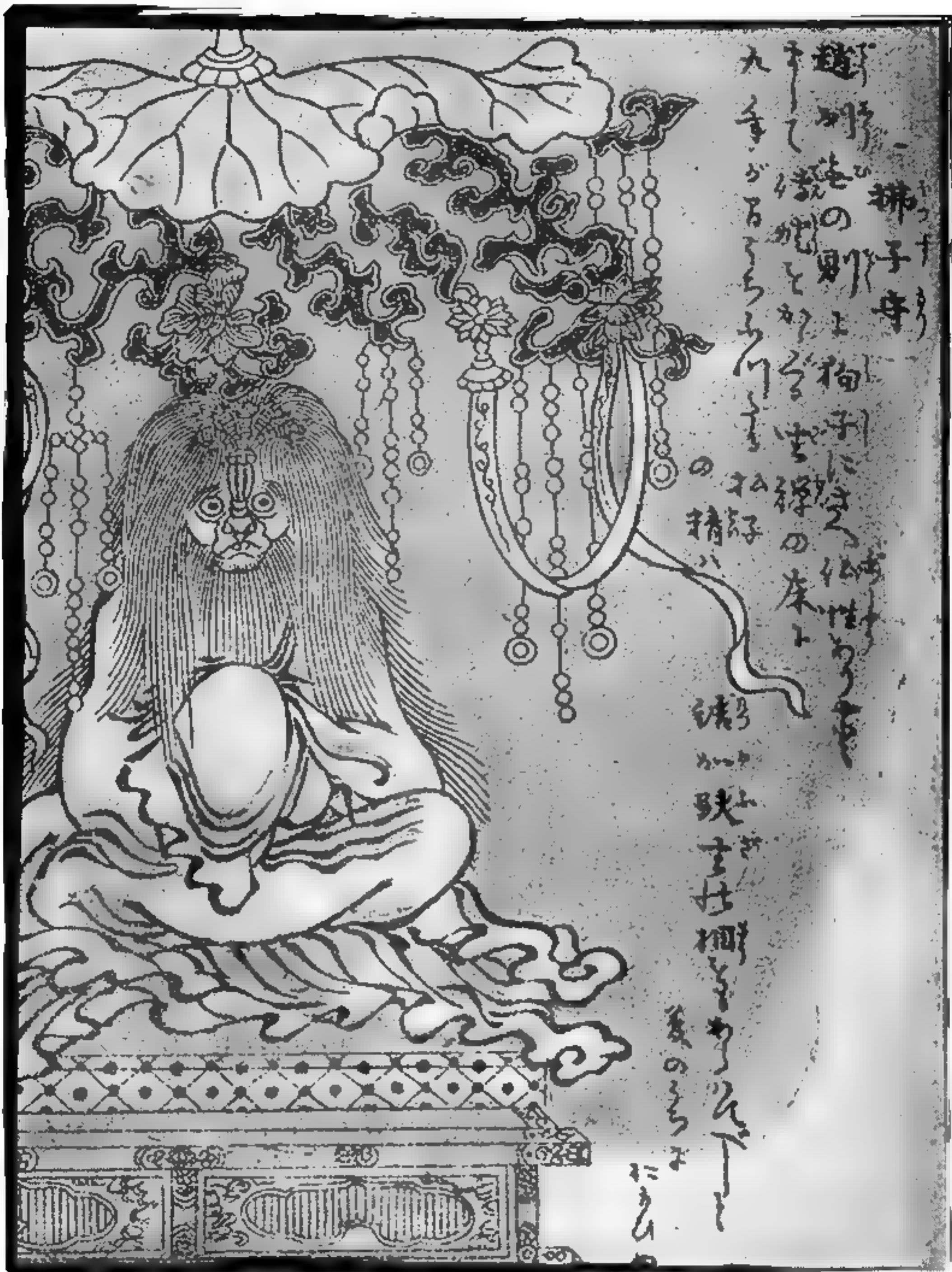
こがね にはと どり よどや
金の雞は淀屋辰五郎が家のたからなりしよし。
此かねも鉦五郎と言へるからは、金にてやあり
けんと、夢のうちにおもひぬ。



○ 河童 かつば
川太郎ともいふ

かつば
河童

川太郎ともいふ。



趙州無の則に、狗子にさへ仏性ありけり。ま
して伝燈をかゝぐる坐禪の床に、九年が間うち
ふつたる仏子の精は、結加趺坐の相をもあらは
すべしと、夢のうちにおもひぬ。

結加趺坐の相をもあらはすべしと、夢のうちにおもひぬ。

にふ

ほつ す もり 仏子守

趙州無の則に、狗子にさへ仏性ありけり。ま
して伝燈をかゝぐる坐禪の床に、九年が間うち
ふつたる仏子の精は、結加趺坐の相をもあらは

すべしと、夢のうちにおもひぬ。

栄螺鬼 さざえおに

雀海中ハ入り
はまぐりとなり
田鼠化して
鶏となるため
しもあれば、
造化のなす
ところ、さ
まえも鬼に
なるまじき
ものにもあ
らずと、夢
心に



さざえ
栄螺鬼 おに

おもひぬ。

雀海中に入てはまぐりとなり、田鼠化して鶏と
なるためしもあれば、造化のなすところ、さ
まえも鬼になるまじきものにもあらずと、夢心に



○鎗毛長 やりけ ちよう

虎隠良 こ いんりよう

○禪釜尚 ぜんふ しょう

○鞍野郎 くらや ろう

○鐙口 あぶみくち

○松明丸 たいまつ まる

○不々落々 ぶらぶら

○貝児 かい ちご

○髪鬼 かみおに

○角鹽漱 つのはん ぞう

○袋貉 ふくろむじな

○琴古王 ことふるぬし

○琵琶牧々 びわ ぼく ぼく

○三味長老 しやみ ちようろう

○襟立衣 えりたて ぎ

○経凛々 きやうりんりん

○乳鉢坊 にゅうばち ぼう

○瓢簞小僧 ひょうたんこ ぞう

○木魚達摩 もくぎよ だるま

○如意自在 にょい じざい

○暮露々々団 ぼろ ぼろ どん

○箒神 はきがみ

○蓑草鞋 みのわらじ



鎗毛長

日本無双の割竹者の
ふいふ色とりも怪
あやうきまぐらえ
うやのよう

虎に悪良

ふき敷の

革少

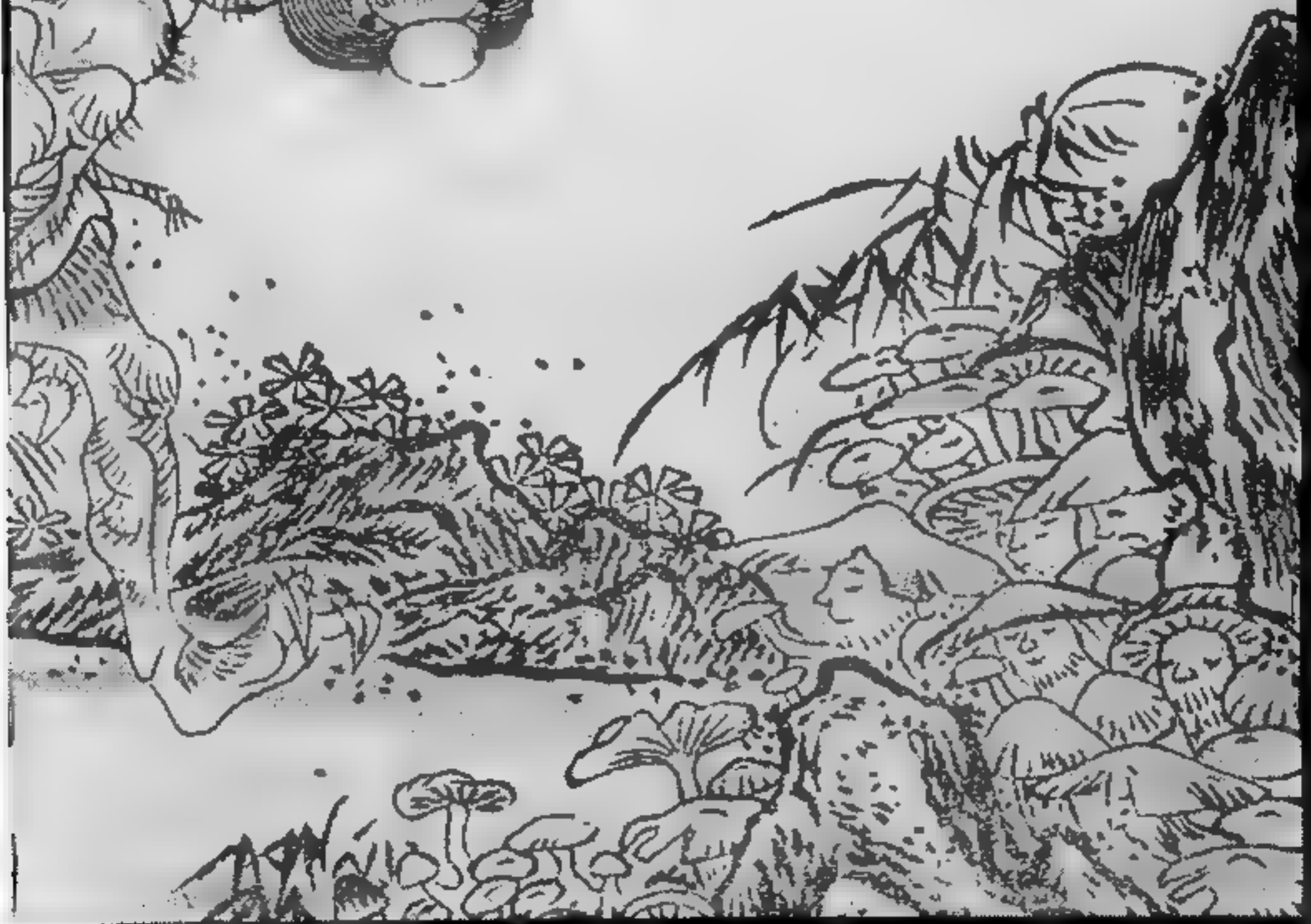
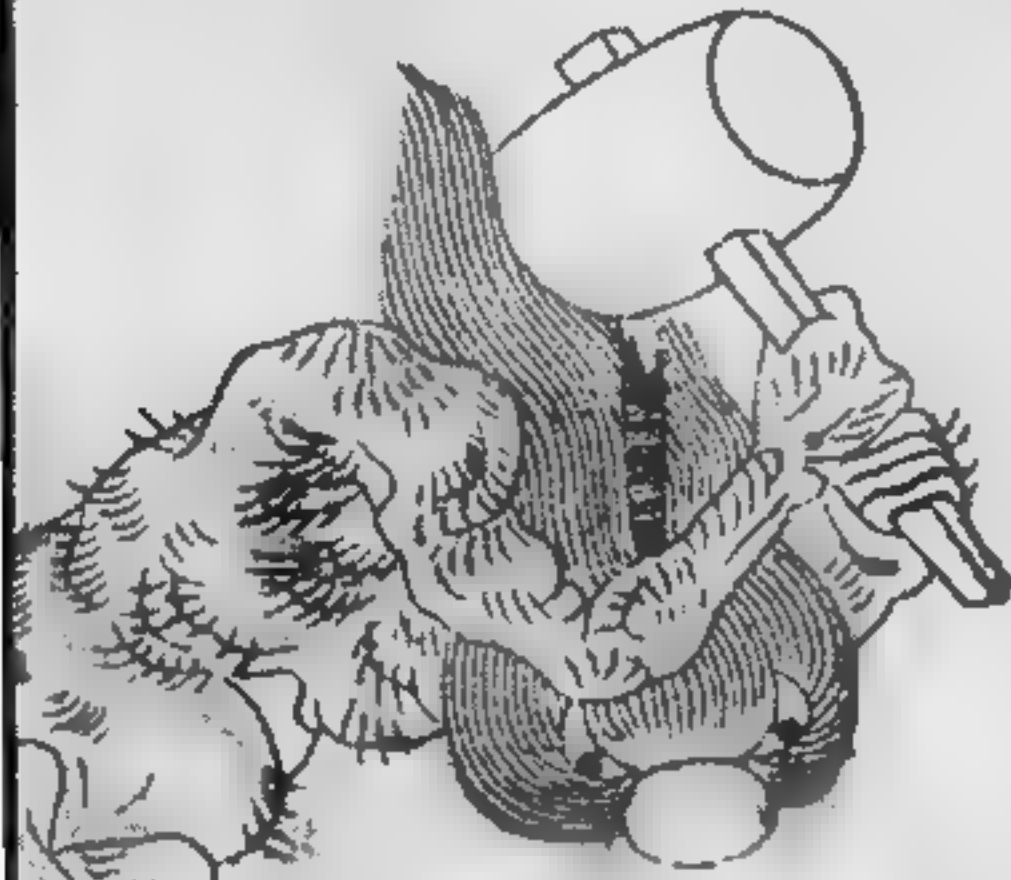
ふき敷

ふき敷

ふき敷

ふき敷

ふき敷



ぜんふしやう 茶は閑寂を事とするものから、陰気ありてかゝる怪異もありぬ
べし。文福茶釜のためしもや、ともに夢の中に思ひぬ。

やりけちやう 鎗毛長 日本無双の剛の者の手にふれたりし毛鑢にや。^{あや}怪しみを見てあや
 します。まづ先がけやの手がらをあらはす。／虎隠良 ^{こいんりやう}たけき ^{けもの}獣の ^{かは}革に
 て製したるきんちやくゆへにや、そのときこと千里をはしるがごとし。／

鞍野郎

保元の夜軍

鎌田政清

ふ

ふちも我ゆへ

ふききへう解る

恩もききへうに

ふききへうに

前輪のあたりを

ききへうに

魂もききへうに

呟ふ声いとおもしろく

夢のうらふおもしろ



鞍野郎

保元の夜軍に鎌田政清手がらをなせしも我ゆへなれば、いかなる恩をもたぶべきに、手がたをつけんと前輪のあたりをきりつけらるれば、気も魂もきへぎへとなりしとおしみて呟ふ声いとおもしろく、夢のうちに

もひぬ。



あぶみ くち
鏡口

ひざ
膝の口をのふかにいさせてあぶみを越しておりたゝんとすれども、なんぎの手なればと、おなじくうたふと、夢心におぼへぬ。



松明丸

松明の名は

あきし

深山

幽谷の杉木

よりともひぬ

ふち天狗つぶての

石より出る光にやと、夢心におもひぬ

たい まつ まる
松明丸

松明の名はあれども、深山幽谷の杉の木ずゑを
すみかとなせる天狗つぶての石より出る光にや
と、夢心におもひぬ。

落ち
不々

山田もる提灯の

火と見ゆれども

まことは蘭ぎくにかくれすむ

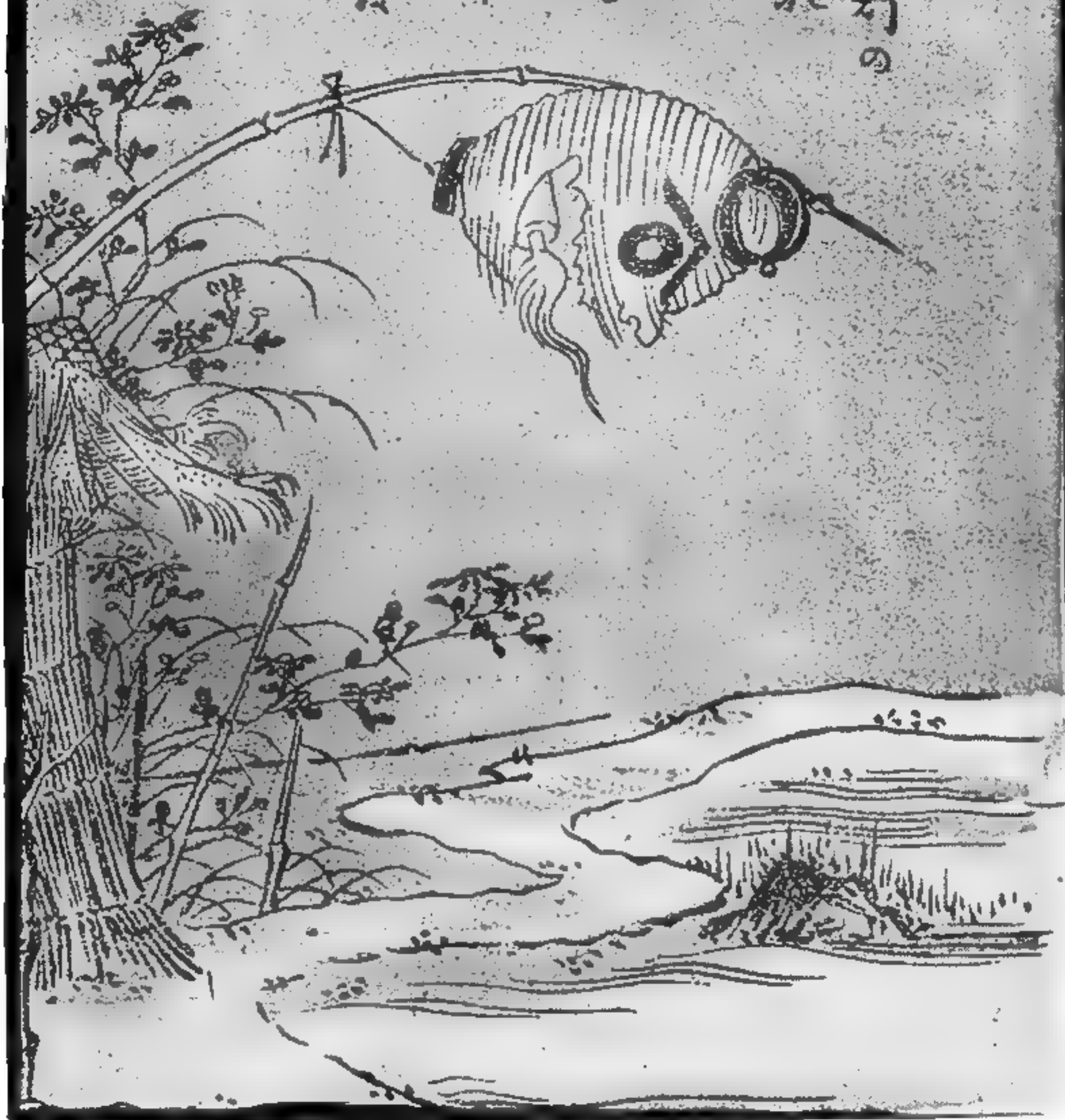
狐火なるべしと

ゆめのうちにおもひぬ

ゆめのうちにおもひぬ

ゆめのうちにおもひぬ

ゆめのうちにおもひぬ



ぶらぶら
不々落々

山田もる提灯の火とは見ゆれども、まことは蘭ぎくにかくれすむ狐火なるべしと、ゆめのうちにおもひぬ。

貝児

貝おけ這子など
 さんどな
 御まの調度
 ちご
 この貝児ハ這子の兄弟にやと
 おぼつかなく夢心に思ひぬ



かい ちご
 貝児

貝おけ這子など言へるは、やんごとなき御かたの調度にして、しばらくもはなるゝこと無れば、この貝児は這子の兄弟にやと、おぼつかなく夢心に思ひぬ。

○
懶 かわうそ



かわうそ
懶

身み 髪かみ 鬼おに
 父ちち の 遺い 跡せき
 千ち す じ の 落おち 髪がみ を 泥どろ 土つち
 汚けが した る 罪つみ に、かゝる くる し み を う くる な り と 言 ぶ
 を、夢ゆめ ごゝろ に お ぼ へ ぬ。



かみ おに
髪鬼

身体髪膚は父は、の遺跡なるを、千すじの落髪を泥土
 に汚したる罪に、かゝるくるしみをうくるなりと言ふ
 を、夢ごゝろにおぼへぬ。



つのはんぞう
角盛漱

なにを種とてうき艸のうかみもやらぬ小野の小町がそうしあらいの執心なるべしと、夢心におもひぬ。

袋貉

穴のむじなの直とまじりか
おぼつかなきことのたとへに
いつて袋のうちの
むじなも同じこと
あつゝ鹿を追ふ
獵師のためには
まことに袋の
ものをさぐるが
ごとくならんと
夢のうちに
おもひぬ



ふくろ むじな 袋貉

ごとくならんと、夢のうちに

穴のむじなの直をすることは、おぼつかなきことのたとへにいへり。袋のうちのむじなも同じことながら、鹿を追ふ獵師のためには、まことに袋のものをさぐるが

琴古主

八橋とか言へる替しやの
しらべをあらためしより
つくし琴は名のみにして
その音いろをきゝ知る
人さへまれば、そのうら
みをしらせんとてか、かゝ
る姿をあらはしけんと、
夢心におもひぬ。

夢心におもひぬ



琴古主

八橋とか言へる替しやのしらべをあらためしより、つくし琴は名のみにして、その音いろをきゝ知る人さへまれば、そのうらみをしらせんとてか、かゝる姿をあらはしけんと、夢心におもひぬ。



琵琶牧々

玄上牧馬と言へる琵琶はいにしへの
名器にして、ふしぎたびたびありければ、
そのぼく馬のびはの転にして、ぼくぼ
くと言ふにやと、夢のうちにおもひぬ。

び わ ぼく ぼく
琵琶牧々

くと言ふにやと、夢のうちにおもひぬ。

げん ぼく ぼ
玄上牧馬と言へる琵琶はいにしへの名
器にして、ふしぎたびたびありければ、
そのぼく馬のびはの転にして、ぼくぼ



三味長老
 諺に沙弥から長老にはなれずとは、
 沙弥渴食のいやしきより、国師長老の
 尊にはいたりがたきのたとへなれど
 も、是はこの芸にかんのうなる人の此みちの長たるものと用ひられしその
 人の器の精なるべしと、夢の中に思ひぬ。

夢の中に思ひぬ

三味長老

ことはば しゃみ ちやうらう
 諺に沙弥から長老にはなれずとは、
 かつじき ことくし
 沙弥渴食のいやしきより、国師長老の
 たつとき
 尊にはいたりがたきのたとへなれど

も、是はこの芸にかんのうなる人の此みちの長たるものと用ひられしその
 うつは せい
 人の器の精なるべしと、夢の中に思ひぬ。

彦山の豊前坊、白峯の相摸坊、大山の伯耆坊、
 いづなの三郎、富士太郎、その外木の葉天狗ま
 で、羽団扇の風にしたがひなびくくらまの山の
 僧正坊のゑり立衣なるべしと、夢心におもひぬ。



えり たて ごろも
襟立衣

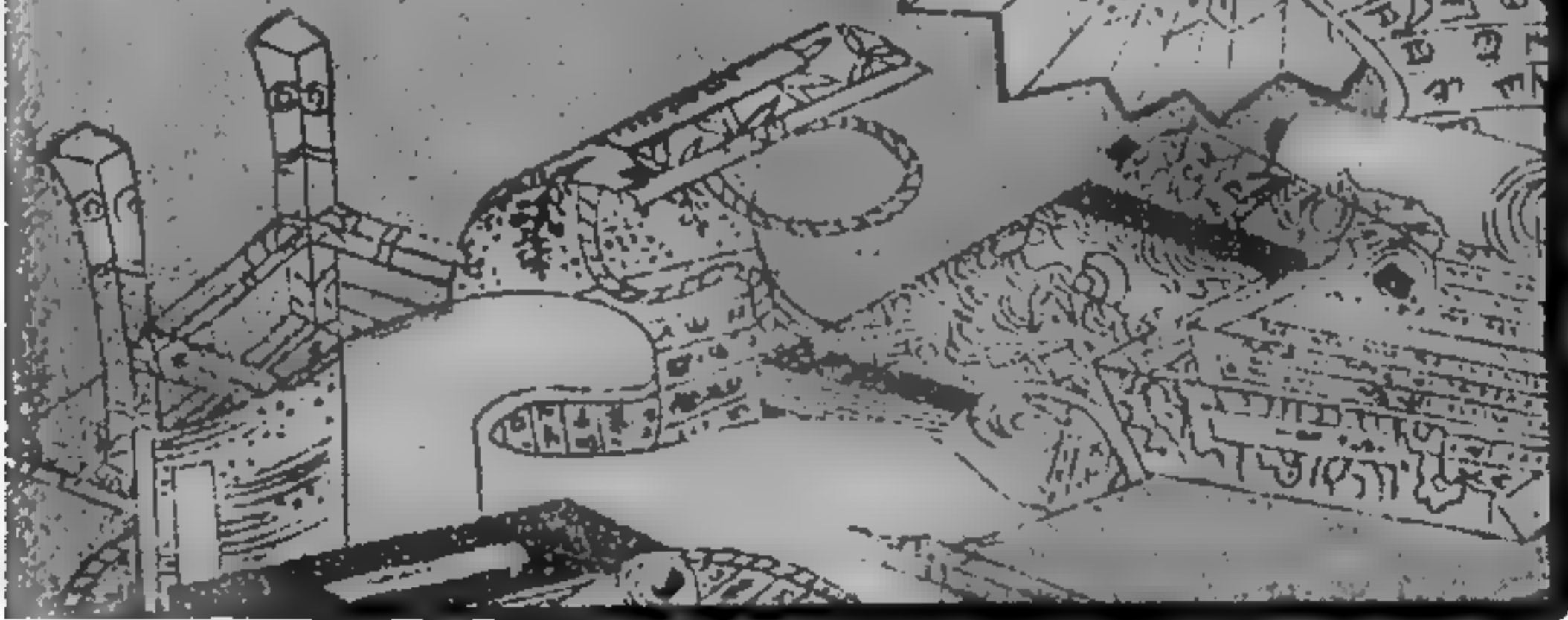
ひこ よぜんぼう よう さがみ
 彦山の豊前坊、白峯の相摸坊、大山の伯耆坊、
 いづなの三郎、富士太郎、その外木の葉天狗ま
 で、^{はうち}羽団扇の風にしたがひなびくくらまの山の
 僧正坊のゑり立衣なるべしと、夢心におもひぬ。

経凛々

尊ふとき経文のかゝるありさまは、咒咀諸毒薬
のかえつてその人に帰せし守敏僧都のよみ捨ら
れし経文にやと、夢ごゝろにおもひぬ。

経文にやと

夢ごゝろにおもひぬ



きよう りん りん
経凛々

尊ふとき経文のかゝるありさまは、咒咀諸毒薬
のかえつてその人に帰せし守敏僧都のよみ捨ら
れし経文にやと、夢ごゝろにおもひぬ。



にゆう ばち ぼう ひよう たん こ ぞう
乳鉢坊・瓢箪小僧

へうたん
 小僧に肝
 を消して

青ざめたりしが、乳ばち坊の泉ばちのおとに夢さめぬとおもひぬ。



もく ぎよ だる ま
木魚達摩

うちにおもひぬ。

じやうよつ かくばん ぜんしやう
杖 払木魚客板など、禪床ふだんの仏
具なれば、かゝるすがたにもばけぬべ
し。払子^{ほつすもり}守とおなじきものかと、夢の

○ 垢嘗
あか なめ



あか なめ
垢嘗

如意にょい 自在じざい
 如意にょいは痒かゆところをかくに、おのれがお
 もふところにとゞきて心のごとくなる
 よりの名なれば、かく爪つめのながきも痒
 ところへ手のとゞきたるばけやうかなと、夢心に思ひぬ。



によ い じ ざい 如意自在

によい かゆき
 如意は痒ところをかくに、おのれがお
 もふところにとゞきて心のごとくなる
 よりの名なれば、かく爪つめのながきも痒
 ところへ手のとゞきたるばけやうかなと、夢心に思ひぬ。

普化禪宗と虚無僧と言ふ。虚無空じやくをむねとして、いたるところ蓐むしろに座して。職人づくし歌合に、暴露ともよめれば、かの世捨人のきふるせるぼろぶとんにやと、夢の中におもひぬ。



ぼろぼろとん 暮露々々団

よけぜんしう こむそう きよ
普化禪宗を虚無僧と言ふ。虚
無空じやくをむねとして、い
たるところ蓐むしろに座して

もたれりとするゆへ、また^{こむそう}蓐僧とも言ふよし。職人づくし歌合に、^{ぼろ}暴露ともよめれば、かの世捨人のきふるせるぼろぶとんにやと、夢の中におもひぬ。

箒神

野わけはしたなく吹けるあした、林かんに酒をあた
むるとて、朝きよめの仕丁のはきあつめぬるは、きに
やと、夢心におもひぬ。



ははき がみ
箒神

野わけはしたなく吹けるあした、林かんに酒をあた
むるとて、朝きよめの仕丁のはきあつめぬるは、きに
やと、夢心におもひぬ。



みの わらじ
養草鞋

雪は鶴毛に似て飛でさんらんし、人は鶴くはくしやう 裳やうを
きてたつて徘徊はいくはいせし、そのふるみの 養やうの妖まじなくはる
にやと、夢の中におもひぬ。



○面靈氣 めんれいき

○幣六 へいろく

○雲外鏡 うんがいきよう

○鈴彦姫 すずひこひめ

○古空穗 ふるうつぼ

○無垢行騰 むくむかばき

○猪口暮露 ちよくぼろん

○瀬戸大将 せとだいしよう

○五徳猫 ごとくねこ

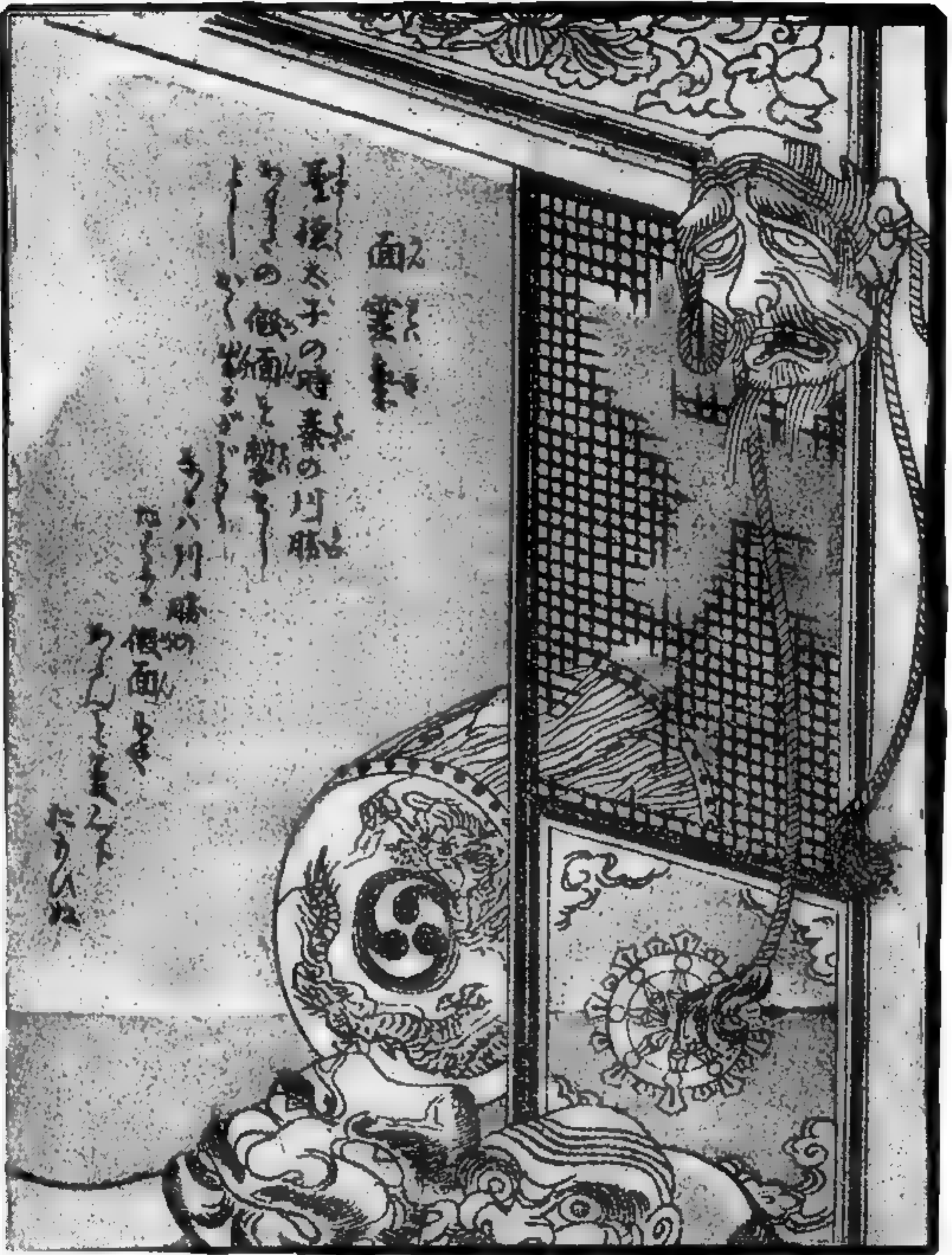
○鳴釜 なりがま

○山嵐 やまおろし

○瓶長 かめおさ

○宝船 たからぶね





面靈氣

しやうとく 聖徳太子の時、^{あまた} 秦の川勝あまたの仮面を製せしよし。かく^{いけ} 生るがごとくなるは、川勝のたくめる^{めん} 仮面にやあらんと、夢心におもひぬ。

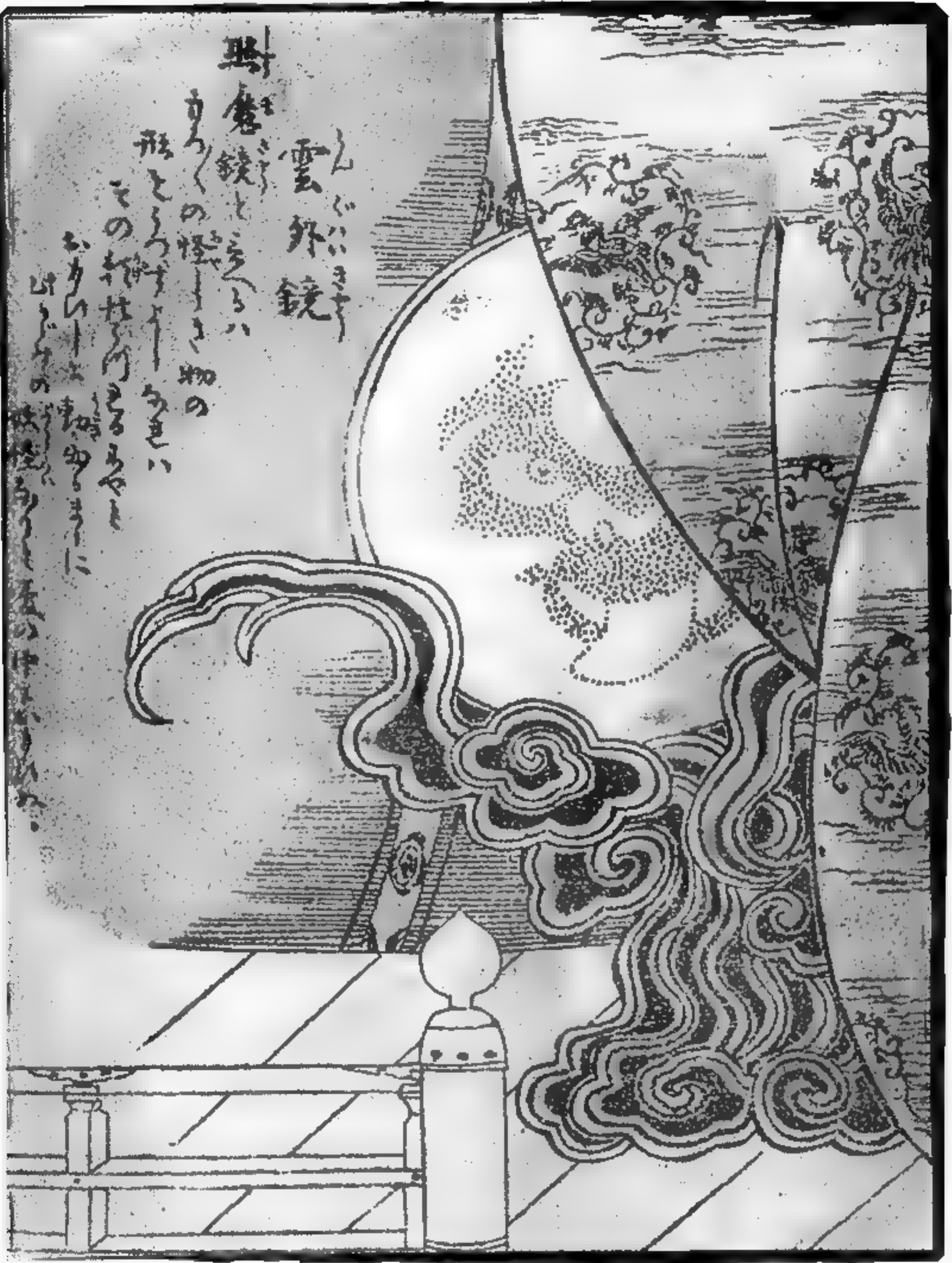
幣六

花のみやこに社さだめず、あらふるこゝろまします、
 神のさわぎ出給ひしにやと、夢心におもひぬ。



幣六

花のみやこに社^{やしろ}さだめず、あらふるこゝろまします、
 神のさわぎ出給ひしにやと、夢心におもひぬ。



うん がい きよう
雲外鏡

しやうまきやう 照魔鏡と言へるは、もろもろの怪しき物の形
をうつすよしなれば、その影のうつれるにやと
おもひしに、動出るまゝに、此かゞみの妖怪

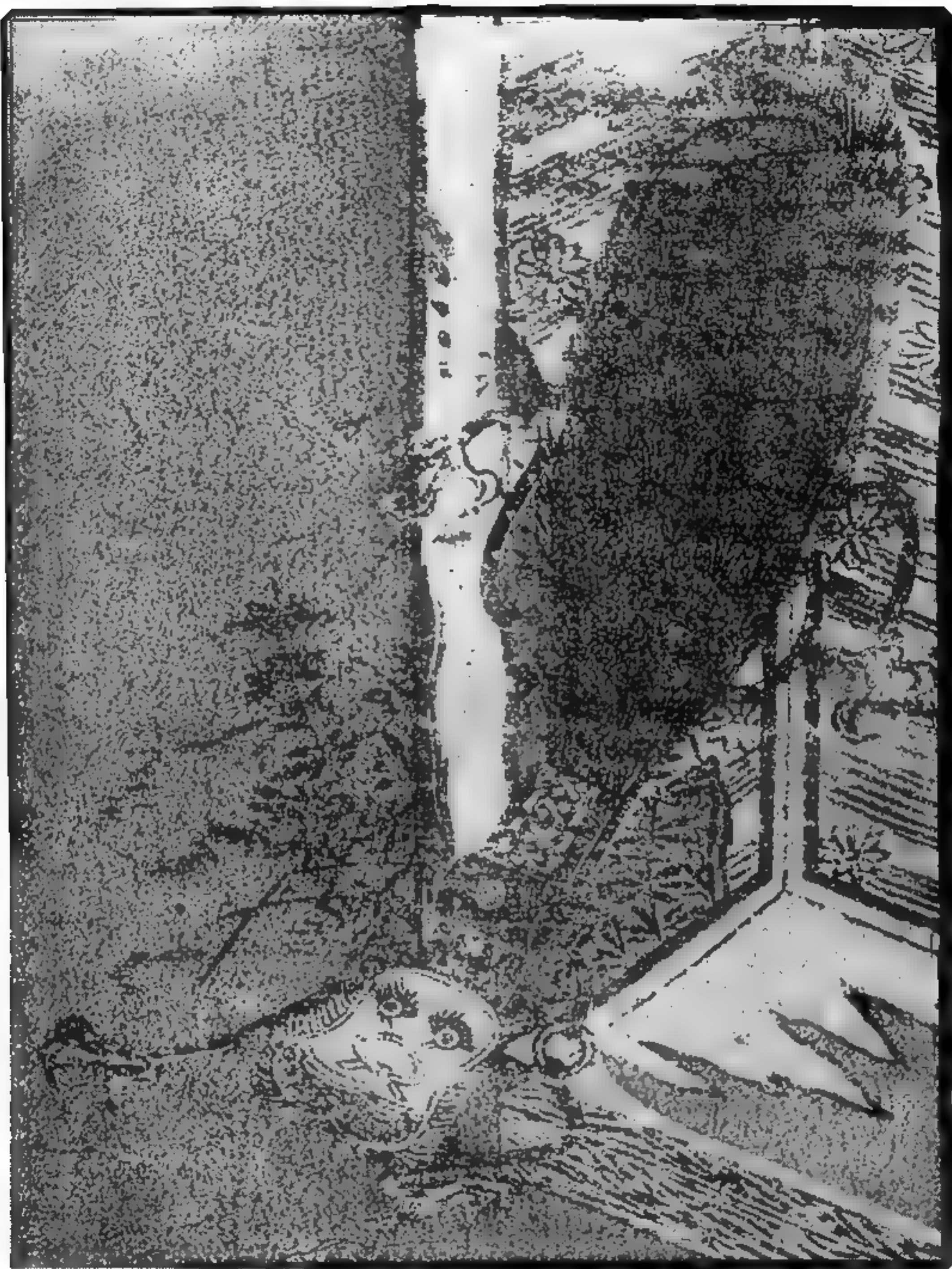
なりと、夢の中におもひぬ。



かぐら
 鈴彦姫
 かくれし神を出し奉んとて岩戸のまへにて神楽
 を奏し給ひし天^{あまのうずめ} 鈿女のいにしへもこひしく、
 夢心におもひぬ。

すず ひこ ひめ
鈴彦姫

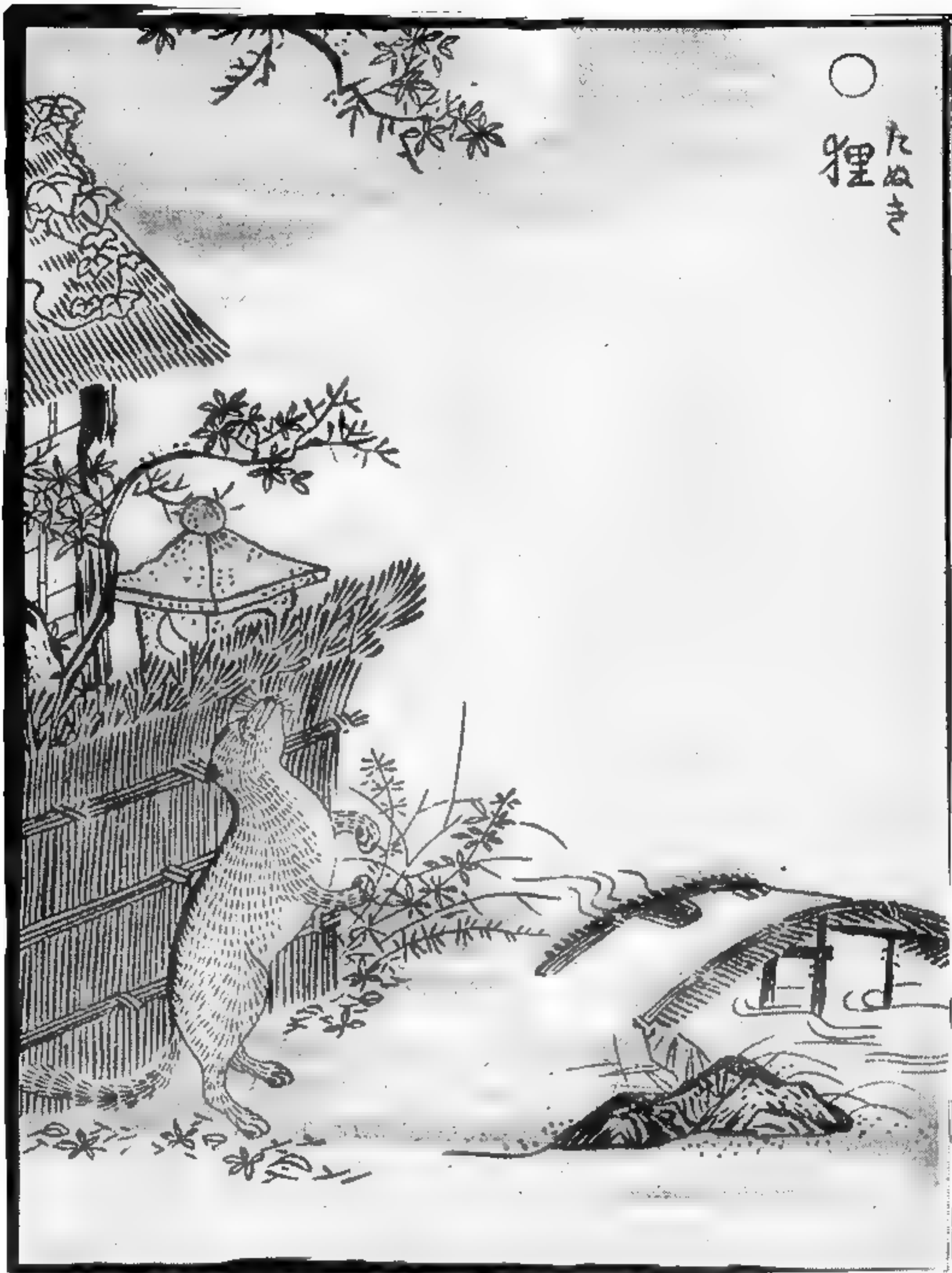
かぐら
 かくれし神を出し奉んとて岩戸のまへにて神楽
 を奏し給ひし天^{あまのうずめ} 鈿女のいにしへもこひしく、
 夢心におもひぬ。



百器徒然集……………二三八

ふる うつ ぼ
古空穂

○
狸
たぬき



陰
.....
一一

たぬき
狸

無垢行騰

赤沢山の露ときへし

河津の三郎が行騰

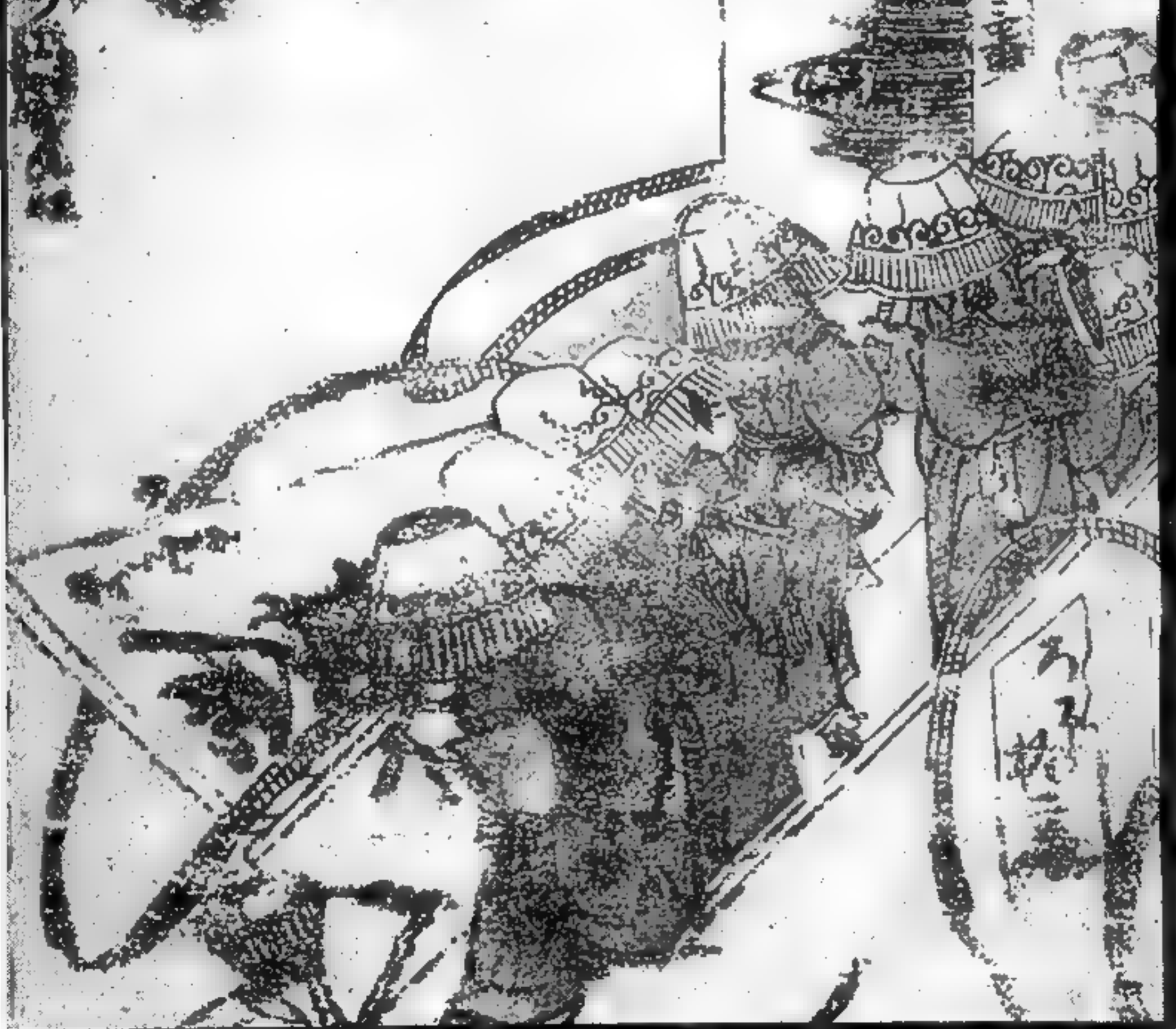
まろし思ひぬ



むくむかばき
無垢行騰

あかきは
赤沢山の露ときへし河津の三郎が行騰
にやと、夢心に思ひぬ。

明皇あるとき書を見給ふに、御机の上
に小童あらはる。明皇叱したまへば、
臣はこれ墨の精なりと奏してきへうせ
けるよし。此怪もその類かと、夢のうちにおもひぬ。



ちよ く ぼ ろん
猪口暮露

明皇あるとき書を見給ふに、御机の
上に小童あらはる。明皇叱したまへば、
臣はこれ墨の精なりと奏してきへうせ

けるよし。此怪もその類かと、夢のうちにおもひぬ。

瀬戸大將

架をよこたへて詩を賦せし

曹孟徳より律すきの

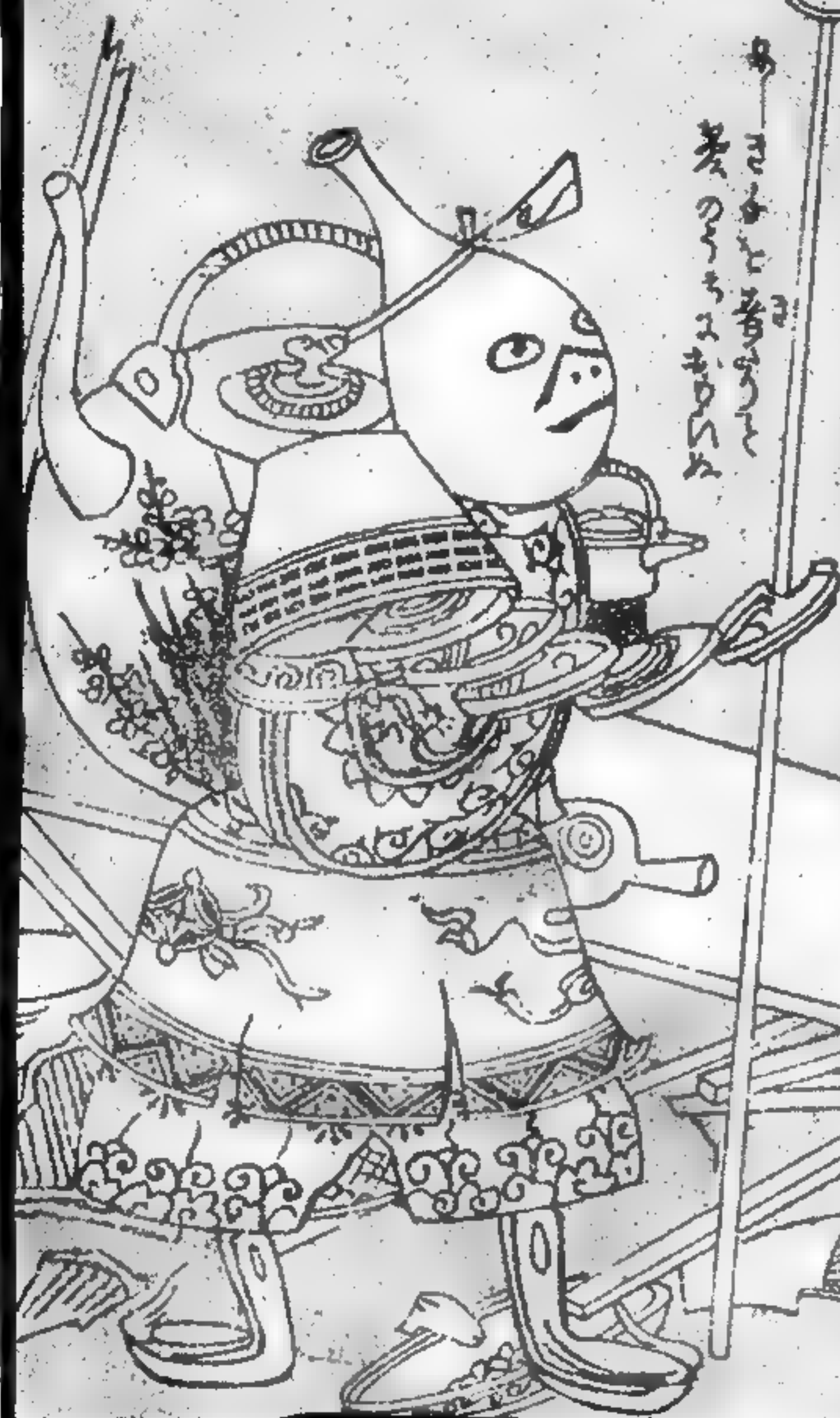
らつやきのからきめ見せし

爛鍋の寿亭候にや。蜀江のにしき手を着たりと、



あきふと著たりと

夢のうちにおもひぬ



瀬戸大將

夢のうちにおもひぬ。

架をよこたへて詩を賦せし曹孟徳にか
らつやきのからきめ見せし爛鍋の寿亭
候にや。蜀江のにしき手を着たりと、

五徳猫

七とくの舞を
ふたつわすれて
五徳の官者と
いふ……
おきばこの猫も
いふ……
忘れんと夢の
中……おもひぬ



五徳猫

七とくの舞をふたつわすれて、五徳の官者と言ひしためしもあれば、この猫もいかなることをか忘れけんと、夢の中におもひぬ。



白澤 怪図 曰
 飯 飯 作 声 鬼 名 斂 女
 有 此 怪 則
 呼 鬼 名 其 怪 忽 自 滅
 夢 の う ち に お も ひ ぬ

なり がま
鳴釜

はくたくひくはいのづにいはいく はんそうこへをなすきをれんじよとなづく このくはいあるとき
 白沢 避 怪 図 曰 飯 飯 作 声 鬼 名 斂 女 有 此 怪 則
 きのなをよべば そのくはいたちまちおのづからめつす
 呼 鬼 名 其 怪 忽 自 滅
 夢のうちにおもひぬ。



やま おろし
山風

がうちよ けもの
豪猪といへる獣あり。山おやじと言ひて、そう身の毛
はりめぐらし、此妖^{ようくわい}怪も名とかたちの似たるゆへに
かく言ふならんと、夢心におもひぬ。

瓶長

うざわひは吉事の

ふくすところと言へば

酌どもはきび飲め

うづめだきことを

かねて知らす

瓶長にやと

夢のうちにおもひぬ



かめ おさ
瓶長

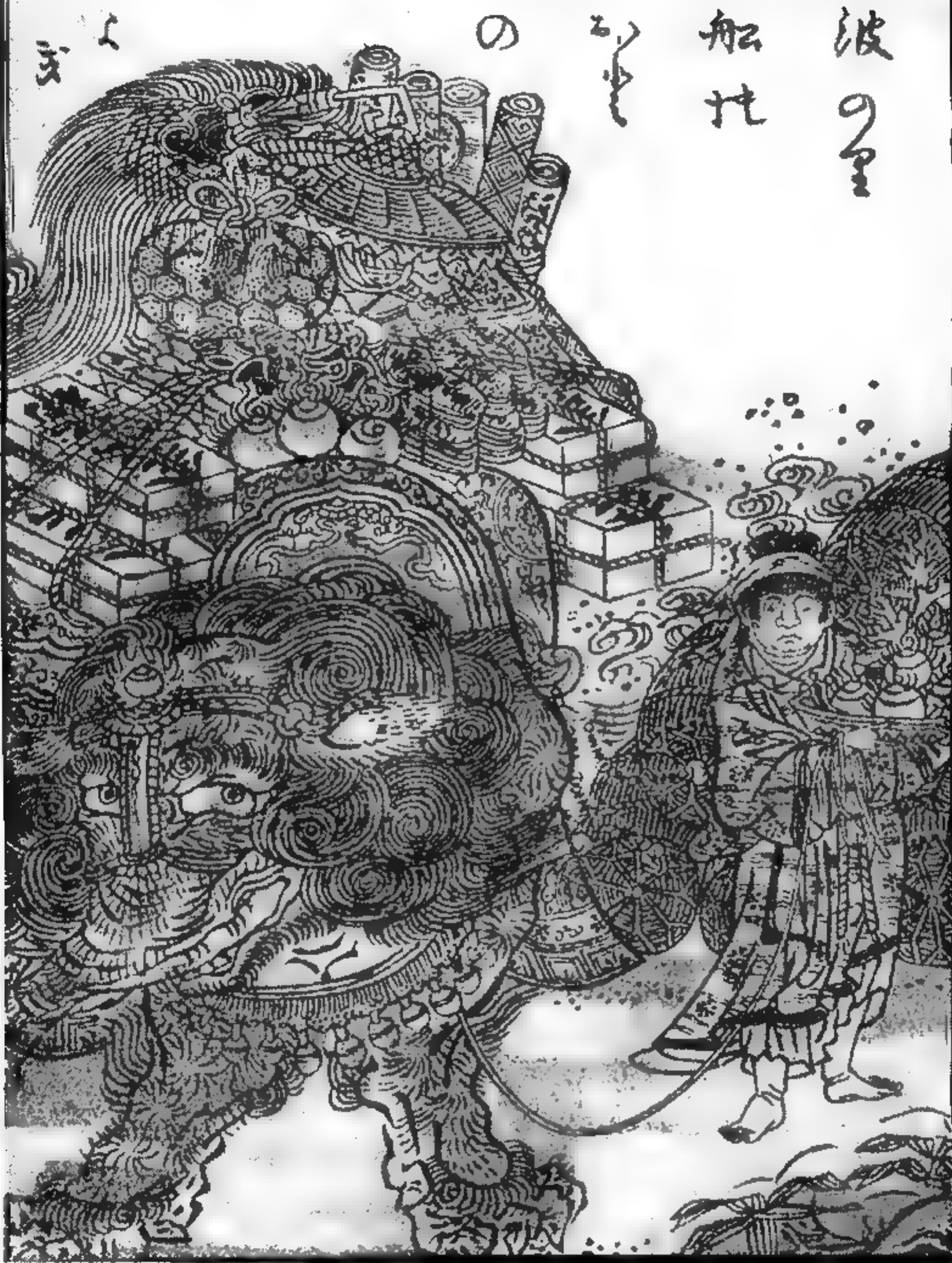
わざわひは吉事のふくすところと言へば、酌どもつきず、飲どもかはらぬめでたきことを、かねて知らする瓶長にやと、夢のうちにおもひぬ。





たから おね
宝船

みなめざめ



百番後然装.....二四八

たから ぶね
宝船

波のり船のおとのよきかな



かまいたち
窮奇

かまいたち
窮奇

2
43



解説 妖怪絵師「鳥山石燕」の意図

多田 克己

鳥山石燕は姓を佐野、名を豊房といっています。正徳二年（一七一二）生まれの江戸の人で、天明八年（一七八八）八月二日に七十七歳で没しています。石燕は狩野玉燕かのうぎよくえん季信もとのぶ（あるいは狩野周信まさのぶ）に学んだ狩野派の画家です。狩野派とは室町時代後期の、狩野元信（または狩野正信の説もあり）を祖とする、幕府御用絵師を多く輩出した、日本の代表的な画派です。石燕は代々幕府の御坊主である家系に生まれ、経済的には恵まれたらしいことがわかっています。しかも石燕が絵師として作品を残すようになったのは、四十歳代以降で、「画図百鬼夜行」シリーズのような、主たる版本画は六十歳代以降と異例的に遅いものでした。彼の友人である大田南畝おおた なんぼの随筆によれば、石燕は根津（現在の東京都文京区）に庵を編み、隠居仕事で絵を描いていたそうです。収入のために描いていたのではなく、自己表現の手段として絵画を嗜たしなんでいたらしいのです。現存している作品をしらべると、もともと好んだ題材が妖怪でした。

妖怪を描くのにあたって、石燕がわざわざ狩野派を学んだのには理由があります。近世

になって石燕以外のさまざまな画家も妖怪画を残していますが、そうした妖怪画を始めた画家も狩野派の祖、狩野元信といわれています。しかも『百鬼夜行絵巻』を描いたといわれる土佐光信とさみつのぶ（土佐派の代表的存在で、宮廷の絵所預えどころあずかり）は元信から狩野派の中国的な作風を学び、さらに元信と姻戚関係いんせきになったとされます。すなわち日本で最高の妖怪画を描くためにも、石燕が狩野派画家となることは必須の条件であったと思われる。それほどまでして本格的な妖怪が描きたかったのでしょうか。

幕府御用絵師の多い狩野派は、縁起を祝うものやさまざまな故事を題材にしたものを要求されたことから、技術的な画力以上に日本、中国を問わず、さまざまな古典に精通していなければなりません。その中でも石燕は、当時の江戸の文化人が一目を置くほどの博学者であったようです。それは「百鬼夜行」シリーズ『画図百鬼夜行』『今昔画図続百鬼』『今昔百鬼拾遺』『百器徒然袋』に書かれている添書にもにじみ出ています。その引用されたと思われる書籍は次のように大別できます。

- ① 日本の古典／伊勢物語、宇治拾遺物語、古今著聞集、今昔物語集、徒然草、枕草子など
- ② 和歌／古今和歌集、万葉集など
- ③ 軍記物語／源平盛衰記、曾我物語、太平記、平家物語など
- ④ 近世の怪談集／御伽百物語、怪談全書、奇異雑談集きいぞうたんしゅう、諸国百物語、剪灯新話せんとうしんわ、曾呂利物語、太平百物語、百物語評判など

⑤ 浮世草子／好色一代男、西鶴諸国ばなし、金々先生栄花夢など

⑥ 仏教説話集／勧化かんげ一声電いつせいでん、輟耕録てつこうろく、発心集など

⑦ 中国の古典／三国志演義、周礼しゅうらい、小説、春秋左氏伝、神仙伝、山海経せんがいききょう、莊子、搜神記、抱朴子ほうぼくし、文選もんぜん、西陽雜俎ゆうようざつそ、礼記、列仙伝、論語など

⑧ 本草書（漢方薬書）、博物学書／本草綱目、和漢三才図会など

⑨ その他／七十一番職人歌合、風姿花伝など

そのほかに随筆集から各地の伝説や民間伝承を取材してもいます。さらに石燕は能のうのテキストである、次のような謡曲からも引用しています。

葵上あおいのうえ、安達原あだちがはら（黒塚くろづか）、大江山おおえ、翁おきな、鉄輪かねわ、関羽かんう、菊慈童きくじどう、黒主くろぬし、鞍馬天狗くらまてんぐ、鍾馗しやうき、猩猩しやうじやう、殺生石せつしやうせき、高砂たかさご、土蜘蛛つちぐも、道成寺どうじやうじ、鵠ねえ、橋姫はしひめ、芭蕉ばしやう、鉢木はちのき、花筐はながたみ、紅葉狩もみじがり、頼豪らいごう、羅生門らしやうもんなどですが、どの妖怪になんの謡曲が対応しているのかをしらべるだけで、現代人

にはちよつとした教養が身につくと思います。『百器徒然袋』には四十八種の妖怪が紹介されていますが、それが全て能、浄瑠璃じやうるり、歌舞伎のいずれかの芝居物語と結びついているらしいのです。

すると石燕の「百鬼夜行」シリーズとは、勉強しなければおもしろくないものなのではないか。その答は違ふと思います。たとえば「百々目鬼びやくびやくめき」という妖怪は手長（盗みぐせのある人の意）な女で掏摸師すりだったため、鳥目ちやうもく（鳥の目のような孔あなのある意で銅銭の意）の

精が腕に付いて祟たたられたとありますが、これはお金を「御足おあし」とも呼ぶことから、足が付いて手に罹かかる（犯罪事実の手がかりが見つけられて、いやな目にあう）という意味にひっかけた石燕の洒落しやれでした。そんなひどい目に百回も遭った、弱り目に祟り目（困ったときにさらによくない事が重なる意）ならば、さっさと掏摸の「足を洗えばいい」というわけです。つまり百々目鬼とは妖怪でもなんでもない石燕の創作で、漫画的な表現だったので、「百鬼夜行」シリーズには全部で二百数体ほどの妖怪が紹介されていますが、そのうち三分の一ほどが石燕によるお遊びです。読者もどれがそうなのか見つけ出してください。

石燕は戯作者げさくである大田南畝と同じく、江戸の狂歌師で、他の狂歌師とも交流がありました。狂歌とはうわべは高尚こうしような和歌や漢詩のふりをして、内容は諧謔かいぎやく（戯言ざんげん）と滑稽ユーモアを詠うたがわんだ短歌です。この狂歌を初めて絵画表現にとり入れたのは石燕の弟子である歌川豊春といわれますが、師匠ししやうである石燕がすでに自分の作品の中で表現していたらしいのです。

洒落好きの石燕は死んでもその身体で洒落を表現したようです。七十七歳で没して鬼籍に入った石燕は、浅草光明寺（東京都台東区元浅草四丁目）に葬られましたが、この場所は江戸城本丸から見て正確な鬼門（東北）の位置にあったのです。

（平成十七年六月）

索引

あ

あおあんどう	二五
青行燈	二五
あおさぎのひ	二五
青鷺火	二五
あおにようぼう	二五
青女房	二五
あおぼうず	二五
青坊主	二五
あかした	二五
赤舌	二五
あかなめ	二五
垢嘗	二五
あぶみくち	二五
鍍口	二五
あぶらあかご	二五
油赤子	二五
あまのさこ	二五
天逆毎	二五
あみきり	二五
網剪	二五
あめおんな	二五
雨女	二五
あめふりこぞう	二五
雨降小僧	二五
あやかし	二五

い

いきりよう	四六
生霊	四六
いっつまで	四六
以津真天	四六
いぬがみ	四六
犬神	四六
いやや	四六
否哉	四六
うしおに	四六
牛鬼	四六
うしのときまいり	四六
丑時参	四六
うしろがみ	四六
後神	四六
うば	四六
姥が火	四六
うぶめ	四六
姑獲鳥	四六
うみざと	四六
海座頭	四六
うわん	四六

え

うんがいきよう	二六
雲外鏡	二六
えりたてじろも	二五
襟立衣	二五
えんえんら	二五
煙々羅	二五
お	二五
おうまがとき	二五
苧うに	二五
逢魔時	二五
おおかぶろ	二五
大禿	二五
おおくび	二五
大首	二五
おおざと	二五
大座頭	二五
おさかべ	二五
長壁	二五
おさこうぶり	二五
長冠	二五
おしろいばば	二五
白粉婆	二五

おとろし	五
鬼	七
鬼一口	一六
龍車	一五
陰摩羅鬼	一七

骸骨	三
貝児	二六
隠里	一八
影女	一五
元興寺	一五
火車	三
火前坊	一五
片輪車	一五
河童	一六
金霊	一六
窮奇	三

髪鬼	二九
瓶長	二五
川赤子	二〇
瀬	一九
岸涯小僧	一六
加牟波理入道	一〇

狐火	二四
鬼童	一三
絹狸	二〇
狂骨	一八
経凛々	二六

沓頼	二〇
鞍野郎	二四
黒塚	四

毛羽毛現	一七
毛倡妓	一〇
倩兮女	一五

こ

虎隠良	二三
古庫裏婆	一七
小雨坊	一六
古戦場火	一八
小袖の手	一六
木魅	一〇
五徳猫	二四
琴古主	二三
古籠火	二四

さ

逆柱 <small>さかばしら</small>	四三
栄螺鬼 <small>さざえおに</small>	二〇
覚 <small>さと</small>	六六
皿かぞえ <small>さんせい</small>	六九
山精	七五
蛇骨婆 <small>じやこつばば</small>	一四九
蛇帯 <small>じやたい</small>	一五五
邪魅 <small>じやみ</small>	一二二
三味長老 <small>しやみちやうろう</small>	二三四
酒顛童子 <small>しゆてんどうじ</small>	一九九
しょうけら <small>しやうころう</small>	二五
鉦五郎 <small>しやうごろう</small>	二〇六
燭陰 <small>しよくいん</small>	二二六
絡新婦 <small>じよろうぐも</small>	二二七
白児 <small>しらちこ</small>	二六
不知火 <small>しらぬい</small>	八六

死霊 <small>しりよう</small>	四七
白容裔 <small>しろうねり</small>	二〇六
蟹気楼 <small>しんきろう</small>	一三七
す	
水虎 <small>すいこ</small>	七七
鈴彦姫 <small>すずひこひめ</small>	二三七
硯の魂 <small>すずりたましい</small>	一七七
せ	
殺生石 <small>せつしようせき</small>	一七〇
瀬戸大將 <small>せとだいしよう</small>	二四一
禅釜尚 <small>ぜんふしやう</small>	二二三
そ	
叢原火 <small>そうげんび</small>	二九
た	

松明丸 <small>たいまつまる</small>	二六
高女 <small>たかじよ</small>	三八
宝船 <small>たからぶね</small>	一九五
宝船 <small>たからぶね</small>	二四七
宝船 <small>たからぶね</small>	二四八
滝霊王 <small>たきれいおう</small>	一八六
狸 <small>たぬき</small>	二二
玉藻前 <small>たまものまえ</small>	八四
ち	
提灯火 <small>ちようちんび</small>	九一
猪口暮露 <small>ちよくぼろん</small>	二四〇
塵塚怪王 <small>ちりづかいおう</small>	一九七
つ	
土蜘蛛 <small>つちぐも</small>	二七
角盥漱 <small>つのはんぞう</small>	二二〇
釣瓶火 <small>つるべび</small>	三〇

て

鉄鼠てつそ 四〇

手の目てのめ 三九

寺つつき 三二

鼬てんぐ 二六

天狗てんぐ 二三

天狗磔てんぐつばて 二四

天井下てんじようくだり 二三

天井嘗てんじようなめ 二〇五

と

道成寺鐘どうじようじのかね 二四

燈台鬼とうだいき 二五

百々目鬼どろたばう 二九

泥田坊 二六

な

鳴釜なりがま 二四三

に

入内雀にゆうないすずめ 三三

乳鉢坊にゅうばちばう 二二七

如意自在によういじざい 二二九

人魚にんぎょ 二四〇

人面樹にんめんじゆ 二二九

ぬ

鵲ぬえ 二二〇

ぬっぺつぽう 二二

ぬらりひよん 二六

塗仏ぬりほとけ 二六

濡女ぬれおんな 二七

ね

猫またねこ 二七

の

野槌のづち 二二六

野寺坊のでらばう 二二七

野衾のぶすま 二二五

は

墓の火はかのひ 二九

白沢はくたく 二八七

ばけの皮衣かわごろも 二〇二

橋姫はしひめ 二八〇

芭蕉精ばしやうのせい 二七六

機尋はたひろ 二六七

箒神はきはみがみ 二三二

返魂香はんこんかう 二四二

般若はんにや 二八

ひ

○ 網^{あみ} 剪^{きり}



あみ きり
網剪

火消婆 <small>ひけしばば</small>	九三
魅 <small>ひとたま</small>	九六
人魂 <small>ひとたま</small>	九八
日の出 <small>ひで</small>	二六
比々 <small>ひひ</small>	二六
火間蟲入道 <small>ひまむしにゆうどう</small>	二九
ひようすべ	三五
瓢簞小僧 <small>ひょうたんこぞう</small>	二七
屏風 <small>びやうぶのぞき</small>	二六
日和坊 <small>ひよりぼう</small>	二五
琵琶牧々 <small>びわくぼく</small>	二三
ふ	
風狸 <small>ふうり</small>	二七
文車妖妃 <small>ふぐるまようひ</small>	二六
袋貉 <small>ふくろむじな</small>	二三
舟幽霊 <small>ふなゆうれい</small>	二〇
不々落々 <small>ぶらぶら</small>	二七

ふらり火 <small>ふるうつぽ</small>	三
古空穂 <small>ふるつばき</small>	二六
古山茶の霊 <small>ふるつばきのれい</small>	二〇
震々 <small>ふるふる</small>	二〇
へ	
幣六 <small>へいろく</small>	三五
ほ	
彭侯 <small>ほうこう</small>	二四
方相氏 <small>ほうそうし</small>	二五
方相氏 <small>ほうすもり</small>	二五
松子守 <small>しょうし</small>	二九
骨女 <small>ほねおんな</small>	二六
骨傘 <small>ほねからかさ</small>	二七
暮露々々団 <small>ぼろぼろどん</small>	三〇
ま	
反枕 <small>まくらがえし</small>	四

見越 <small>みこし</small>	五
蓑火 <small>みのび</small>	二七
蓑草鞋 <small>みのわらじ</small>	三二
む	
無垢行騰 <small>むくむかばき</small>	二九
絡 <small>むじな</small>	二四
め	
目競 <small>めくらべ</small>	二二
面霊気 <small>めんれいき</small>	三四
も	
魍魎 <small>もうりよう</small>	二三
木魚達摩 <small>もくぎだるま</small>	二六
目目連 <small>もくもくれん</small>	二〇

紅葉狩 もみじがり 一五四
 百々爺 ももんじい 一二五
 茂林寺釜 もりんじのかま 一七三

や

鳴屋 やなり 一三四
 山姥 やまうば 一五
 山嵐 やまおろし 二四四
 幽谷響 やまびこ 一三
 山童 やまわらわ 一四
 鎗毛長 やりけちよう 二三

ゆ

幽霊 ゆうれい 四八
 雪女 ゆきおんな 四五

よ

夜啼石 よなきのいし 一七五

ら

羅城門鬼 らじようもんのおに 一七四

ろ

飛頭蛮 ろくろくび 四三

わ

わいら わにゆうどう 五四
 輪入道 九六

図版クレジット

■画図百鬼夜行

所蔵：川崎市市民ミュージアム

撮影：奥西淳二

■今昔画図続百鬼

所蔵：東北大学附属図書館

■今昔百鬼拾遺

(雲・雨)

所蔵：川崎市市民ミュージアム

撮影：奥西淳二

(霧)

所蔵：日比野聖巳

撮影：ツートップ／鴨下誠

■百器徒然袋

所蔵：川崎市市民ミュージアム

撮影：奥西淳二

とり やま せき えん が ず ひ や つ き や こう ぜん が し ゅ う
鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

とり やま せき えん
鳥山石燕



角川文庫 1388I

平成十七年七月二十五日 初版発行

平成十九年二月二十日 九版発行

発行者―井上伸一郎

発行所―株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話・編集 (〇三) 三二三八―八五五五

〒一〇二―八〇七八

発売元―株式会社角川グループパブリッシング

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話・営業 (〇三) 三二三八―八五二一

〒一〇二―八一七七

<http://www.kadokawa.co.jp>

印刷所―旭印刷 製本所―BBC

装幀者―杉浦康平

本書の無断複製・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

角川文庫発刊に際して

角 川 源 義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であつた以上に、私たちの若い文化力の敗退であつた。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかつたかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとつて、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあつた。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあつた我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎すためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも願みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもつて出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレットタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の榮ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

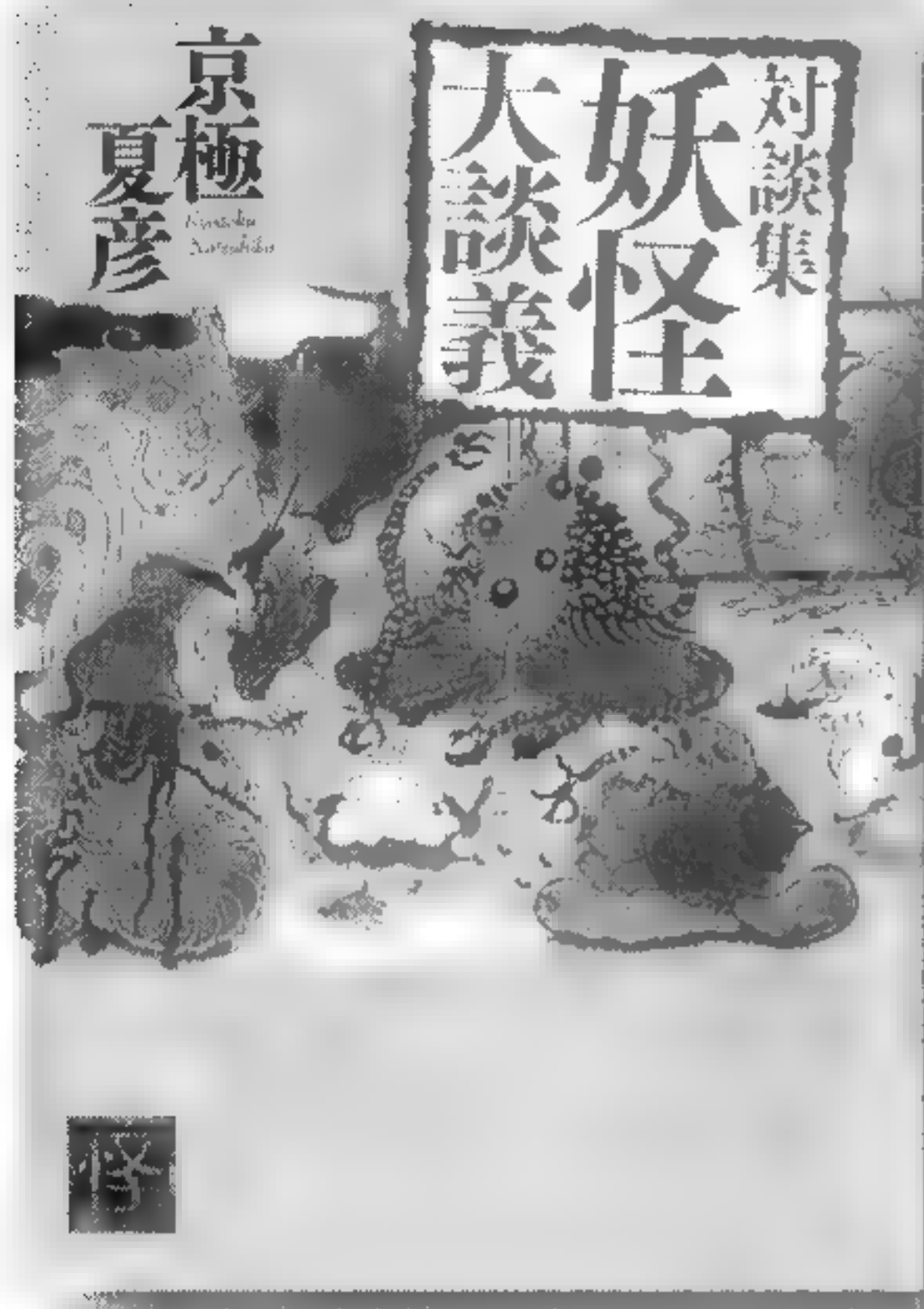
一九四九年五月三日

怪

大いに怪を語る。

各界の「怪しいものには一家言ある」御仁たち
15人と語りに語った、京極夏彦初の対談集！

対談集 妖怪大談義 京極夏彦



四六判上製◆角川書店

水木しげる
養老孟司
中沢新一
夢枕獏
アダム・カバット
宮部みゆき
山田野理夫
大塚英志
手塚眞
高田衛
保阪正康
唐沢なをき
小松和彦
西山克
荒俣宏

怪

妖怪を知らずして、
日本の伝統文化は語れない!!

日本妖怪大事典

水木しげる 画
村上健司 編著



いにしえ

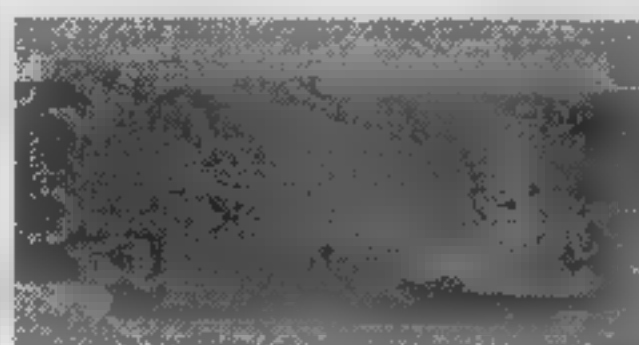
古から現代まで、全国津々浦々に跳梁跋扈し語り継がれてきた妖怪たちが、この一冊でわかる“妖怪事典の決定版”。

角川書店 A5判並製

小松和彦

の本

古来、未知のものに対する恐れを異界の物語に託してきた日本人。時間の流れが歪む向こう側の世界で繰り広げられた酒吞童子、浦嶋太郎、七夕の伝説や義経の「虎の巻」など数多の物語を絵巻から読み解き、日本人の隠された精神生活にせまる、画期的異界論。



小松和彦

絵物語の想像力
異界と日本人

異界を覗くと、
日本人の想像力が見える。

妖怪研究の第一人者が贈る画期的異界論。

角川選書

角川選書



角川文庫

神隠し……それは人を隠し、神を現わし、人間界の現実を隠し、異界を顕わすヴェール。これは人を社会的な死、即ち「生」と「死」の間に置く装置であつた。だからこそ「神隠し」という語には甘く柔らかい響きがたたよう……。異界研究の第一人者が「神隠し」をめぐるフォークロアを探訪し、日本人の異界コスモロジーを解明する。

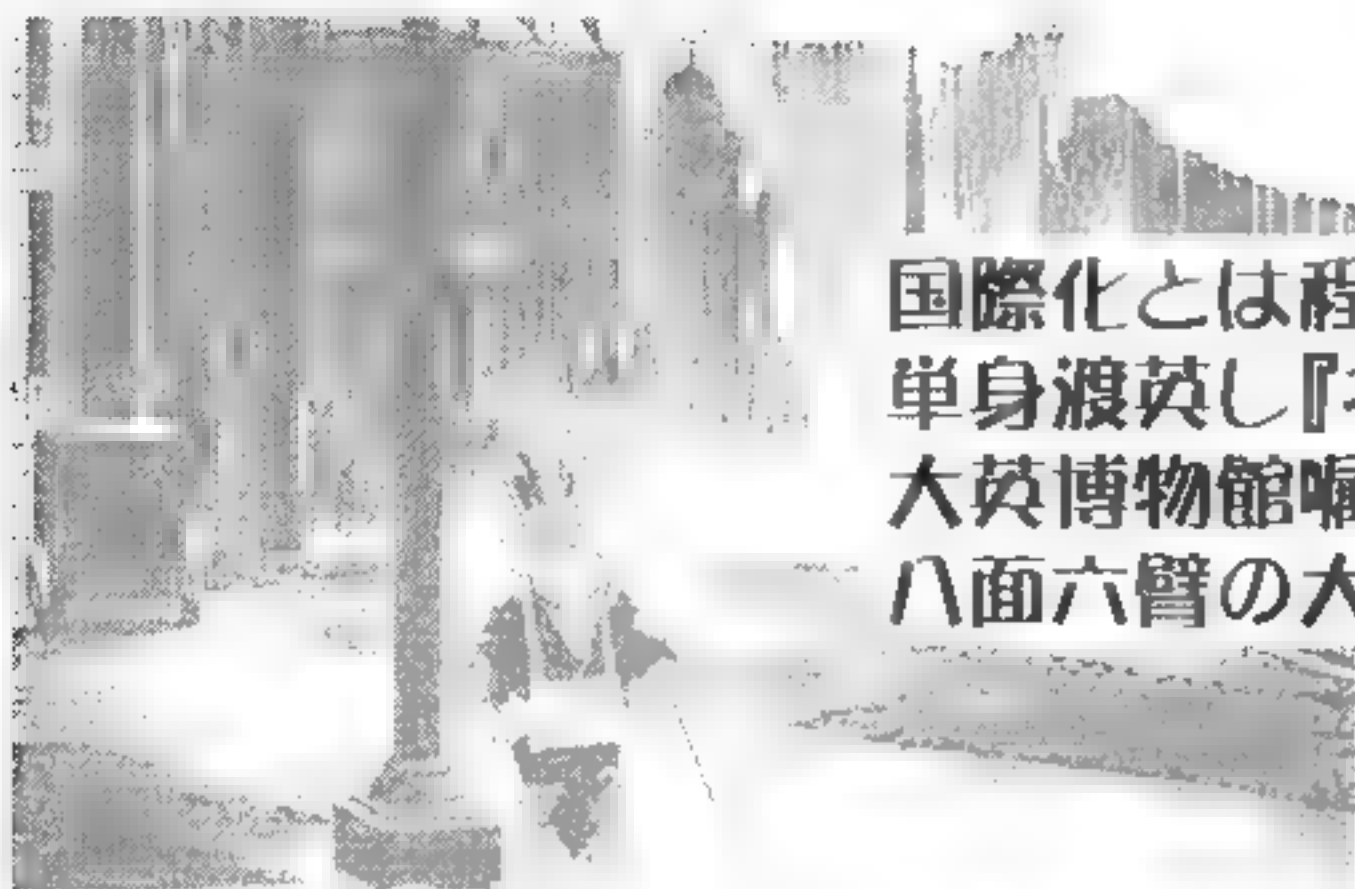
猫楠

neko gusu

みなかたくまぐす

—— 南方熊楠の生涯 ——

水木しげる



国際化とは程遠い明治中期の日本…。
単身渡英し『ネイチャー』誌に寄稿、
大英博物館嘱託員になるなど、
八面六臂の大活躍。

帰国後は民俗学、粘菌学
研究の傍ら神社台祀令反対や
熊野の森の保護運動など時代の
先をいく活動が世間を驚かせた。

水木しげる



水木しげる

猫楠



角川ソフィア文庫

そんな日本史上最も
バイタリティ溢れた大怪人の
半生を、妖怪博士水木しげるが
独特のベーススを交えて
描く意欲作！

角川ソフィア文庫

○ きつね
狐火



面図百鬼夜行……………二四

きつね び
狐火

神秘家列伝

角川ソフィア文庫

●其ノ壺収録作品●

科学に飽き足らず、靈魂の探究に生涯を捧げたスウェーデンボルグ。苦行に耐え、瞑想によってすべてを超越した大呪術師、ミラレバ。ヴードゥーの神官にして奴隷解放運動の偉大なる指導者、マカンダル。修行のため自らの耳を削ぎ、神秘体験を「夢記」に記した霊能者、明恵。



●其ノ貳収録作品●

中世に活躍した陰陽師の第一人者、安倍晴明。明治時代、数々の不思議現象を起こした神女、長南年恵。シャーロック・ホームズの作者にして実は熱心な心靈主義者、コナン・ドイル。多くの執筆活動で度々投獄されながらも時の不条理に戦いを挑んだ宮武外骨。

●其ノ参収録作品●

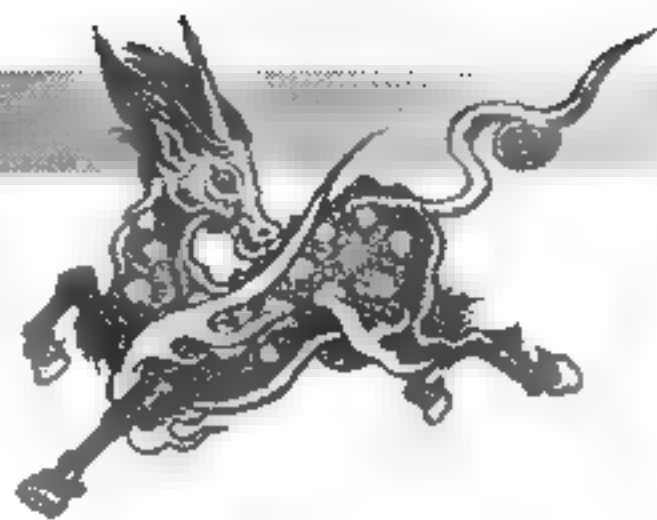
明治から昭和にかけ、神界と交信しつつ世の大本を説いた出口王仁三郎。神通力を発揮し庶民のために尽力した修験道の開祖、役小角。迷信否定のため各地を廻り奇談を拾集した東洋大学の創始者、井上円了。国学者であり神道、幽界への造詣も深かった平田篤胤。

●其ノ四収録作品●

福の神と呼ばれ人々に愛された男、仙台四郎。平田篤胤も研究した特殊能力の持ち主、天狗小僧寅吉。多芸多才でその名を轟かせた大人物、駿府の安鶴。民俗学の第一人者、柳田国男。恐がりなのに怪奇小説作家となった泉鏡花。



怪



水木版

妖怪大戦争

水木しげる
原案 荒俣宏

大好評発売中

麒麟送子となったタダシは、世界の平和を守るため、聖剣を手に妖怪たちと協力して悪に立ち向かう！妖怪研究の第一人者、水木しげるが独自の味付けでマンガ化！小説とも映画とも一味違う「妖怪大戦争」!!



妖怪大戦争

荒俣宏



◆角川文庫

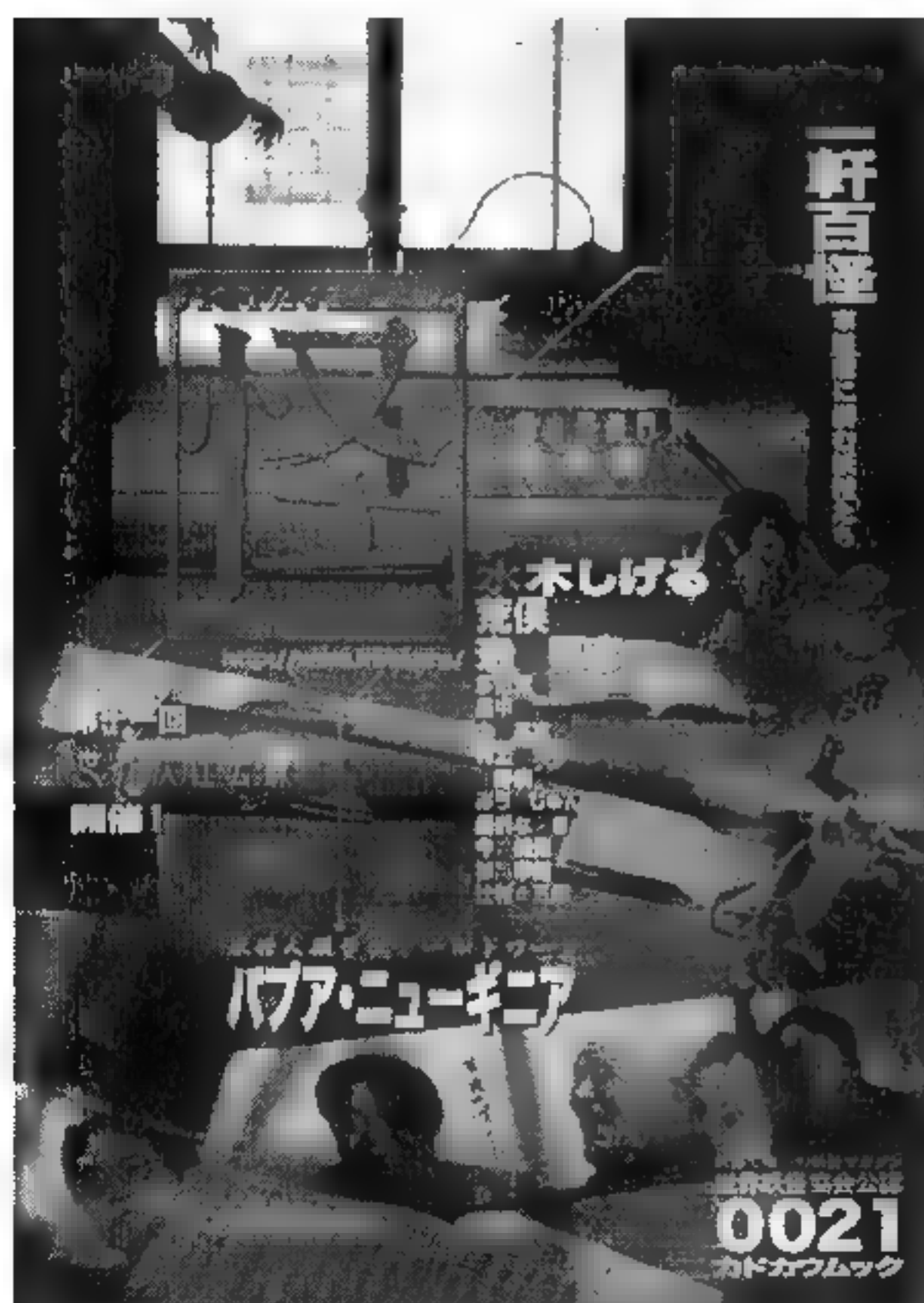
好評の
映画の
大原作

「麒麟送子に選ばれし子供は、守り神の大天狗より伝説の剣を授かり、世界平和を守る正義の味方となる——」田舎に越してきたタダシは、なぜかこの大役選ばれ、天狗の山で不思議な妖怪スネコスリと友達になる。同じ頃、日本各地で不可解な事件が勃発。化け物が人間を襲い、妖怪までもが窮地に追い込まれていた。

タダシとともに悪と戦う決意をした妖怪たち。タダシは悪霊の魔手から世界を守り真の麒麟送子になれるのか？愛と平和の一大冒険ファンタジー！

怪

“見えない世界”を描きだす 世界で唯一の妖怪マガジン



水木しげる、荒俣宏、
京極夏彦ほか妖怪感度
200%の豪華執筆陣による
妖怪雑誌。



「怪」好評発売中！

妖怪情報満載のインターネットサイト <http://www.kwai.org/>



○ 絡新婦 じよろうぐも

○ 鼬 てん

○ 叢原火 そうげんび

○ 釣瓶火 つるべび

○ ふらり火 び

○ 姥が火 うばひ

○ 火車 かしゃ

○ 鳴屋 やなり

○ 姑獲鳥 うよめ

○ 海座頭 うみざとう

○ 野寺坊 のてらぼう

○ 高女 たかじよ

○ 手の目 てめ

○ 鉄鼠 てっそ

○ 黒塚 くろづか

○ 飛頭蛮 ろくろくび

○ 逆柱 さかばしら

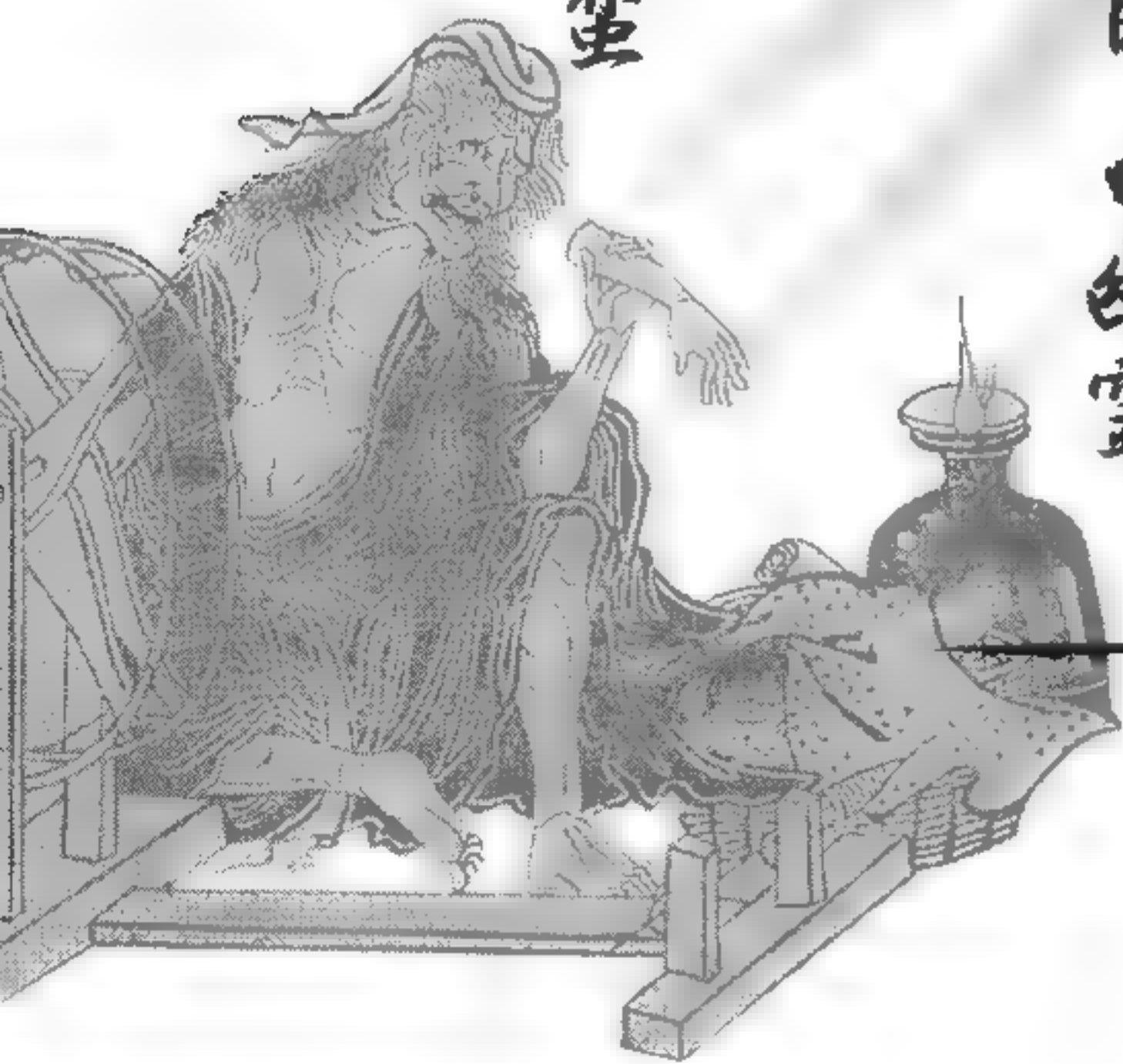
○ 反枕 まくらかえし

○ 雪女 ゆきおんな

○ 生霊 いきりよう

○ 死霊 しりよう

○ 幽霊 ゆうれい

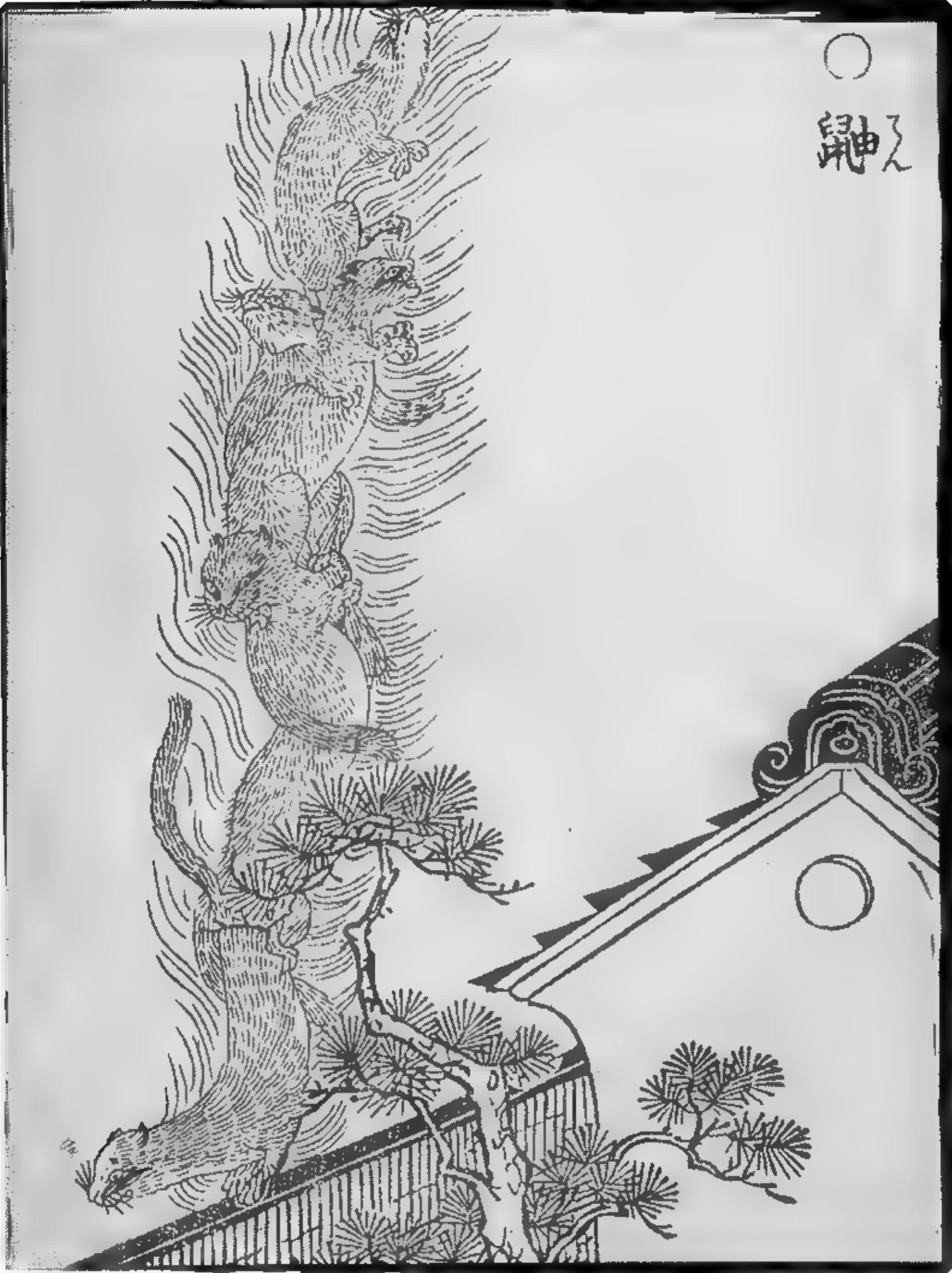


〇
 じょうろうぐも
 絡新婦



じょう ろう ぐも
 絡新婦

○
鼯ムササビ



西園百鬼夜行……………二八

ムササビ
鼯

○ 叢原火 そうげんひ

洛外西院の南王生寺の
かきうより俗これを朱
雀の宗源火といふ



そう げん び
叢原火

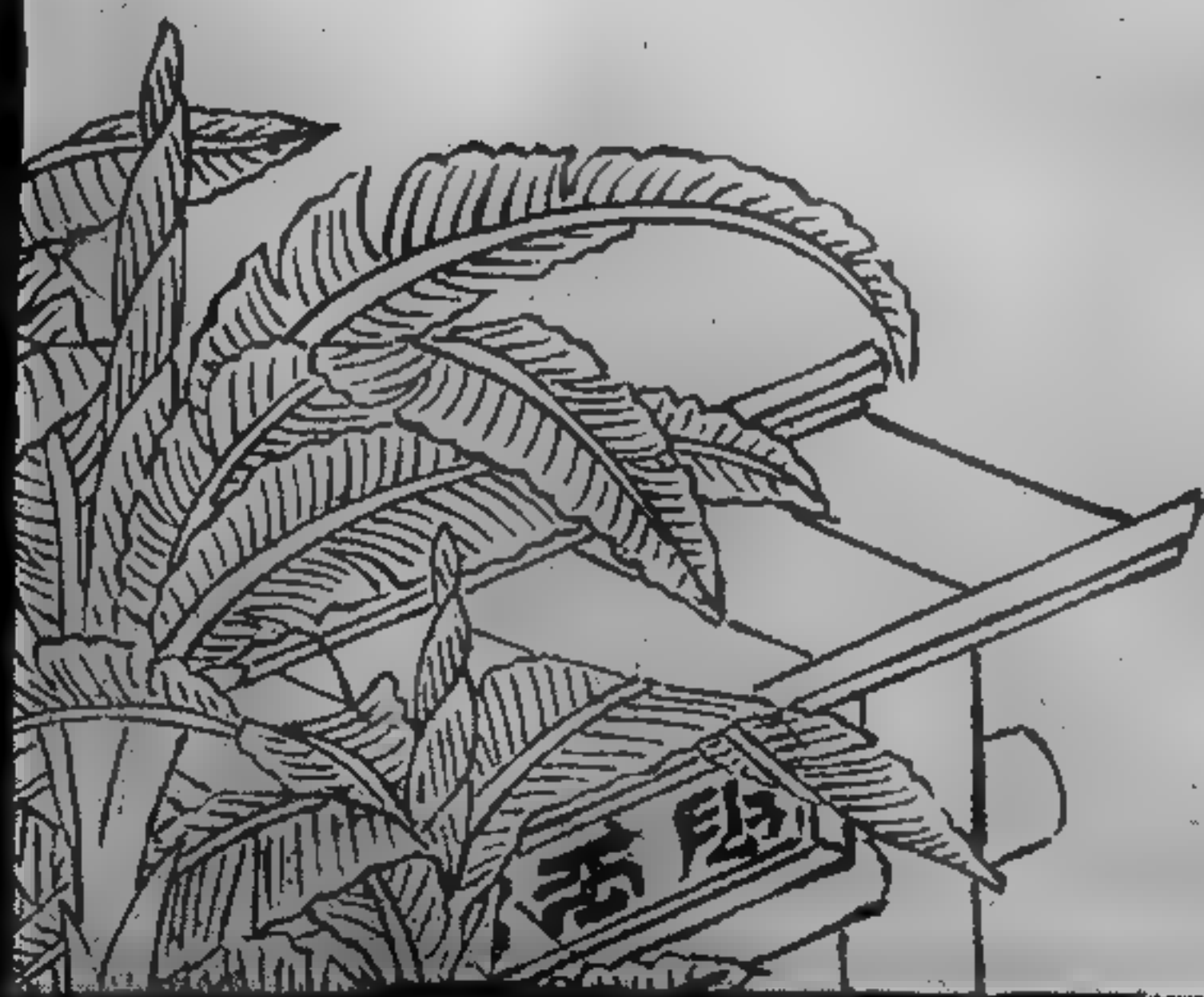
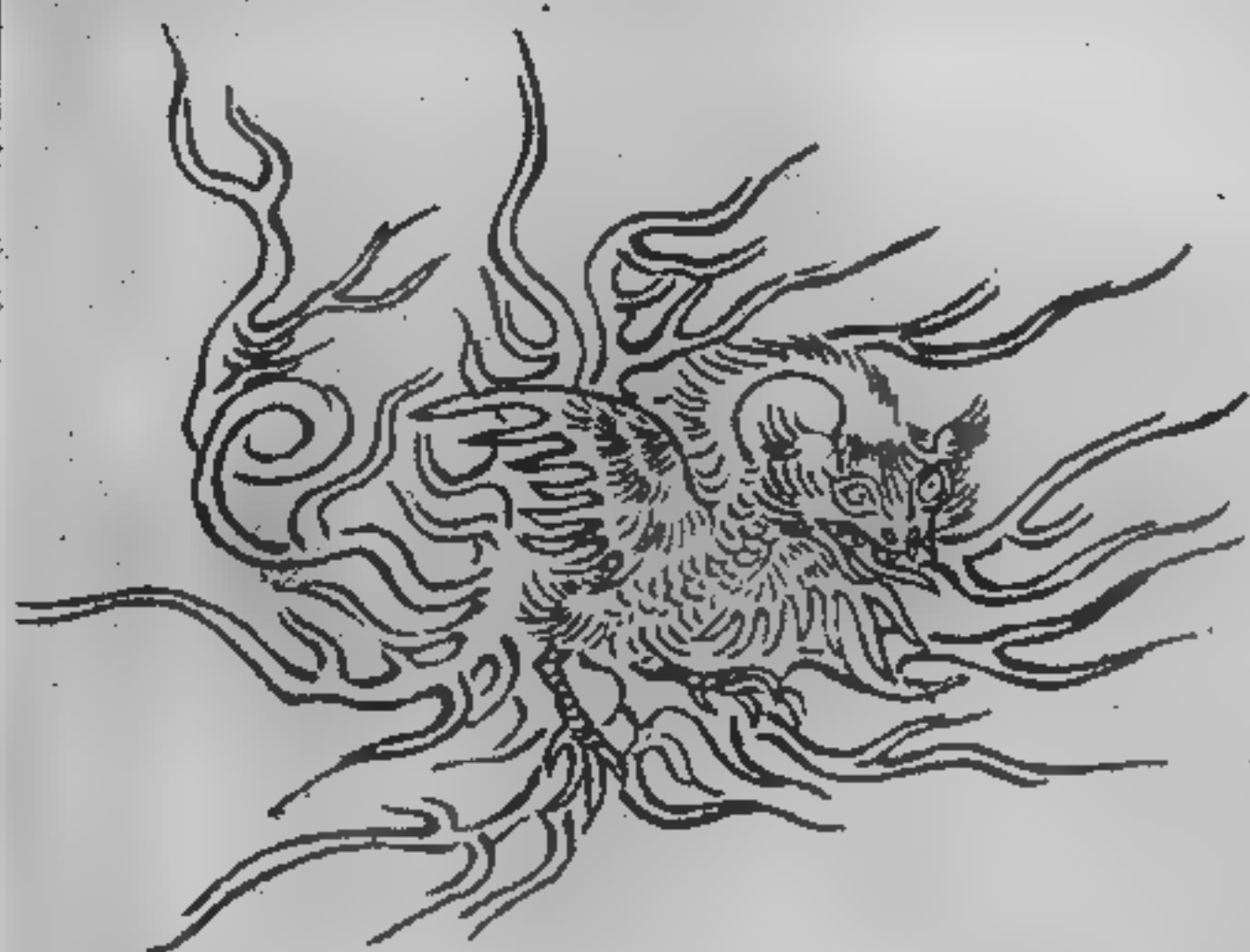
洛外西院の南、王生寺のほとりにあり。俗これを朱雀の宗源火といふ。



○ つるべ
釣瓶火

つるべ
釣瓶火

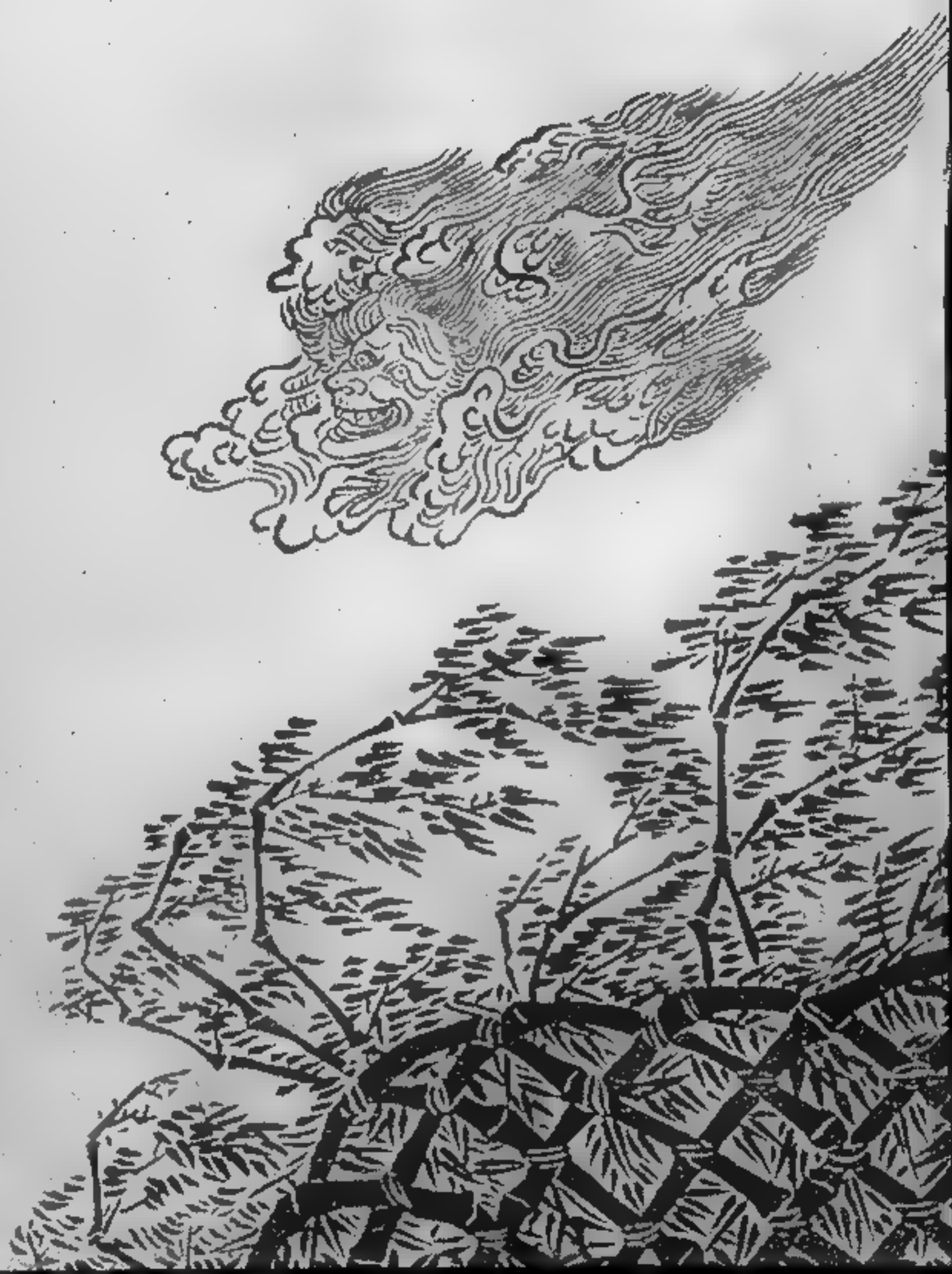
○ふらり火



ふらり^ひ火

○姥が火

河内玉ありといふ



幽国百鬼夜行……………三二

^{うば}姥が^ひ火

河内国にありといふ。

○火車くわしゃ



陽.....三三

か
しや
火車

○
鳴屋



鳴屋可鬼夜行……………三四

や な り
鳴屋

○姑獲^{うぶめ}子



うぶめ
姑獲鳥

○
うみざとう
海座頭



面四百鬼夜行……………三六

うみ ざ とう
海座頭

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

鳥山石燕



角川文庫 13881

○の
野寺坊



の であら ぼう
野寺坊

○
二
三
女



幽霊百鬼夜行……………三八

たか じよ
高女



てめ
手の目

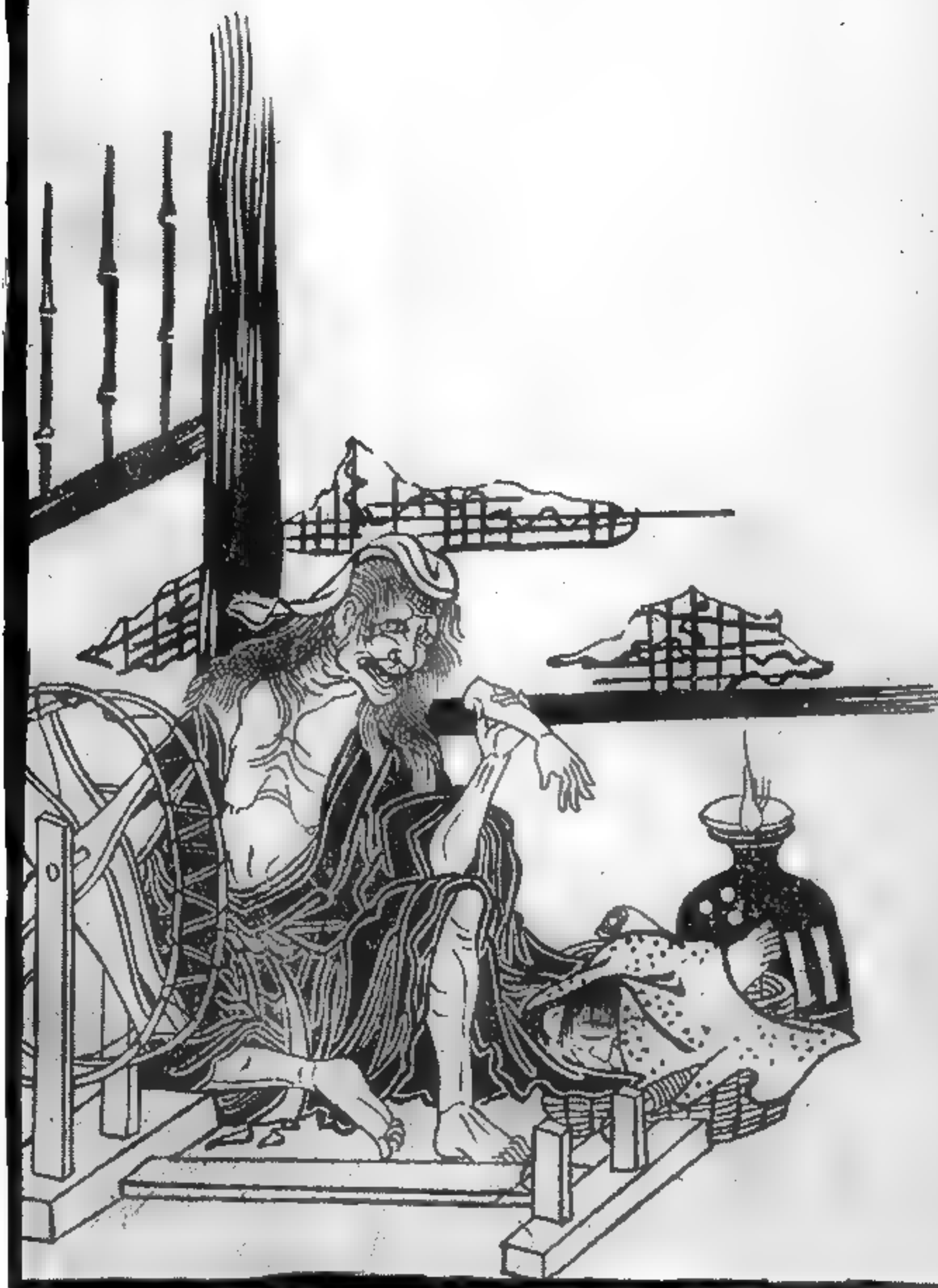


○
てつ
鼠
れい
豪の
霊鼠
と化
と
世に
する
所也

れい
豪の
霊鼠
と化
と
世に
する
所也

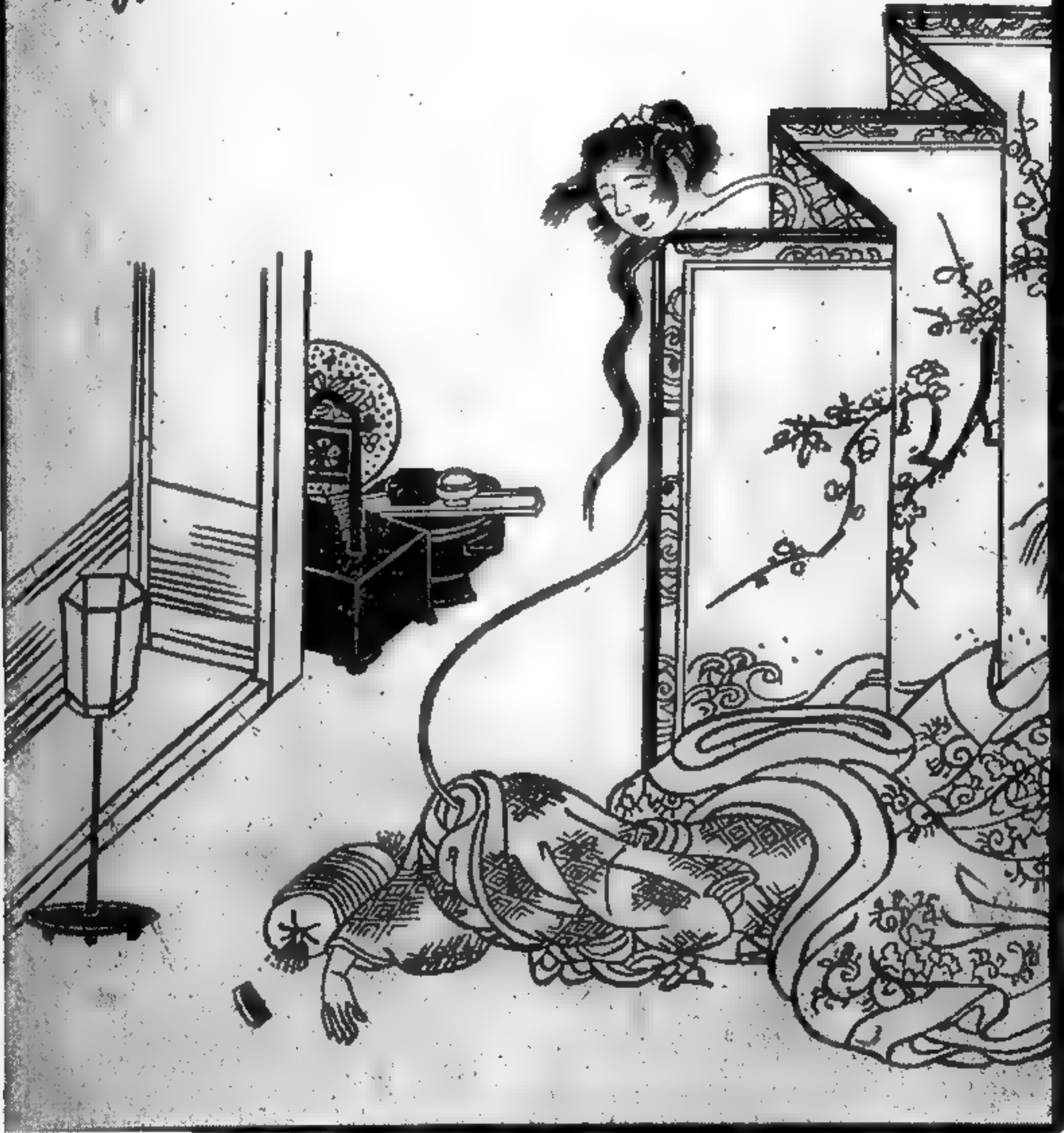
てつ
鼠
鉄鼠

くろづか 奥州安達原にありし
 ○黒塚 鬼 古歌にもきこゆ



くろづか
黒塚

奥州安達原にありし鬼。古歌にもきこゆ。



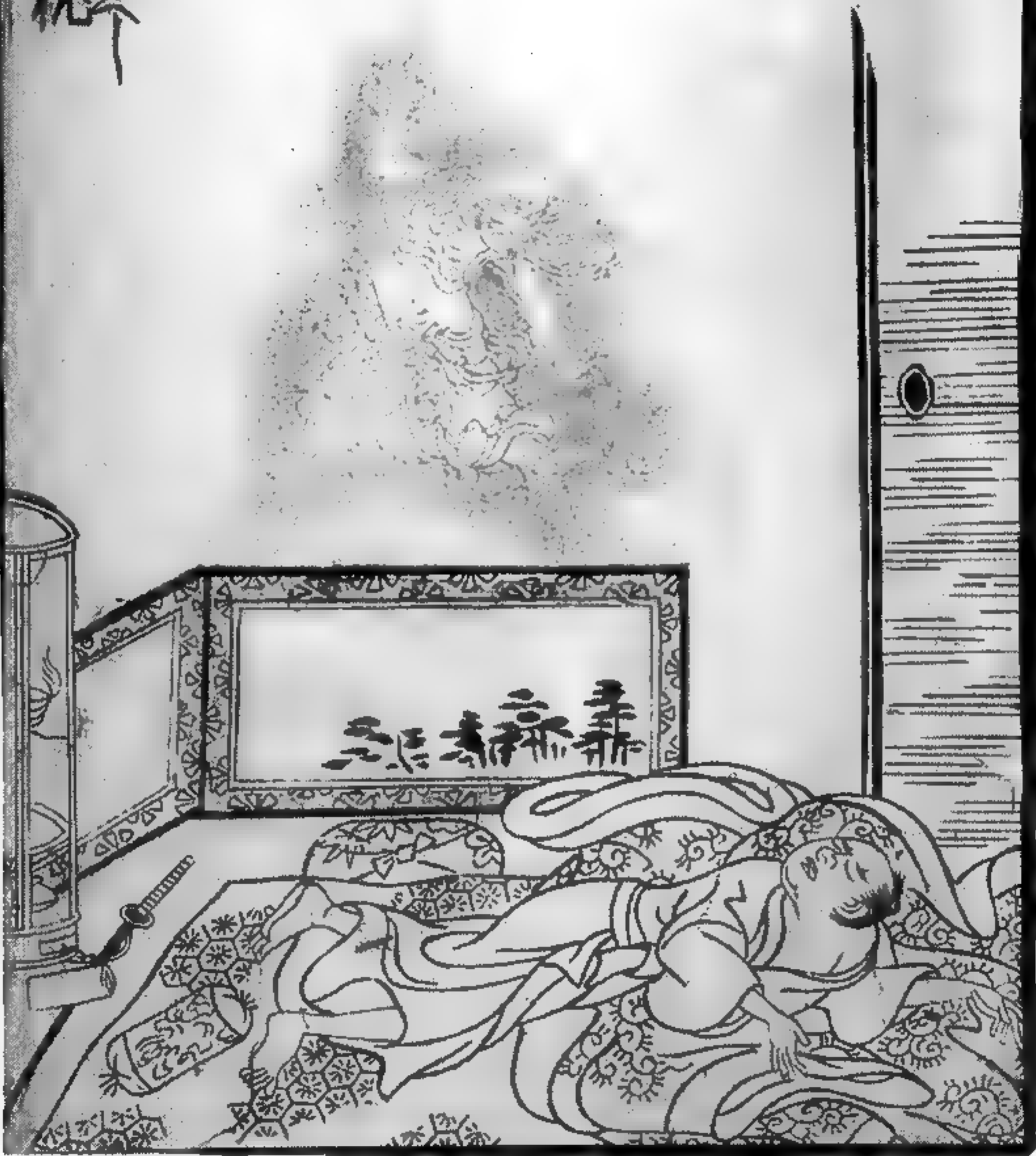
ろくろくび
飛頭蚤

ろくろくび
飛頭蚤

さかばしら
逆柱



さかばしら
逆柱



○まくら
反枕

まくらがえし

反枕

ゆきおんな
○雪女



ゆき おんな
雪女

○いきり
生霊



幽園百鬼夜行……………四六

いきりよう
生霊

○死霊



しりよう
死霊

○
幽霊



幽霊百鬼夜行……………四八

ゆう れい
幽霊



〇見越みこし

〇しようけら

〇ひようすべ

〇わいら

〇おとろし

〇塗ぬりぼんけ仏

〇濡ぬれおんな女

〇ぬらりひよん

〇元興寺がどぜ

〇芋おうに

〇青坊主あおぼうず

〇赤舌あかした

〇ぬっぺっぽう

〇牛鬼うしおに

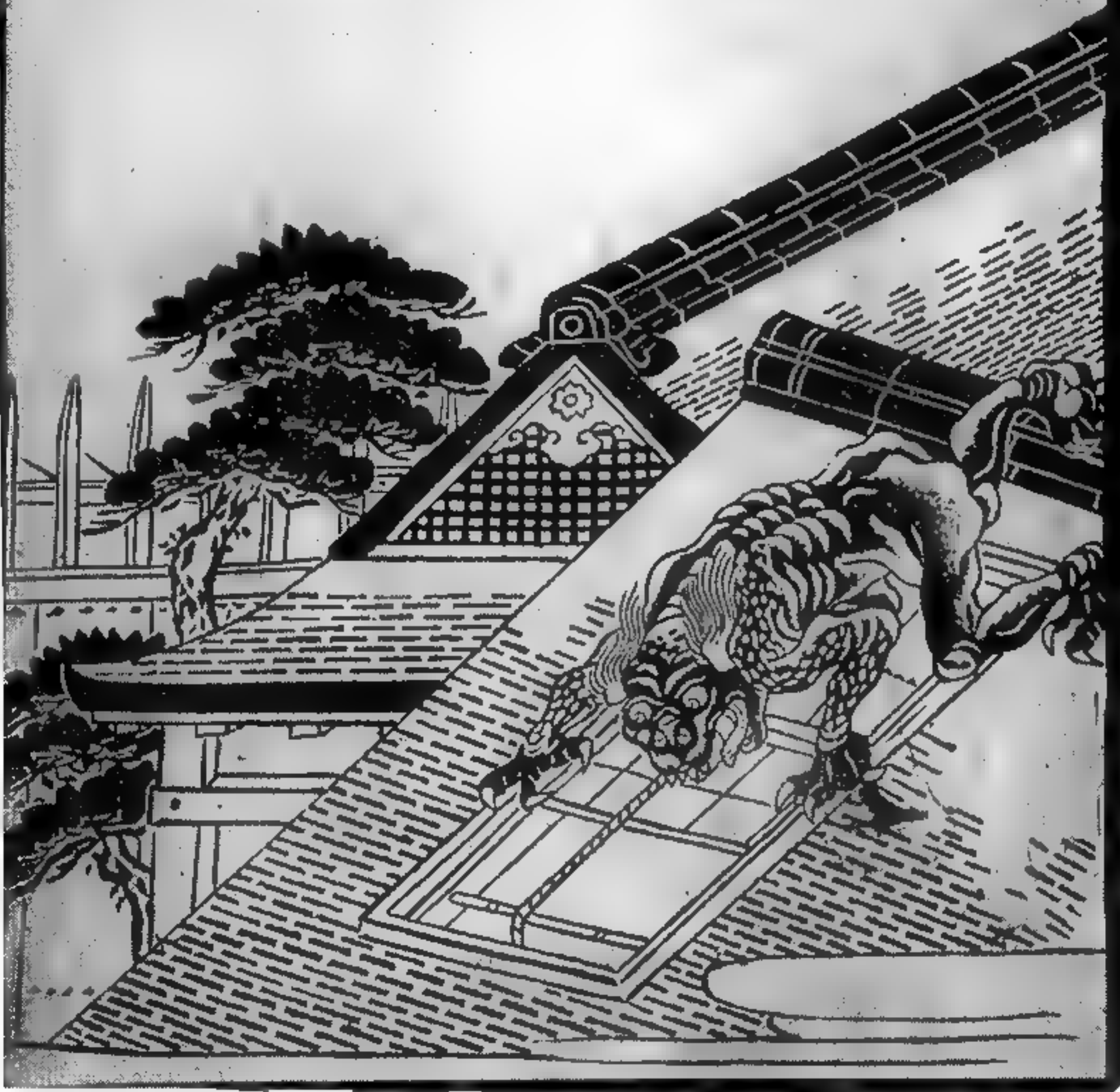
〇うわん



○見越



みこし
見越



○せうけら

しょうけら

○ふふふ



ひょうすべ



わいら

○おとろし



おとろし



ぬりやとけ
○塗佛

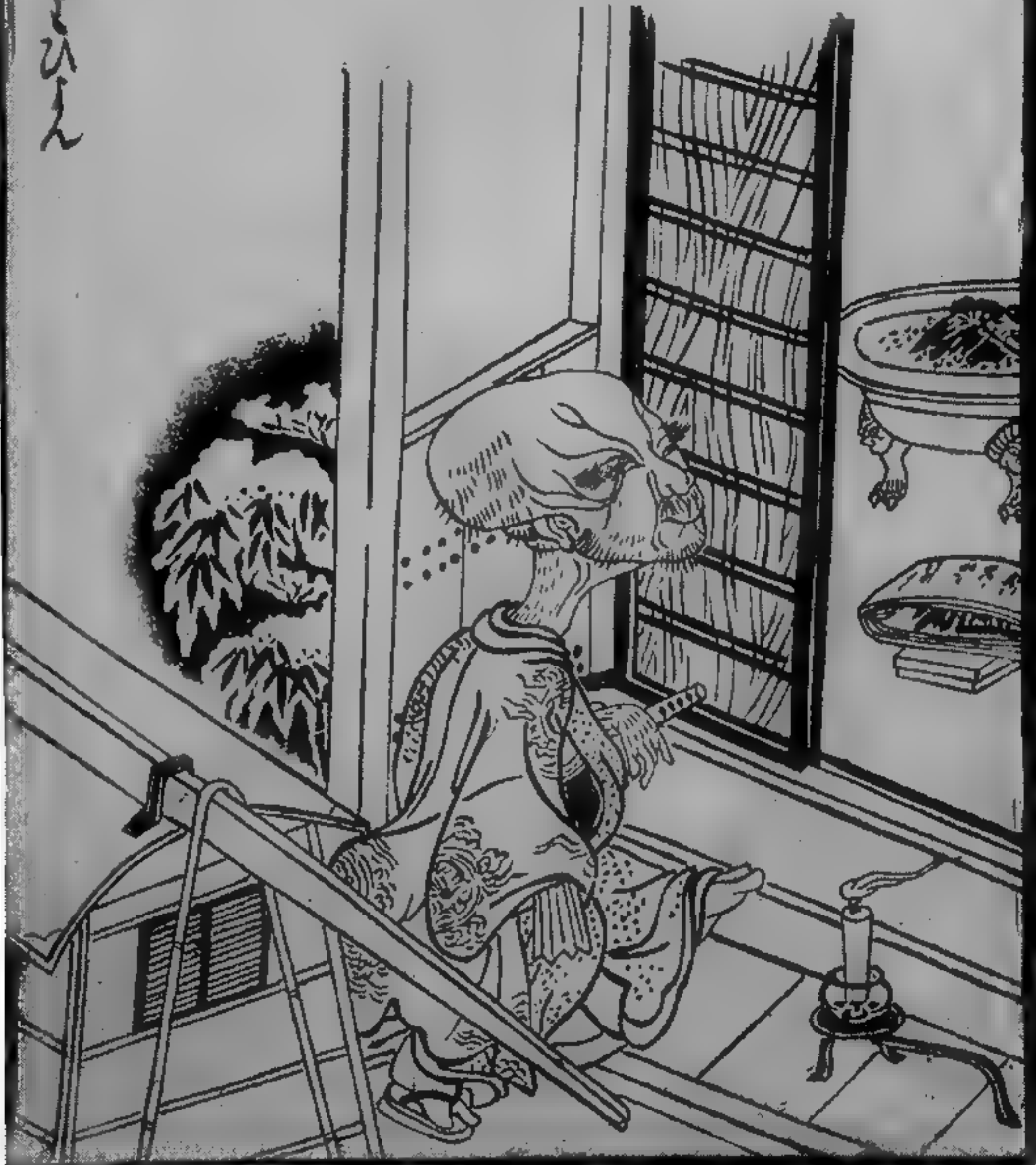
ぬり ぼとけ
塗仏

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

ぬれさんち
○濡女



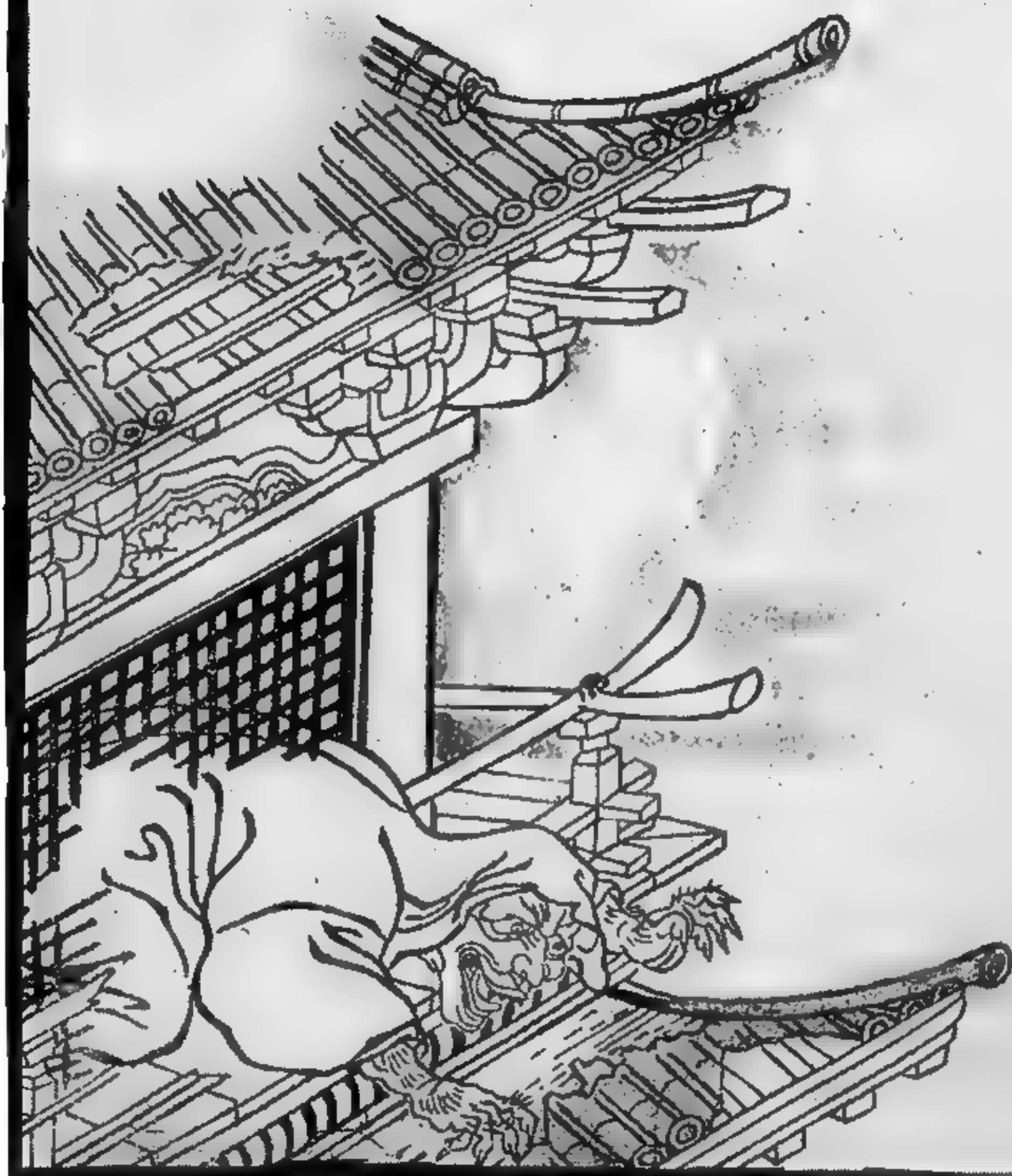
ぬれ おんな
濡女



○ぬらりひょん

ぬらりひょん

○
元興寺



が げ
元興寺



お
芋うに

○ あおぼうず
青坊主



あお ぼう ず
青坊主



○
赤舌

あか した
赤舌

○ ぬっぺぽう



ぬっぺぽう

○
牛鬼^{おに}



幽圖百鬼夜行……………六四

うし おに
牛鬼

○
うわん



うわん

跋文

詩は人心の物に感じて声を発するところ、画はまた無声の詩とかや。形ありて声なし。そのことぐによりて情をおこし感を催す。さればもろこしに山海經吾朝に元信の百鬼夜行あれば、予これに学てつたなくも紙筆を汚す。ときに書林何某需るに頻なれば、いなみがたくて桜木にうつしぬ。よしそれ童蒙の弄ともならんかし。

きのとの末の秋菊月於月窓下石燕自跋

もくじ

画図百鬼夜行 七

陰 九

陽 二五

風 四九

今昔画図続百鬼 六七

雨 七一

晦 八七

明 一〇九

今昔画図続百鬼

百鬼夜行題辭

曰維^{こゝに}絵事を觀に、墨画に由して丹青を生ず。是れ猶を大篆に由して而して八分を生じ、結繩よりして而して六經有るがごとし。夫れ書と画とは厥の体を同ふして、俱に文房の雅具なり。然して古の人にして古への画を画くに、厥の雅を要せずして焉に自ら雅なり。今の人にして古の画を写す、尤も其の俗なり易きを患ふるのみ。^{こゝをもつて}茲用世其の画を善くして伝神の妙に至る者を得難し。^{このころ}属都下の画人石燕なる者、画譜三卷を著す。命けて百鬼夜行と曰ふ。詮虎を介として余に告げて曰く、願くは師の題言を得て以て之を木にせんと。燕子は余未だ其の面を識らずと雖も、余と詮虎と善し。因て諾す。余時に^{をこりこつ}店作て伏すと雖も、力て目^{つとめ}を寓することを獲たり。乃ち嘆じて曰く、美なる哉、燕子が枝（技を）為す、一に此の極に至ることや。奇なることは則ち驢を画て僧を悩す。逸ることは乃ち筆を誤りて牛を成す。況や此の譜、其の変態（態）百体、細閱するに一々觀を改む。廼ち多日の瘴熱を一洗することを覚ふ。謂つべし、手に得、心に応じて精妙に至る者なりと。余素より絵の事若しくは六法を知る者に匪ず。然りと雖ども、試に此を以て古の画譜と云ふ者に方ぶるに、筆の精しきこと孔^{はなはだ}之惟れ肖たり。是に於て知んぬ、燕子が此の芸に於ける庸庸の人に同じからざることを。世の茲の技に精しき輩ら概見して曙すべし。

時に

安永戊戌季秋の日

頑菴道人東都日莫里吉祥林の穿牛觀に題す。

もゝの鬼のよる行有さま、ふるき世よりつたへて上手どものうつしたる、家／＼にひめをけるを、人の需にてをろかなる筆にも写し侍りし。目に見えぬ鬼のかほをおどろ／＼しく書出ぬる事は、じちにはいたらめど、人の目おどろかす斗の事も有ぬべしと、めづらかにけうときかたちどもをたはぶれのてに又かきこゝろみ侍ぬ。されどかゝる絵たび／＼書るをめでゝ誠の鬼などのあらはれいでは、何がしが龍のたつひにいかばかりおそろしかりなるとかい撫侍るを、書の林のあるじが見いでゝ、さきのとしの一卷につがんとせちに乞侍れば、いなみがたくてこれを上るといふ事を、鳥山石燕みづから毫を月窓のもとにとる。



○逢魔時 おうまがとき

○鬼 おに

○山精 さんせい

○魃 ひてうがみ

○水虎 すいこ

○覓 さとり

○酒顛童子 しゅてんどうじ

○橋姫 はしひめ

○般若 はんにや

○寺つつき てら

○入内雀 にゆうないすずめ

○玉藻前 たまものまえ

○長壁 おさかべ

○丑時参 うしのときまい





逢魔時

おう まが とき
 黄昏をいふ。百魅の生ずる時なり。世俗小児を
たそがれ ひやくみ せう
 外にいだす事を禁む。一説に王莽時とかけり。
いまし せつ わうもがとき
 これは王莽前漢の代を纂ひしかど、程なく後漢
わうもうぜんかん うば ごかん
 の代となりし故、昼夜のさかひを兩漢の間に比してかくいふならん。
ちうや りやうかん ひ

逢魔時

逢魔時をいふ百魅

の生る時あり

世俗小鬼を外

はつとすと

林一説

は王莽時とかけり

これハ王莽前漢の代と

養ひくと後漢の代と

の代とあり一ハ王莽

の代とあり一ハ王莽

の代とあり一ハ王莽





鬼

丑寅の方を

鬼門といふ今鬼の

形を画くには頭を牛角

をいたゞき腰に虎皮を

まとふ是丑と寅の二つ

を合せてこの形とせり

といふ

おに
鬼

よ うしとら きもん おに かたち まが かしら うしのつ
世に丑寅の方を鬼門といふ。今鬼の形を画くには、頭に牛角
をいたゞき腰に虎皮をまとふ。是丑と寅との二つを合せて、
この形をなせりといへり。

山精

とろろー安国縣に山鬼あり人の如くして
一足なり伐木人のもてる鹽をぬすみ石蟹

を炙りくらふと

永嘉記

見えたり



山精

もろこし安国縣に山鬼あり。人の如くにして一足なり。
伐木人のもてる鹽をぬすみ、石蟹を炙りくらふと、永
嘉記に見えたり。



魃

一名を旱母といふ。もろこし剛山にすめり。その状、人面にして獸身なり。手一つ足一つにして走る事、風の如し。凡此神出る時は早して雨ふる事なし。

ひでりがみ

魃

一名を旱母^{かんぼ}といふ。もろこし剛山^{がうざん}にすめり。その状、人^{かたち}面^{ひとのおもて}にして獸身^{けものゝみ}なり。手^{あし}一つ足^{はし}一つにして走る事、風^{かぜ}の如し。凡此神出る時は早^{ひでり}して雨ふる事なし。

今昔百鬼拾遺 一三一

雲 一三五

霧 一五三

雨 一七三

百器徒然袋 一九一

上 一九三

中 二一一

下 二三三

解説 多田克己 二五一

索引 二五五

水虎

水虎はかたち小児のごとし。甲は鯪の
 のごとく膝。虎の爪は似たり。もろこし
 凍水の辺にすみ、つねに沙の上に甲を曝す
 といへり。

いふ



水虎

水虎はかたち小児のごとし。甲は鯪の
 のごとく膝。虎の爪に似たり。もろこし凍水の辺にすみ、つ
 ねに沙の上に甲を曝すといへり。



覺

飛彈美濃の深山に獲あり山人
呼と覺と名づく色黒く毛長く
よく人の言をなしよく人の意を察す
あへて人の害をなさん
と云先その意をさとてにけ去

さと
覺
と云。

ひだみの しんざん くはく やまびとよん さとり
飛彈美濃の深山に獲あり。山人呼で覺と名づく。色黒く毛長く
して、よく人の言をなし、よく人の意を察す。あへて人の害を
なさず。人これを殺さんとすれば、先その意をさとてにけ去

酒顛童子

大江山いく野の道に^{ゆき}行かふ人の財宝を
 と^{かすめ}掠とりて、^{つみ}積たくはふる事山のごとし。
 輓耕録にいはゆる^{きざう}鬼賊の類なり。むく
 つけき鬼の肘を枕とし、みめよき女に^{みづか}しやくとらせ、自ら大盃をかたぶ
 けて^{おに}樂めり。されどわらは^{がみ}髪に^ひ緋の袴きたるこそやさしき鬼の心なれ。末
 世に^{びやく}及んで白衣の化物出と^{せうげう}聖教にも侍るをや。



酒顛童子

大江山いく野の道に行かふ人の財宝を
 掠とりて、積たくはふる事山のごとし。
 輓耕録にいはゆる鬼賊の類なり。むく
 つけき鬼の肘を枕とし、みめよき女にしやくとらせ、自ら大盃をかたぶ
 けて樂めり。されどわらは髪に緋の袴きたるこそやさしき鬼の心なれ。末
 世に及んで白衣の化物出と聖教にも侍るをや。



はし ひめ
橋姫

はしひめ やしろ くにうぢ
橋姫の社は山城の国宇治橋にあり。橋姫はかほかたち
みにく はいぐう
いたりて醜し。故に配偶なし。ひとりやもめなる事を
まんべん ねたみ
うらみ、人の縁辺を妬給ふと云。



般若

^{はん} ^{にや}
 般若は経の名にして苦海をわたる慈航とす。しかるに
 ねためる女の鬼となりしを般若面といふ事は、葵の上
 の謡に、六条のみやす所の怨霊行者の経を読誦する
 をきゝて、あらおそろしのはんにや声やといへるより転じて、かくは称せ
 しにや。



てら 寺つつき

物部大連守屋は仏法をこのまず、^{むまや}厩^{れい}戸皇子のためにほろぼさる。その霊^{たま}一つの鳥となりて、堂塔伽藍を毀たんとす。

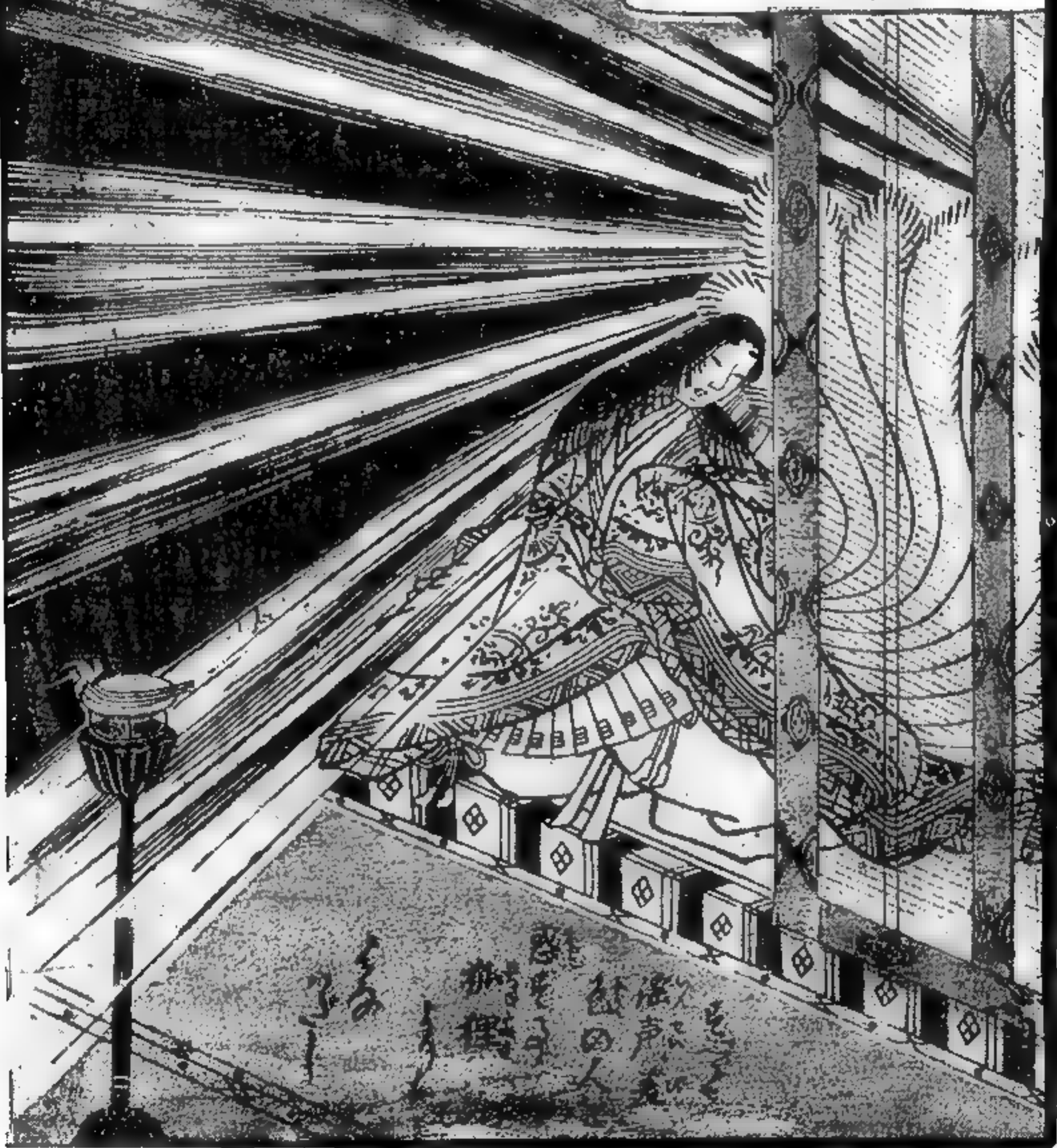
す。これを名づけて、てらつつきといふとかや。



にゆう ない すずめ
入内雀

ふぢはらのさねかたおうしう き せん
 藤原実方奥州に左遷せらる。その一念雀と化
 して大内に入り、台盤所の飯を啄しとかや。是
 にうないすずめ
 を入内雀と云。

玉藻前 たまものまえ
 瑯邪代酔 らうやたいすい
 古今事物考 ここんじぶつかう
 を引く ひき
 云 ひき
 商の いん
 姐巳 だつ
 の精 き
 なり きつね
 と云々 せい
 その精 せい
 本朝 ほんてう
 にわた りて
 りて玉藻前 たまものまえ
 となり ていおう
 帝王のおそば まどは
 をけがせし きつねたぬき
 と
 なる いんせいびしよく
 すべて淫声美色 いんせいびしよく
 の人 ひと
 を惑 まどは
 す事 こと
 狐狸 きつね
 よりも より
 は は
 な な
 は は
 だ だ
 し し

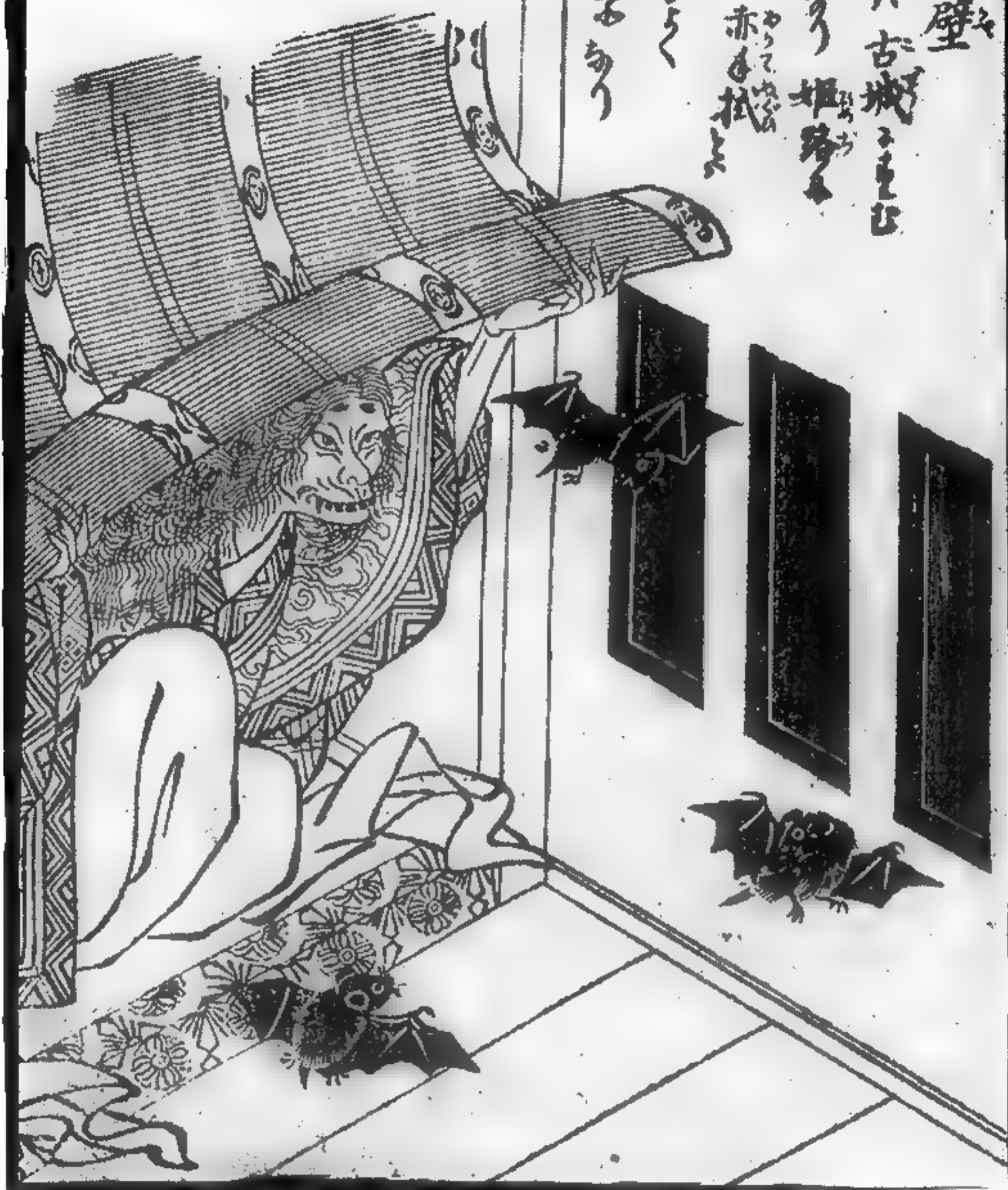


玉藻前

なん。すべて淫声美色の人を惑す事、狐狸よりもはなはだし。

瑯邪代酔に古今事物考を引て云、商の姐巳
 (己)は狐の精なりと云々。その精本朝にわた
 りて玉藻前となり、帝王のおそばをけがせしと
 なる。すべて淫声美色の人を惑す事、狐狸よりもはなはだし。

長壁^{おさかべ}ハ古城^{こぜう}ニすむ妖怪^{ようくはい}なり。
 姫路^{ひめぢ}ニおさかべ^{あかてぬぐひ}赤手拭^{あかてぬぐひ}
 童^{わらんべ}もよくする所なり。
 童^{わらんべ}もよく



おさ かべ 長壁

おさかべ^{こぜう}は古城^{ようくはい}にすむ妖怪^{ひめぢ}なり。姫路^{あかてぬぐひ}におさかべ^{あかてぬぐひ}赤手拭^{あかてぬぐひ}
 とは童^{わらんべ}もよくする所なり。



丑時参

丑時まうい、胸に一つの鏡をかくし、頭に三
つの燭を点じ、丑みつの比神社にまうで、杉の
梢に釘うつとかや。はかなき女の嫉妬より起り
人とうしなく人と失ひ身をうしなふ。人を呪咀ば穴二つほれとはよき近き警ならん。

うしの とき まいり
丑時参

て人を失ひ身をうしなふ。人を呪咀ば穴二つほれとはよき近き警ならん。



○不知火 しらぬい

○陰摩羅鬼 おんもらき

○青女房 あおにようぼう

○古戦場火 こせんじょうのひ

○皿かぞえ さら

○毛倡妓 けじようろう

○青鷺火 あおさぎのひ

○人魂 ひとたま

○骨女 ほねおんな

○提灯火 ちようちんび

○舟幽霊 ふなゆうれい

○墓の火 はかひ

○川赤子 かわあかど

○火消婆 ひけしばば

○古山茶の霊 ふるつばり

○油赤子 あぶらあかど

○加年波理入道 がなんばり にゆうどう

○片輪車 かたわぐるま

○雨降小僧 あめふりこぞう

○輸入道 わにゆうどう

○日和坊 ひよりぼう





しらぬい 不知火

つくし うみ けいこうてんわう みふね
筑紫の海にもゆる火ありて、景行天皇の御船を
むかへ うた
迎しとかや。されば歌にもしらぬひのつくしと
つゞけたり。



古戦場火
 一將功なりて万骨かれし枯野には
 燐火とて火のもゆる事あり

ありき血のこぼれ
 なる跡より

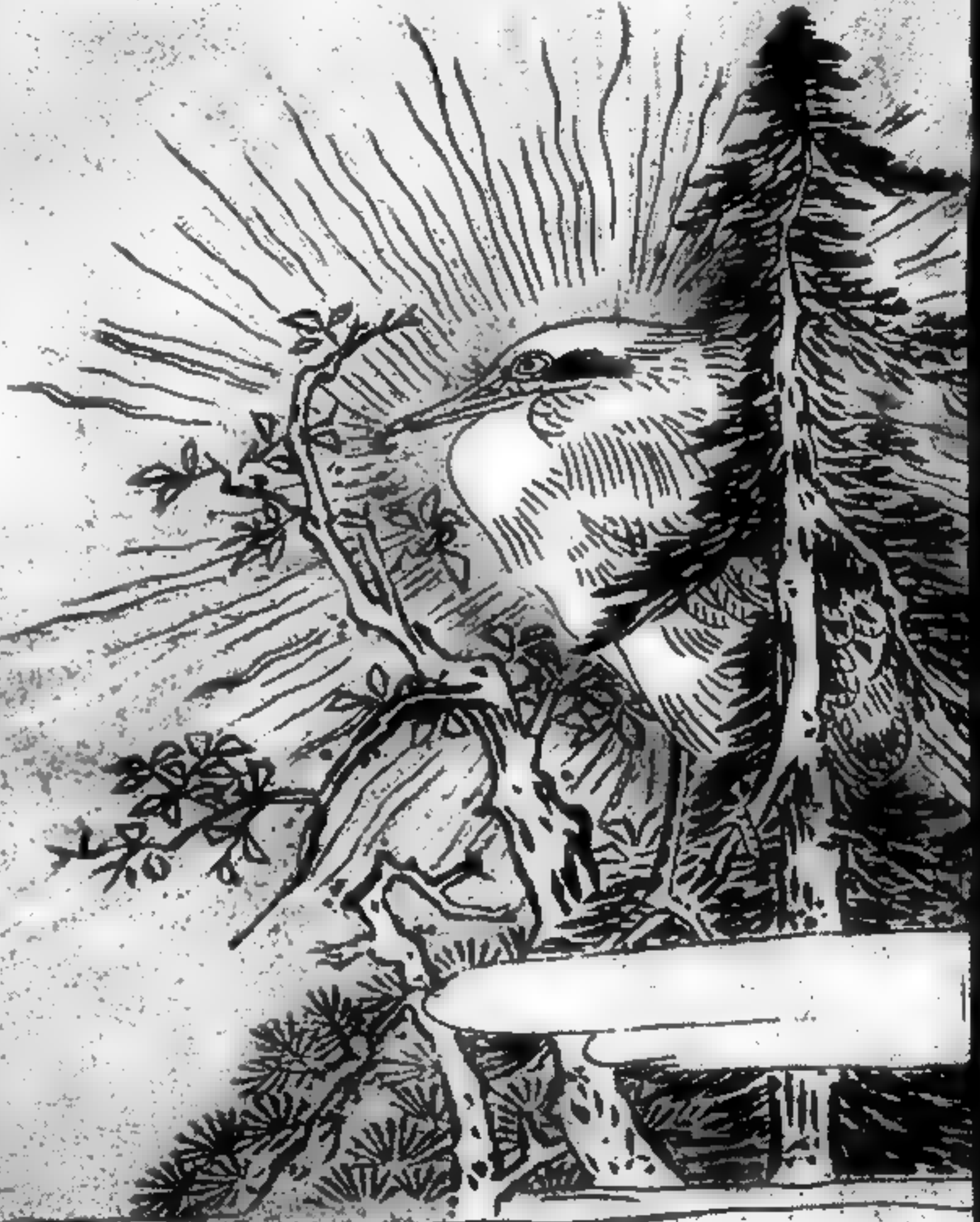
こ せん じょうの ひ
古戦場火

一將功なりて万骨かれし枯野には、
 燐火とて火のもゆる事あり。是は血の
 こぼれたる跡よりもえ出る火なりとい

へり。

あをさぎのひ
青鷺火

あをさぎ
青鷺の年を
経しは、夜
飛とき
はかならず
其羽ひ
かるもの
也。目の光
に映じ
鶯とがり
てすさま
じきと也。



あお さぎの ひ
青鷺火

あをさぎ へ よるとよ はね
青鷺の年を経しは、夜飛ときはかならず其羽ひ
かるもの也。目の光に映じ鶯とがりてすさまじ
きと也。



提燈火
 田舎などに
 提燈火として
 名にしよう
 提燈火
 田舎などに
 提燈火として
 名にしよう

提燈火

田舎などに提燈火として畔道に火のもゆる事あり。
 名にしおふ夜の殿の下部のもてる提燈にや。

墓の火

去るものは日々にとく

生ずるものは日々

したし

古きつかは

犁

田となり

しるしの

松は薪となりても、五輪のかたちありありと陰

火のもゆる事あるはいかなる執著の心ならんかし。

火の

火の

火の



墓の火

火のもゆる事あるはいかなる執著の心ならんかし。

去るものは日々にとく、生ずるものは日々にしたし。古きつかは犁れて田となり、しるしの松は薪となりても、五輪のかたちありありと陰火のもゆる事あるはいかなる執著の心ならんかし。



火消婆
それ火は陽氣なり。妖は陰氣なり。うば玉の夜のくらきには、陰氣の陽氣にかつ時なれば、火消婆もあるべきにや。

あつたば

火消婆

それ火は陽氣なり。妖は陰氣なり。うば玉の夜のくらきには、陰氣の陽氣にかつ時なれば、火消婆もあるべきにや。

油赤子



近江国大津の八町に玉のごとくの火飛行する事あり。土人云、むかし志賀の里に油をうるものあり、夜毎に大津辻の地藏の油をぬすみけるが、その者死て魂魄炎となりて今に迷ひの火となれりとぞ。しからば油をなむる赤子は此もの、再生せしにや。

油赤子

近江国大津の八町に玉のごとくの火飛行する事あり。土人云、むかし志賀の里に油をうるものあり、夜毎に大津辻の地藏の油をぬすみけるが、その者死て魂魄炎となりて今に迷ひの火となれりとぞ。しからば油をなむる赤子は此もの、再生せしにや。

片輪車



かた わ ぐるま 片輪車

あよみのくにかうがごほり おほ くるま
むかし近江国甲賀郡によなよな大路を車のきしる
おと 音しけり。ある人戸のすき間よりさしのぞき見る
うちに、ねやにありし小児せうにいつかたへゆきしか見

えず。せんかたなくてかくなん、へつみとがはわれにこそあれ小車のやるか
たわかぬ子をばかくしそ。その夜女のこゑにて、やさしの人かな、さらば子を
かへすなりとてなげ入レける。その、ちは人おそれてあへてみざりしとかや。

輪入道

車の轂に大なる入道の首つきたるが、かた輪にてをのれとめぐりありくあり。これをみる者は所勝母の里と紙にかきて家の出入の戸におせば、あへてちかづく事なしとぞ。



わ にゆう どう
輪入道

車の轂に大なる入道の首つきたるが、かた輪にてをのれとめぐりありくあり。これをみる者魂を失ふ。此所勝母の里と紙にかきて家の出

入の戸におせば、あへてちかづく事なしとぞ。